REC TECHNICAL REPORT No.0010

I S S N 0918-2861
RECT-SS360

〈ポーランド社会研究資料 ②〉

ポーランド家族の生活史 II

Life History of Polish Families II

大 山 信 義
Nobuyoshi OHYAMA

Mar. 1994

静 修 学 園

北海道環境文化研究センター
HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

〈ポーランド社会研究資料 ②〉

ポーランド家族の生活史 II

Life History of Polish Families II

大山信義

Nobuyoshi OHYAMA

静修学園

北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

大山信義

ポーランド家族の生活史 II

I 共同の巣のなかで ある職場リーダーの生活史
刻まれた葛藤 母と娘の戦争体験 ［以上、前稿］
II 若ものたちのポーランド ある家族の風景 ［以下、本稿］

はじめに

1．〈ポーランド社会研究資料〉として公表するいくつかの資料は、筆者が日本とポーランドの労使関係比較研究に参加した際に、現地のワルシャワ市およびラドム市で取材した口述生活史の記録である。そのうち前稿では〈ポーランド社会研究資料①〉として、ワルシャワで取材した２つの資料を公開し、これまでほとんど知られなかったポーランド社会の裏面史の一端を、口述者の語りの形式で示すことができた。以下の続稿で明らかにする資料は、ラドム市のポルメタルという国営工場ではたらく若い労働者の家を３日間にわたって取材したもので、現代ポーランドの若者文化や親子関係、親世代の暮らしぶりなどを明らかにしている。

2．1990年１月下旬から約２カ月にわたり、日本労働研究機構とワルシャワ中央計画統計大学（当時）の資金援助によって、両国の労使関係の比較調査が実施された。この調査の意図や方法や意義については前稿で詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。[1] このインタビュー調査は、ラドム市のポルメタル工場で面接調査を終えた夜６時ころから10時半くらいまで、ワルシャワ在住の社会学者などの協力を得て、従業員の家族を訪問して行われた。インタビューはまったくの自由形式である。本稿の表題は《若者たちのポーランド》としてあるが、このテーマはインタビューの当初から想定されていたわけではなく、ガスレンジを生産しているポルメタルの若い労働者をたまたま訪問し、筆者らとの語りのなかで生まれてきたテーマである。筆者が自由形式の生活史法をあえて採用しているのは、あくまで聞き手と話し手との相互作用の結果、偶発的に派生するテーマに、すべての対話過程を委ねているからである。

3．インタビューの現場は聴者が自由に質問し、話者がそれに応える形式で進行するが、そこに偶発的な出来事が待っており、対話過程を支配してしまうばあいが多い。この点

は筆者の前著でも同様であった。[2] 本稿資料のばあい、ポルメタルの金属取付工をしている若い労働者（グジェゴジュ・ウローベルくん／愛称でゲラとよぶ）に会いにいったところ、彼は日本から社会学者がインタビューにくるというので、彼の家に友人たちを招待していた。筆者の意図をあえていえば、ポーランドの若者の生活や意見を聞いてみたかったので、親しい友人たちが集まる偶発性は有り難かった。これに加えてゲラくんのお父さんであるエウゲニュッシュ・ウローベルさんの日本びいきは大変なもので、彼にとって日本はまさに宝島である。かれの日本への憧憬は豊かさへのそれであり、そこには共産主義社会の「貧しさ」への悔恨が見え隠れするのである。このインタビュー資料に収められている若者の生活・文化・意見、親世代の子世代への期待、日本への憧憬などのなかに、変革の過渡期にあるポーランド社会の変容ぶりが如実に示されている。

4．この調査のインタビューのために、ワルシャワ中央計画統計大学（現・ワルシャワ経済大学）の助手で家族計画カウンセラーのアンナ・ロゼウッチ（ANNA RODZEWICH）さんが３日間も筆者に同行し、インタビューを助けてくれた。またワルシャワ大学の日本語学科で学ぶエディタ(EDYTA) さんの支援も、ポーランド語が不得手な筆者にとっては有り難かった。彼女の日本語は心もとなかったが、ワルシャワ大学で学ぶエリート学生が同じ若者としてふつうの労働者と会話に加わったことも、インタビューの状況に影響を与えたかもしれない。

5．録音テープからの翻訳に関しては、札幌在住のハリーナ熊倉さんから全面的な協力をえることができた。ハリーナさんは口述の内容を正確に翻訳され、ポーランド語の俗語、ニュアンスにも十分に配慮してくれた。ハリーナさんの長時間にわたる労苦のおかげで、本資料の公開が可能となったことに謝意を表したい。

（注）

1）大山信義「〈ポーランド社会研究資料①〉ポーランド家族の生活史Ｉ」『REC Technical Report』No.2, 1-51頁、札幌・静修学園北海道環境文化研究センター，1993年.

2）大山信義『船の職場史：造船労働者の生活史と労使関係』東京・御茶の水書房，1988年.

【凡例】

1. 本稿の記述のうち〈　〉内は聞き手（大山）の問の内容を示す.
2. 文中の（　）内は読者の理解を助けるため、口述内容の含意が伝わるよう補足したものである.
3. 同じく文中の［　］内は聞き手が付した補注である.
4. 文中の(*)の印は聞き手が必要に応じて当該ページに注解を付した箇所である.
5. 本稿に関する全内容はすべて聞き手の責任において収録する.

4　若者たちのポーランド

●ある家族の風景

【登場人物】

○エウゲニュッシュ　ウローベル	EUGENIUSZ WRÓBEL. 1944年生まれ. GRZEGORZ（後記）の父.
○ハリーナ　ウローベル	HALINA WRÓBEL. 1947年生まれ. EUGENIUSZの妻. ラドム郵便局職員食堂の料理長.
○グジェゴジュ　ウローベル	GRZEGORZ WRÓBEL. 1970年生まれ. 愛称はGELAと呼ぶ. UGENIUSZとHALINAの長男. ラドム市のポルメタル・ガスレンジ工場の金属取付工.
○アンヂュジェイ リチャク	ANDRZEJ LYCZAK. GRZEGORZの友人.
○マグダ	MAGDA GUELIJUS. GRZEGORZとANDRZEJの友人.
○アンナ ロゼウィッチ	ANNA RODZEWICH. 家族計画カウンセラー. ワルシャワ中央計画統計大学助手.
○エディタ	EDYTA. ワルシャワ大学日本語学科学生.
○収　　録	1990年3月14日~16日. WRÓBEL家のお宅で.

PART I

〈あなたはポルメタルで仕事をすることを、どのようにして決めましたか？〉

（息子のグジェゴジュ）「僕はポルメタル(*) のことを少し知っていたんだ。そこで、僕の友人がはたらいていたからさ。友人はポルメタルの仕事の環境がとてもいい、と確信していたんです。稼ぎのこと考えると、そのポルメタルがとてもいいって、友人がそう言ってくれたんだ。全体的にポルメタルは仕事の条件がいいと、いい会社だから、そこに入ればいい仕事があるし、問題なくうまく仕事がやれると、友人がそう言ってくれたのさ」

---

*　ポルメタルは1945年に設立した国営のガスレンジ製造工場。ワルシャワ市内の南方 150キロメートル離れたラドム市に立地している。ラドム市の人口は223,600人（1988年）でラドム県の県庁所在地。ポルメタルは1974年に起きたラドム事件の中心事業所であった。ラドム事件というのは、ラドムの労働者が食料品値上げに反対して蜂起した事件。ポルメタルは事件にたいする懲罰として、1976年に法人格を剥奪された。1980年に展開された《連帯》運動により、81年に法人格を回復した。

〈その友だちは何歳なの？〉

「20歳……、いや、22歳かな」

〈学校の先輩か何かですか？〉

「いや、そうではなくて、友人って、いまここに［アパートの隣の部屋で］、トントンと［大工仕事を］やっている人さ。この友人がポルメタルではたらいていたんだよ。でも、いまはもうはたらいてないけどね。彼は、僕のすぐ隣りの部門ではたらいてたけど、いまももうそこをやめて、自分の店をもって、自分のためにはたらいてるんだよ」

〈ポルメタルは会社として評判がいい、ということは、仕事の環境がいいからですか。賃金が高いからですか？〉

「はい、その通りさ。あとは、ポルメタルで、楽しく、いい仕事が問題なくできるからですよ。福利厚生条件もいい会社だし……。ブリガード長［班長］にしても、マイスター［職長］、デイレクター［部長］(*) にしても、みんな従業員のことを気遣ってくれるんですよ。人間関係がとてもいいんだ。ポルメタルで班長や職長、部長は従業員のことだったら、どんな小さなことでも興味を向けてくれるよ。ポルメタルは部下と従業員の関係がいいから、人気があるんだ。この点はほかの会社とだいぶ違うんだ。

福利厚生では、例えば休暇。休みはいいところで過ごせるし、あとは、例えばラドムに有名な歌手、有名なジャズバンド、キャバレーや劇などが来るとき、ポルメタルではいちばん早くその切符を買って、従業員にくれるんだ。それは会社のラジオですぐ知らせてくれるから、見に行きたい人は見るいけるんだよ。

僕は1988年の11月15日に、ポルメタルの仕事を始めたんだけど、その後、ちょっと、4ケ月くらい休憩したんだよ。初めてもらった給料は、4万7千グロッシェ。はっきり覚えてるんだ」

〈そのとき、その給料はラドムにある別の会社ではもらえない額でしたか？〉

「そう。そのとき、ほかの会社ではポルメタルよりいい給料は誰ももらってなかったよ。若い僕にとって初めての仕事だし、最初ポルメタル入ったときは、自分の［資格をもっている］職種に就いていなかったんだ。僕は金属取付工だけど、違う部門で仕事をやってたのさ。僕の職業グループの給料は、とても低かったんだ。あとで、違う部門、修理をやっている部門に移ったとき、みんなびっくりしちゃってね。前の僕の職業グループがあまり低かったからだよ(**)」

---

* ポルメタルの職場組織は「部長」dyrector→「職長」mistrz→「班長」brygaszistaの序列になっている。dyrectorは作業集団の長ではなく企業の意思決定に参与する経営陣であり、mistrzは作業集団のリーダー。その部下がbrygaszistaとなる。mistrzとbrygaszistaの職階は熟練技能に基づく職業身分であって、中世ヨーロッパの親方ギルド制度を基盤に成立した。ポーランドの多くの企業は国営、民営を問わずマイスター制（mistrz system）が基本である。

** ポルメタル工場は加工部門、組立部門、修理部門に別れている。労働条件は職業グループすなわち職種・技能によって違いがある。職種は職業資格のことである。ポーランドでは1974年に制定の労働

〈そうすると、あなたの最初の仕事は何だったの？〉

「仕事は、金属取付工さ。でも職業グループとしては、違うグループに入っていたんだ。もっと［給料の］低いグループに。あまり高くないんだ。あとで、別の部門へ移ったときは、職業グループも上がって、自分の職業、資格をもった仕事に就いたというわけなのさ。じゃあ、僕が昨日もらった給料で、何を買ったか、先生［大山］に見せてもいいですよ」

〈あ、そうですか、昨日は給料日だったんですか？〉

（母のハリーナ）「はい。昨日、息子は給料もらってきました。ああ、昨日は13日だったですね。じゃあ、給料もらったのは２日前ね」

（ふたたび息子のグジェゴジュ）「昨日何を買ったか、見せてあげるよ。［自分の部屋に案内して］ほら、これが昨日買ったテープレコーダーのスピーカーさ」

〈このセット、値段は幾ら？〉

「そうですね、ちょっと待ってください」

〈例えば、このスピーカーは、いま幾らになつています？〉

「ああ、これが43万グロッシェで、昨日買ってきたやつさ。もっと高いものあるけど、僕は43万のを買ってきたんだ。ここに乗っているテープレコーダーの値段は、いま76万７千グロッシェ。このラジオは、いまちょっとよく知らないけど、35万くらいだったかな。」

〈これは何ですか？〉

「これは、声を大きくする機械ですよ」

〈じゃあ、これはいくら？〉

「これは、いまはどれくらいするか、よく解らないな。だいたい１２万グロッシェと思うけど……」

〈そのつぎの、これは何？〉

「ああ、これもレコードプレーヤーさ」

〈じゃあ、これはいくらだった？〉

「これは、24万くらいかな。そう、レコードプレーヤーは、いまは24万。ポニカと書いてあるのは、ポーランドの会社ですよ。声を大きくする機械の値段は、１年前の値段だけど、いまどのくらいするか分からないな。このセットは、ぜんぶ僕の毎月の給料で買ったんだけど、例えば、このレコードプレーヤーは、９万グロッシェだったから、僕の１カ月の給料じゃ買えないでしょう ？ だから、つもお母さんからお金を借りて、その機械を買って、あとで給料をもらったときに４万グロッシェづつ返したんだ。

こうやって買うと、僕がちょっと得をするんだよ。だって、その機械は毎月高くなるから、長期にすると、どんどん機械が高くなるでしょう。給料そんなに上がらないから、簡

法典において、特定の職種に職業資格が必要なことが示された。これによって伝統的な労働慣行が近代法として法制化されたことになる。

単に買えないのさ。でも、母さんからお金を貸してもらえば、まだ高くならないうちに、すぐ買えるってわけさ。母さんはちょっと目をつぶって、僕から利息を取らないですからね。こんなふうにして、そのセットを買えたのさ。もし母さんがお金を貸してくれなかったら、このセット、とても買えないですよ。僕、このセット、ずっと前から、とても欲しかったんだ」

〈じゃあ、こういうセット欲しがってる若い人は大勢いますか？〉

「そうです。僕の友だちも、同じセットをとても欲しがっているけど、そんなお金ないから、このごろ少しづつ、中古の、一度使った機械を少しづつ買ってるんですよ。ちょっと前、彼、ここに来てたんだ。僕は"君も残って一緒に［大山と］話しよう"っていったんだけど、彼はちょうどそのスピーカーを買いにいくといって、いま出掛けたばかりなんだ。僕は昨日買って、彼は今日買うことなってたのさ。僕の両親は、彼の家よりちょっとお金が多い、ちょっと給料が多めなんで、僕にお金を貸してくれるけど、彼の家計はちょっと厳しいらしいんだ。彼、お母さんと二人暮らしだし、お母さんからお金を借りられないからね。中古のセットを、少しづつ買っているんだよ。

このセットは、ラドムの店で買ってきたんだけど、このテープレコーダー買うまで２ケ月くらいかかったんだよ。僕は、毎日仕事が終わってから、いろんな店へ行って、これを探していました。そのテープレコーダー買いたい時、毎日仕事終わった後、うち帰る時遠回ってね。いろんな店で、今日そのテープレコーダーが入荷したかどうか、聞きにいってたんだ。そのとき、ちょうど品物が無くて、パニック状態だったな。みんなお金持ってきているのに、店に品物が無くてね」

〈いつも同じ店で探していましたか？〉

「いや、いろいろ。ラドムでこの機械を売ってる店を、毎日回ってたよ。ソレデ、ラドムだけじゃなくて、ラドムの周りにある小さな町までも行ってね。例えばウストロンという町とか。結局、そのテープレコーダーはラドムで買ったよ。

このセットをぜんぶ買うまで、半年くらいかかったんだ。現在、こういう品物はいろいろ、ぜんぶ売ってるけど、すごく高いからね。１年間前なら、この品物の値段はちょっと安かったのさ。買う人も多かったから、店に行っても、いつも、なかなかなかったからね。そのセット買うために同じ店で、ずっと［入荷を］待ってたわけじゃないんだ。仕事が終わって、毎日いろんな店にいって、その店に僕が買いたいもの、例えばテープレコーダーが入るチャンスを狙ってたんだ。だから、その品物を買うために、いつも必要なお金はいつも持って出掛けたのさ。入ったら、すぐ買うためにね。ぜんぶ新しい品物。ぜんぶの値段を合計すれば高いな。いまは、この同じものは、もっと高いよ。すごく……」

〈このセットをぜんぶ買うのに、あなたは自分のお金を何パーセント出しましたか？〉

「さあ、どうかな。自分のお金は、70パーセントくらいかな。いちおうこのセット、僕がぜんぶお金出ししけど、どうして70パーセントになるっかというと、例えば、レコード

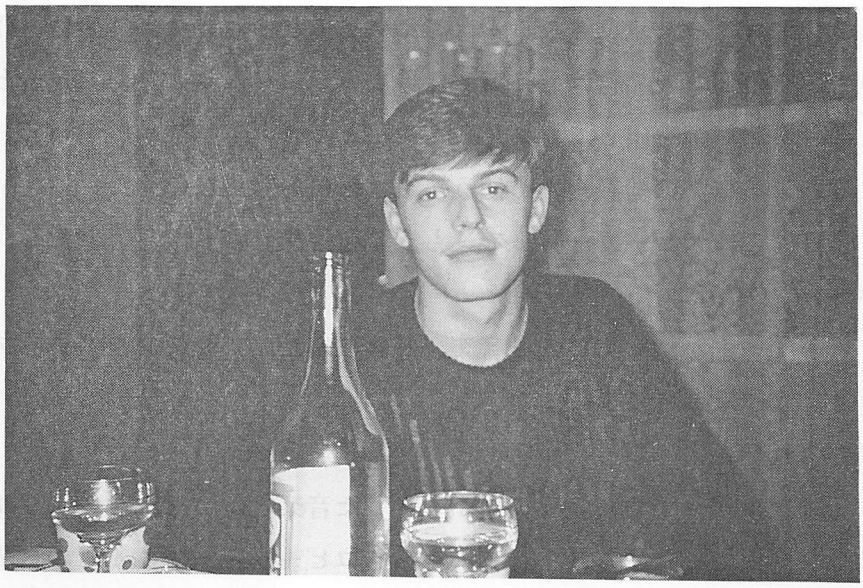


写真１　グジェゴジュ・ウローベル君（ゲラ）

写真２　ゲラ君が勤めるポルメタル・ガスレンジ工場の内部

プレーヤーを買いたいとするでしょ？　そのレコードプレーヤー、９万するでしょう ？僕はそんなお金持ってないから、母さんから借りるわけ。母さんは僕に10万貸してくれたときは、自分の品物、自分の洋服とか買わないで、僕にそのお金を貸してくれたんだ。でも、１ケ月、２ケ月経ったら、もちろん母さんにそのお金返したよ。２ケ月経つと、インフレのせいで、その10万の品物はもう買えないよ。そんなふうに考えてみると、その30パーセント、母さんがお金を出してくれたことになるのさ。インフレのせいで……」

〈そうすると、あなたは給料をすぐ使うから、何にも残らないんだ〉

「そう。昨日はこのスピーカー買って、もう給料は無しさ」

〈音楽が好きなんだね〉

「そう。この［いまかかっている］音楽、好きなんだ。これ、フランチェスコ・ナポリというイタリア人が歌ってる」

〈テープですね？〉

「はい。テープコピーですよ。ラジオからとった音楽とか、もし誰かがワルシャワからね面白いテープ持ってきたときは、その人からもコピーをとってるんだ。日曜日には、８時間もかけて音楽のコピーをしてたのさ。ディスコの音楽に、すごく興味があるんだ」

〈じゃあ、ディスコへよく行きますか？〉

「いや、どちらといえば、パーティはよく行くよ」

〈じゃあ、パーティでディスコを踊るんだね？〉

「もちろん。パーティでディスコをするさ。ディスコダンスやるために、そのパーティをやりのさ。ラドムにもディスコがありんだけど、あまり評判がよくないし、あんなディスコには彼女を連れていけないよ。この音楽はダンスするとき、とても落ち着くんだ。僕は例えば、仕事で何かいらいらすることがあったとき、例えば誰かと喧嘩したときなんかは、うちへ帰ってきて、その音楽を、音量をいちばん大きくして音楽を聞きながら休養しているよ」

（父親のエウゲニュッシュさんが大山へ向かって）「教授に聞きたいんだが、日本ではみんな正直にはたらいているのかね？ それとも、まあまあかね？」

〈はい、多くの人は一所懸命、正直にはたらいてますよ。だいたい仕事が好きですからね。日本では子供も小さいころからたくさん勉強しているけど、ポーランドの子供たちは、もっとのびのびと自由に、豊かに過ごしていますね〉

（エウゲニュッシュ）「本当にそう思うかい？」

〈ええ、本当ですよ。ポーランド人はとても心が豊かだと感じました。日本の子供は、いい高校、いい大学へ入るために、小さい頃から勉強に追われてるし、母親もとても厳しいですからね〉

（エウゲニュッシュ）「ああ、そうか。やっぱり思った通りなんだ。ポーランドの母親と違うんだな。そんな甘くないんだ。俺は日本の技術がとても素晴らしいと思うよ。いち

どくらい日本に行ってみたいもんだ。日本はとてもきれいで、素晴らしい国と思うんだ。俺たちいろいろテレビや映画を見て、そう思うようになったんですよ。テレビやラジオのニュースでも、日本のこともよく出てるよ。新聞にもよく出ているしね。

俺たちはいままで日本のことを、あまり知らなかったんだな。でも、だいたい1980年くらいから、ワレサ議長がポーランドで第２番目の日本を作ろうとしたのさ。(*)　その頃から、いろいろ日本のことをポーランドで聞くことできるようになったんだ」

〈ワレサ議長は日本のこと大好きですからね〉

（エウゲニュッシュ）「ワレサ議長だけでなく、俺もポーランドに第２の日本になって欲しいのよ。自分のためだけでなくて、ポーランド人みんなのためにそうなって欲しいんだな。もし、ちゃんとはたらいている人だったら、ちゃんと給料もらって、好きなことができるとか、好きなものを買えるようになって欲しいもんだ。俺は１日16時間はたらいてもいいのさ。そのかわり、もらった給料で好きにできるようになりたいんだ。日本人を見て、ポーランド人もいい仕事ができるように習って欲しいのさ。例えば、俺も20年間以上もはたらいてきたんだが、給料だけは、どうにもならなかったんだ」

（妻のハリーナ）「だから、主人は自分の工作所、仕事場、やること決めましたのよ」

（夫のエウゲニュッシュ）「俺はいろんな工場で、８時間だけはたらいていたんだ。俺、別に14時間はたらいてもいいと思っていたけどな。しかし、そのころはそれ以上長くはたらくことは禁止されてたからな。俺の仕事は、あまり必要とされてなかったのよ。例えば４年前、俺は車を直している工場ではたらいてた。そのときは、金属取付工としてはたらいていたわけだ。だから、その８時間の仕事が終わったあとは、誰かが車を直してほしい人といえば（修理を）約束して、自分でその仕事して、自分の家族のため、子供のために、さらにはたらいていたんだ。しかし、その工場、国営ではなかったし、俺の仕事を必要としなかったんだな。誰にもしてほしくなかったのよ。

日本も最初はヨーロッパから、アメリカからいろいろ見習っていっぱい勉強した国だけど、いま日本は何でも自分でできるようになったろう？。いまは反対になってけどさ。ほかの国が日本を見習うようになったわけだ。日本と競争して、日本に追い付こうということになってるんだな。これからはポーランド人と日本人が、一緒にビジネスをやるようになるんだ。そう、たぶん日本の品物が増えるだろうよ。俺も日本人と手を組んで、自分の工作所をでかくしたいんだ。場所もあるから、大きくしようと思ったら大きくできるさ。いまでもちょっとした工作所だからな。なにか大きな機械の小さい部品を作りたいもんだ。ポーランドは労働時間(当たりの賃金)が安いし、いま失業者がどんどん増えてるしな」

〈あなたの工作所では、何人はたらいていますか？〉

＊　自主労組「連帯」の議長であったワレサ氏が、日本びいきであったことをさしている。ワレサ氏はレーニン造船所電気工から1981年10月に連帯の初代全国委員長に就任、ポーランドの民主化運動を主導したが、市場経済のモデルとして日本の経済発展を称賛していた。

「俺と、あと雇人が３人、それに俺と一緒にその工作所を共有してる人、だからぜんぶで５人だ。いまのグロッシェをドルに直せば、この製品の１キロが２ドル50セントだ。１つではなくて、その製品は１キロで２ドル50セントというところかな。原材料のことはいろいろ大変でね。その小さな工場はラドムの近くにあるんだ。１日で完全にできたものは200キロになる。もしもっと必要になったら、もっと大きな注文がきたら、俺は１日400でも、600キロでも作れるんだ。

作った製品はブダニスクの造船所から取りにやってくる。ブダニスクの造船所が買っていくわけだな。もちろん俺は、造船所との売買はグロッシェでやっています。それから、さっきの製品の値段は、ブルットという値段でしたよ。このうちから税金、オイル代、電気代、機械の償却も入ってる。あと従業員の給料とかね。そう、これはいろんなものをまだ取ってない値段なんだ」

（アンナ）「その造船所は、テレーニンという造船所ですか？」

「いや、そうでなくヨーゼフピュースーツキという造船所さ」

〈お母さん、あなたは息子たちにどんな夢を持っていますか？　何になって欲しいですか？〉

（ハリーナ）「さあ、なにかしら。私は、母として、少なくとも大学くらいは卒業して欲しいですね」

（エウゲニュッシュ）「そのあとのことは、俺はまだ何年間も自分の工作所を続けるつもりだから、そのあとは息子たちがいい腕になってきたときは、俺の工作所は息子に譲って、息子たちがもっといい、もっと大きな工場にしてほしいんだ。その大きくした工作所で、何か違うもの、例えば車の部品なんか作ってほしいんだ。俺は息子たちに、一般的（な暮らし）、いまの俺たちよりもっといい、もっと身軽な暮らしをしてほしいんだよ。俺たちよりもっと豊かな人生になってほしいもんだ。俺たち、両親としては、子供たちのためにこの工作所を作りったようなもんさ。俺たちのためにでなく、子供にもつと豊かな生活させるためにさ。別に俺僕だけのためだったら、工作所は必要なかったのんだ」

〈エウゲニュッシュさん、あなたは息子に、あなたの会社へ入って一緒にはたらいてほしいですか？〉

「はい、そうさ。俺は息子に俺の工作所に入ってほしんだ。しかし、それは、まだ先のことさ。まだまだ先の…」

〈あ、そうですか。すると、あとどのくらいで？〉

「そうだな、あと10年くらいかな。 いや、４年か５年間たって、息子はもっとお利口になってからだな」

〈（息子のグジェゴジュ）あなたはどうですか？　同じふうに考えていますか？〉

（ハリーナが息子へ）「あなた、そう思ってるんでしょう？　いまからあと５年くらい勉強して、それからお父さんの工作所入ってもいいでしょう？」

（グジェゴジュ）「うん、僕もそう思ってるんだ。もうちょっと社会的な勉強をして、もうすこし人生体験してから、僕一人だけでもお父さんの会社を経営してもいいし、お父さんと一緒にやってもいいと思ってるんだ。僕はまだ若いですから、お父さんといろんなところで、まだ一致できないと思うんだ。まだお父さんの考えにすべて賛成できないと思うよ。もうちょっと経ったら、僕がいろいろ社会を見てからだと、お父さんと一緒に仕事もうまくいくと思ってるさ」

〈お母さんはいまの仕事に満足ですか？〉

（ハリーナ）「別に、私の仕事はあまり面白くないですよ。なにも面白くない。台所仕事ですから、面白いものないですね。毎日毎日同じことで…。だいたい（家庭の）主婦の仕事と同じですから、面白くないですね」

（アンナ）「それは、レストランでしたか？」

「いいえ、違うわ。職員食堂なんです。ラドムの郵便局の、職員のため食堂ですよ。もう18年間もそこに勤めているのよ。私はコック長として、いつも部長と一緒にメニューを考えるの。それからメニューに合わせてちゃんと材料買ってあるかどうか確かめます。それから、料理作る時、ちゃんと決めてある作り方の言う通り作ってあるかどうか、確認します。あとは台所全体のこととか、料理を作るとき衛生をちゃんと守っているかどうかいつも見ています。そのほかには、料理を作っているときに、ちゃんと処方箋を守ってるかどうか。それだけじゃなくて、時間のゆとりというか、お昼までちゃんとできるかどうか、お料理を出すとき、新鮮で温かい状態で出しているかどうかも確認するんです。だから、一般的に考えると、私は台所の中、規則、規定をちゃんと守っているかどうかという責任者なんです」

（エウゲニュッシュ）「日本の女性はみんなはたらき者だよね。俺の奥さんは、もうはたらきたくない、仕事を辞めたいといってるんだ。いままでいっぱいはたらいてまたからな。もういいっていっていますよ」

（ハリーナ）「だって、私はもう22年はたらいてるんですもの」

（エウゲニュッシュ）「妻は子供を３人育てて、そんなに、22年間もはたらいたから、いまは少し休みたい、少し楽にしてもらいたいっていうんだよ」

（ハリーナ）「ええ、そのとおりよ。うちには、あともう１人子供がいるのよ。一番上の娘［のマウゴジャタ／MALGORZATA／1966年生まれ］ですけど。その娘は３年前に結婚しましたから、もう私たちと一緒に住んでないんです。娘はお婿さんと一緒に住んでいすから、もう独立したので娘のことはいままで話さなかったの。私はこれからしたいことったら、うちのこと、主人のこと、息子たちのことだけ面倒みていたいの」

〈あと、家庭菜園のお世話でしょう？〉

「ええ、ええ、そうなんです。私たち、家庭菜園をもってるのよ。お花が大好きでね。花をたくさん栽培してるんです。家庭菜園のなかは、並木と薔薇だらけなの。いまは、う

ちのことだけ考えたいわ。本当の主婦だけになりたいのね。あと、家庭菜園で自由にしたいですね。それだけが、私の夢。私たちは1964年に結婚して、もう25年間ずっと一緒ですもの。22年はたらいてますでしょう？　だから、もう休んでもいいと思っててるの」

〈お二人はどこでどうやって知り合ったんですか？〉

（ハリーナ）「私たち、同じ村に住んでいたんですよ。ポーランドの北東の方。あまり遠くないところに、私たちの家があったの」

〈小さい頃からですか？〉

「そうですね、私は主人のこと、小さい頃はあまり覚えていないの。主人は大きな村に住んでいましたけど、私はちょっとその村外れところに住んでました。でも、主人のほうは私のことを小さいころから覚えているんです。いつもそういっていますからね。主人がいい若者なったとき、私も男の子に興味をもつ年になって、そのころからでしたら主人のことを覚えてますけど、その前のことはぜんぜん覚えてないわ。主人は私より３歳年上ですから、学校でもクラスは一緒じゃなかったんですよ。

結婚の申し込みは、主人からよ。ポーランドでは、そんな習慣になってるの。最初は主人、そんなにはたらきませんでしたね、私たちが結婚したときは…。だって、ラドムに仕事がそんなになかったんですよ」

（夫のエウゲニュッシュ）「俺、仕事を探してもなかったんだ。いまののラドムの状態みたいにね。はたらきたい人は大勢いるさ。だが、仕事はないな。1964年、65年のころは、ラドムの区役所の前で、仕事を探してくれるんだ。仕事を分けてくれる事務所前は、たくさんの人が、行列をつくって並んでいたんだ。すごく長い行列だったな。しかし、仕事はぜんぜん無しよ。いまもラドムで仕事探すのは大変なことだ。例えば、俺と同じように仕事がない…。80パーセントは仕事してないな。自分の工作所も閉鎖して、仕事してないんだ」

（ハリーナ）「そうね、どっちの頃がよかったですかね。本当のこと言って、いま私たちも長い間はたらいて、お金やいろんなものも溜めたわ。でも、あなた、いま若い人はみんな楽にしていますでしょう？」

（エウゲニュッシュ）「いや、そんなこともないだろうさ。若者だって大変だろう。例えば、若い夫婦がゼロからスタートするとすれば、もしその両親が手伝ってくれなかったら、かなり苦しいはずだ。若者が自分のアパートを手に入れることだって、ずいぶん難しいくなってるだろ。だから、現在が前より全体の経済が良くなったとはいえないんだ。俺たちは、このアパート、この住宅に入るまで４年間半も待ってたんですよ。(*)　娘もアパ

---

*　ポーランドの住宅問題はきわめて深刻である。本文では「住宅に入るまで４年間半も待って」と述べているが、就職後１０年以上も待つのがふつうである。ここでいう「住宅」は住宅協同組合の形態で取得する賃貸アパートである。ポーランドの労働契約では地域外の新卒労働者を雇用する事業所に、住宅取得の援助をするように記載されているが、現実には長期間待たなければならない。

ートを申し込んで、もう4年間半待ってる状態だ。しかし、いつ当たるか、ぜんぜん解らないんだな。まだまだ、ずっと先のことさ。俺たちは一般からみれば、そんなに悪い状態じゃないけどな。何年間も一生懸命はたらいたから、何とか金を稼げたし、いろいろ買うこともできかのさ。もうこのままでいいんだ」

〈エウゲニュッシュさん、若いころは何になりたかったですか？〉

「さあ、よく分からないが、田舎に住んでたから、都会に出て仕事したかったのさ」

（ハリーナ）「主人の両親は農民でしたのよ」

（エウゲニュッシュ）「そうなんだ。両親は農業をやってた。そこは第2次世界大戦後に、ドイツから取り戻した土地だった。マズーリというところな。ポーランドの北東の方にあるところ。そこに俺は住んでたのさ」

〈ハリーナさんのご両親は？〉

（ハリーナ）「あたしの両親も同じところに住んでいたのよ。でも、父は国営企業で常雇いの肉体労働者でした。(*) 母はちょっとした土地があって、農業をやっていたわ。母はいろいろなものを、少しづつ作ってたの。例えばジャガイモ、ほかの野菜なんかを自家用に作っていたのね。いまならちょっとしか土地がない人なら、花だけとか、ニンジンだけとか作ってるけど、母はそうでなくて、いろんなもの少しづつ作っていたの」

（アンナ）「エウゲニュッシュさん、あなたは自分の人生のなかで、いちばん大変な苦しい時期がありましたか？」

「そんなこと、俺の人生のなかであんまりなかったな。俺たち、最初は少し苦労したけどな。結婚してすぐのころは、ちょっと大変だったな。住むとこがなくて、2人だけでぜんぜん知らない町だったからな。その後も金がなかったけど、子供は小さかったし、部屋を借りて、子供を育てていたからな。これぐらいかな、あとはとくに問題がなかったな」

（ハリーナ）「娘が生まれたとき、私は仕事をしていなかったの。男の子たちが生まれたときは、私も仕事をしていましたけど。私は最初、食堂じゃない、違う仕事していましたの。この子（グジェゴジュ）が生まれたときは、電気のランプを作ってる工場ではたらいていたわ。私は電灯を組み立てていたのよ。私たちは他のポーランド人と同じ程度ふつうの暮らしをしていたと思うわ」

（エウゲニュッシュ）「俺も仕事はずっと前から、ずいぶん大事にしてきたんだ。家族より、他のことより、俺にとってはいちばん大事なものさ。ということは、ちょっと豊かな、いい暮らしをしたかったからだよ。それは俺のためにだけではなくて、子供にもうちょっと豊かな暮らしをさせたかったからさ。俺、若いころ、かなり貧乏だったから、子供にはもうちょっと楽をさせたいのさ。もちろん、忙しくないときは家庭も大事にしてきたよ」

＊　「肉体労働者」pracownik fizyczny は日本でいえばブルーカラーの工員に相当するが、ポーランドでは「頭脳労働者」mózg fizycznyに対する概念であり、資格をもつ熟練労働者と無資格の不熟練労働者とに大別される。

〈戦争のことは覚えていらっしゃいますか？〉

（エウゲニュッシュ）「うん、うん。ポーランド人は戦争の記憶を、しっかり大事にしているさ。戦争のことをいろいろ思い出して、よくそういう話しをすることがあるんだ。日本人も戦争のことを覚えてるかね？

ポーランド人はみんな、神さまのこととてをしっかり信じてる。みんなカトリックさ。ポーランドは政治のせいで、無理に宗教、カトリック教から追い出された人がたくさんいるんだ。だけど、ポーランド人は一般的に、自分の宗教をしっかり守っている人たちなんだ。だから、いままでずっと、キリスト教がポーランド人の生活のなかから消えないように、頑張ってきたんだ。(息子の恋人や友人にむかって)どうだ、みんな信者だろう？」

（グジェゴジュの恋人）「はい、そうよ。ずっとずっと前から、私たち、信者よ。いまもカトリックだわ。これからもずっと、自分の宗教は守るつもりよ」

（グジェゴジュの友人）「僕のおじいちゃん、ひいおじちゃん、ひいおじいちゃんもカトリック教徒だったよ」

（エウゲニュッシュ）「俺たちは、ポーランドが共産主義者の国だったときだって、宗教は捨てなかったのさ。いまはもう共産主義が終わって、自由になったからな。俺は党員のときだって、キリスト教会を捨てなかったさ。忘れなかったよ」

（ハリーナ）「あなた、やめて。変なこと言わないで」

（エウゲニュッシュ）「いや、いや、大丈夫だ。だって、俺は自分の人生のなかであったことを、ぜんぶ本気で話してるだけなんだ」

（ハリーナ）「うちの主人はカトリックの家族で生まれたのに、党に加入したのは、そのとき自分のアパートがほしければ、党に所属すれば早くアパートがもらえるということになっていましたの。(*)　党に加入したら、それがとてもプラスになったのね。そのころの主人は、とても若かったの。（息子の）エウゲニュッシュと同じ年でしたからね。主人は、ポーランド社会主義青年同盟に加入したんですよ。

それは会社のなかにあった党でした。そのとき、この住宅を手にできるほど、分割払いのお金も、私たちは持っていなかったのね。そのときは、そんな大きなお金はとても持ってなかったですからね。でもしかし、主人ははたらいて、無利子で借金することできたんです。その（無利子で）ローンを受けられるいちばん大事な条件は、主人がポーランド社会主義青年同盟に所属しているということだったのね。主人はそのポーランド社会主義青年同盟所属して、会社から十分なローンを受けたんです。そのとき、住宅の第１回目の分割払いは、１万グロッシェ払うことなっていました。主人の会社からは、１万２千グロッシェ借りることできたの。ポーランド社会主義青年同盟に入って、会社に１、２ケ月くら

＊　ここで証言しているように、ポーランドでは共産党に入党すれば住宅面で優遇された。入党者のなかには住宅取得に動機づけられた人も多かった。またノーメンクラツゥーラ（共産党の任命によって労働関係に入る特権的地位）に連なっている人たちも、大いに優遇された。

い勤めて仕事が続いてたら、その住宅ローンが受けられたんです。もし主人がその青年党に入れなかったばあいは会社に３年間はたらかなければ住宅ローンはもらえなかったんですよ。だから、それがポーランド社会主義青年同盟所属した理由でした。

同じ理由で、いろんな利得のために、大勢のポーランド人がポーランド統一労働者党に入っていましたね。その利益のための理由だったのね。住宅問題が大きな理由になっていたのね」

（エウゲニュッシュ）「俺の上司で女の人は、会社の（なかに組織された）ポーランド統一労働者党(*）の第一書記だったんだ。俺はその人に、何回となくこんな話しを持ちかけられてな。彼女はこういうんだ。”エウゲニュッシュさん、あなたはいい人。 私はよく知ってる。あなたがカトリック教徒ってこともね。でも住宅ローンはあなたにあげたい。ポーランド社会主義青年同盟入らないとだめ” と、そんなふうに、俺に何回となく話しかけてきたんだ。俺の若いころ…」

（ハリーナ）「彼女はたぶん、共産主義の信者だったわ」

（エウゲニュッシュ）「そう、俺もそう思ってる。彼女は共産主義のイデオロギーをかなり信じてたと思うな。彼女は年上で、50代くらい女。自分の家族、自分の子供はたぶんいなかったと思うよ。独りぼっちの年上女だった。彼女は俺にいろんな手助けしてくれたんだ。ポーランド統一労働者党のメンバーとしては、いい人だったな。正直な、良心的な人だったさ。立派な人だ。はかの（会社外の）ポーランド統一労働者党のメンバーは、そんなふうにいえないですよ。彼女はそ社内の人には、真面目だったな。

俺は彼女と一緒にポーランド統一労働者党のラドムの委員会へいって、やっぱり、そんな早く自分の住宅はもらえないってことが分かってきたのさ。そんな早く自分の住宅を、俺がもらうのは無理だった。彼女は俺のために頑張ってくらたし、それが俺にも分かってきたんだな。共産主義はポーランドでは風のようなもんで、風かみで消えましまったのさ。共産主義は戦後、40年間くらい発展してきたわけだ。戦前も少しは共産主義者がポーランドいたけどね。共産主義は早咲きして、早く萎んでしまったというわけだ。

それに比べれば、カトリック教はポーランドの歴史、ポーランドの文化のなかで、深い根っこがあるんだな。むかしのポーランド人は、みんな信者だった。いまもな。これからも信者になることだろうよ。ポーランド統一労働者党のメンバーには、教会での結婚、子供の洗礼、毎日曜日の教会でミサをすること、みんな禁止されていたからな。ポーランドには、そんな時期あったわけだ。だから、みんなに内緒にし、隠しながらカトリックの習慣が続いていたのさ。例えば若い夫婦がみんなに内緒で、両親の田舎へ帰って、そこで教会で結婚したり、子供の洗礼をやってと、そんなふうにして、みんなキリスト教を守って

＊　ポーランド統一労働者党は共産党のこと。1989年 6月の総選挙で「連帯」に屈辱的な敗北を喫するまで、スターリン態勢下のポーランドを掌握。本文でいっているのは党の職場組織である。

きたんだ。

俺は１年間、ソビエトで仕事したことあるから、そんなことは何回も見てるんだ。例えば、ロシア人がマリアの絵を隠して、みんなに内緒でお祈りしたこともあった。ポーランドではある工場で、だれかが共産党の第１書記に呼ばれてな、こんな質問をされたんだ。”あなたは教会で結婚式を挙げましたか？　あなたの子供は教会で洗礼を受けましたか？　あなたは日曜日教会へ行っていますか？”こんなふうに詰問されるんだ。でもな、先生の話を聞くと、日本でもキリスト教徒は、もっと大変だったそうだな。日本ではキリスト教の信者は多いんですか？」

（ハリーナ）「あなた、日本ではそんな人、あまりいないんじゃないかしら？　だって日本人は、だいたいが仏陀の信者でしょう？」

（エウゲニュッシュ）「じゃあ、カトリックの信者はちょっとしかいないのかな？」

〈昔、キリスト教徒は迫害されましたよ。カトリック教徒の人は少ないですね〉

（エウゲニュッシュ）「じゃあ、そうすると、昔、ローマ時代のころ、ローマ人がキリスト者を苦しめていたことと似てるんじゃないか。俺たちは最初から共産党を、本当は信じてなかったよ。共産党とは最初から、あまり強い結びつきがなかったからな。その共産党は、俺たちに上から無理に押し付けたものだったのさ。俺たちの人生には、共産党なんかべつに必要じゃなかったというおとさ。心のなかとか、考えのなかに、染み込んでなかったんだな。俺たちに、そんなもの要らなかったからね。

だから共産主義が、風みたいに、軽く早く俺たちんとこへ飛んできて、早く飛んでいっちまったんだ。俺たち、最初から共産党に興味なかったんだ。だから、大事にしなかったのさ。俺は、もうとっくの前に共産党の身分証明書を捨てちゃったよ。とっくにな」

（ハリーナ）「私は、共産主義のイデオロギーのなかで、一つだけ賛成しているわ。それは、みんな誰でも勉強したいなら勉強してもいいということです。そのことは、ポーランド人民共和国の憲法のなかに、ちゃんと書いてあることなの。法律で決めてあるのね。このひとつだけは、とてもいいことと思うわ。共産党は全員の国民に、学校に入る途を開けてくれたのね。学校までの途を支えてくれたわ。それはとてもいいことよ。だって、むかしは、お金のある人はもちろん勉強してましたけど、お金のない人は、そのままずっと貧しい暮らししていましたからね。勉強をしたくても、できませんでしたよ。あとは、共産主義のイデオロギーには、いいことが見つからないですね」

（エウゲニュッシュ）「社会主義時代のポーランド人は、怠け者のことを習っただけさ。仕事は大事にしない。ちゃんとしない。例えば、私物ではないものは、大事にしなくてもいいとか、こんな考えかたをポーランド人は覚えてきたんだ。何でも共有だったから、結局は何にも大事にしなかったわけよ。ポーランド人はソビエトのコルホーズの仕事の仕方を習ってきただろう。俺、隣の人からこんな話を聞いたことがあるんだ。コルホーズで農業労働者５人が、畑へ肥料を撒きに行った。そのときその５人の労働者に、指揮官がいな

かったというんだ。その人たちと一緒には…。すると、その労働者たちは肥料を撒かないで、畑の中大きな穴を掘って、そのなかへ肥料を袋のまま埋めて、土を元に戻したんだと。その労働者の考えは、こんなふうなんだな ― これは俺たちの畑ではない。だから、汗を流してまで、肥料を撒く必要ない、とね。いったい何のためにはたらくんだろう。ちゃんとはたらいても、疲れるだけだ、とね。

ポーランド人も、これとまったく同じふうになったんだな。これは私物じゃないから努力しなくてもいい、一生懸命はたらかなくてもいい。そんなふうに思うようになったわけだ。このコルホーズの話は、俺がソビエトに長いあいだ住んでいたポーランド人から聞いたんだ。そのポーランド人は、戦争が終わってソビエトからポーランドに戻ってきて、俺の隣に住んでいたのよ。俺も1年間、ソビエトで仕事したことがあるから、自分の目でいろいろ面白いことを見たんだ。

俺の考え方は、まったく違うよ。どうしてって、俺はいま、自分の工作所で、自分のために仕事をやってるからね。俺の収益をできるだけ大きくするために、自分の仕事を一生懸命にやってるんだ。それに、俺はできるだけいい製品を作りたいんで、正確で、精密な仕事をやってるのさ。材料もむだにしないように気を使ってる。例えば、もし農民が5、6ヘクタールの自分の畑を持ってるばあいは、その畑を後生大事にするだろうしな。俺は国営工場ではたらいてたころは、できるだけ良心的で、まっとうに仕事していたよ。しかし、ほかの奴らは、そうじゃなかった。仕事中に手をポケットに入れて、怠けてるんだ。俺のまわりに、何人もそんな連中がうろちょろしてるあいだ、俺はこう考え始めたんだ。というのはだな。どうして俺は、そんな怠け連中のためにはたらかにゃならんか、とね。

こんなふうに怠け者の労働者が増えたわけよ。ポーランド人は仕事を嫌がってな。ちゃんとはたらけない。どんなふうにしたらいい仕事できるのか、知らなかったのさ。これからだいぶ変わるでしょうがね。いい方に向かって行くだろうよ。いまははたらきたい人がたくさんいるからな。もっとも、仕事があまりないけどね。残念ながら、俺の良心的で、まっとうな仕事をしても、正当な給料が出なかったよ。俺は反逆して、心のなかで暴動を起こしてな、仕事中に手をポケットのなかに突っ込んでいただだ。とうとう俺は、そのいつもながらの悪給料ではたらくことできなくて、その工場で我慢できなくなった。だから自分の工作所を作ることにしたんだ。俺はほんとに、その国営工場ではもう我慢できなくなったのさ。

ポーランドも、これからいろいろ変わっていくよ。ポーランドの大きな国営工場の入口前で、仕事をほしがってる労働者がいっぱい集まったら、もうそれだけで大きな変化なんだ。じつは、いま、こんな変化が始まりまったんだ ― 例えば、ポーランドの労働者は、いままで仕事中でも、会社のなかでよく酒を飲んでたんだな。しかし、こんなことはもう収まりましたよ。やっぱり、仕事が首になったら大変なことになるからな。ポーランド人は、ずいぶん酒を飲んでいたからね。いま従業員は、仕事のことを違うふうに考えてるん

だ。例えば、むかしははたらいてた会社が首になったら、すぐ違う会社や仕事を見つかったが、いまはそんなことできないんだ。退職を待つ人がたくさんいるからさ。自分の仕事を大事にしなけれならない時期なんだよ。

日本じゃ10年はたらいても、（まるまる）１ケ月の休暇はもらえんしょう？　ポーランドではできるんだ、１ケ月の休暇は。日本人はあまり休暇を使わないでしょう？　２週間くらいですかね、（大山）先生。先生は、本当に（息子の）ゲラとゲラの友だちとお話ししたいんでしょう？」

〈そう。若い人と話したいですね〉

（エウゲニュッシュ）「日本で結婚するときは、結婚指輪を交換するのかね？　ポーランドでは、かならず教会の結婚でも区役所の結婚でも、結婚指輪の交換をするんだ。さっきの先生の話しを聞くと、日本で夫は家族のなかで、本当のご主人らしくなっているんだね。家族のなかで、いちばん大事な人なんだな。ポーランドとぜんぜん違うですね。うちは、妻からいろんな命令されるんだ。”あなた、お皿洗ってね”とか、”あれ手伝って下さい””それを直して下さい”、とそればっかりなんだ。日本人は、そんなことはたぶんしなくていいんだろうから、みんな若く見えるんだ。

ポーランドの女は何年間か戦って、いまは法律の前では、仕事でも家庭の中でも、どこだって男と同じレベルになったのさ。だから、ポーランドの男は、（女のようには）子供を産めないということだけだな。それ以外は、男でも女の仕事は何でもできるようになったよ。俺は、家庭のいろんな仕事を、無理にさせてるけどね。俺の世代も、男としてどんどん変わってきたんだ。これからも変わるだろうな。俺の息子たちは俺の家庭、俺のやり方を見て、同じことするだろうな。残念ながら、俺の息子たちも、女の言いなりになる男性になるんだろうな。もう、（俺が母さんにいわれてるのを）いろいろ見てるだろうからな。”あなた、ケーキ作ってね””あなた、洗い物やっておいてね””あなた、掃除してくださいね”（というぐあいに）そんな僕を見て、勉強してるんだろう。大人になったら、黙ってそんなことできるようになるのさ。妻は”あなたに命令するために、神さまから人差指をもらったのよ”っていうんだからな」

（ハリーナ）「私は、家族のためにはたらいてるのよ。家族のために、毎月給料をもってくるのよ。だから、家族に私の家庭の仕事を、手伝って欲しいのよ。仕事がなかったら、自分で何でもしますよ」

（エウゲニュッシュ）「俺が国営工場ではたらいてたときは、ときどき友だちと一緒にウォッカとかビールを飲みに行ったりしてたんだ。だけど、自分の工作所ではたらいてるころは、友だちもあまりいないんで、仕事が終わって早く帰ってくると、妻とときどき一緒にダンスをしに、何か食べに出掛けてたんだ。遊び相手は妻だけだよ。だから、俺たちは２人で25年間一緒にいて、一緒に頑張ってるのさ。どうして、アメリカとソビエトは、離婚が多いのかね。　ロシア人は、女に優しくないからな。親切じゃないのよ。どんな関

係でもね。妻とか、恋人、ガールフレンドにも、ぜんぜん優しくしてくれないんだ」

PART II

〈ゲラくん。会社の上司はいい人ですか？〉

（グジェゴジュ）「はい、先生の質問したとおりだよ。僕の上司、ブリガード長はすごくいい人なんだ。若くて、いい男さ。彼は船乗りとしてはたらいたことあるんです。だから、男として、自分の人生のなかで、いろんな経験を積んだ人なんだ。だから、一般的ないろんな人生の問題を分かってくれる人ですよ」

〈例えば、あなたは何か問題あったら、ブリガード長と相談しますか？〉

「うん、もちろんそうさ」

〈例えば？〉

「例えば、ちょっとみんなに内緒話になりんだけど、僕はゴールデンリングがどうしても必要だったんだ。そんなに簡単に手に入るものじゃないから、考えて考えて、じゃあ、うちのブリガード長に頼むしかないぞと決めて、頼んでみたんだよ。それで、彼がなんとかしてくれて、そのゴールデンリングを手に入れたことがあったんだよ。そのゴールデンリングが手に入ったのは、もちろんみんなに内緒で、ちょっとした裏道で入手したんだけど、それもこれもブリガード長のお陰だったんだよ。

それに、こんなこともあったんだ。給料日のとき、僕の給料に石炭代が含まれてなかったんです。ちょっとした手違いで、石炭代をもらってなかった。ブリガード長にそのことを話したら、すぐ事務所へいってくれて、僕にその金を払うように勧告してくれたことがあったんだよ。あと１回は、僕の計算では給料がもうすこし多く出ると思ったことがあったんだけけど、そのときも、ブリガード長に話したら、その問題も解決してくれたんだ。ブリガード長は、だいたい34歳くらいの人だけど」

〈仕事上のことだけでなく、人生上の問題も？〉

「そう。彼は人生上のことも、もちろん相談にのってくれたよ。とてもいい人なんだ。それから、専門家としても、とても優れた人さ。職場の評判がとてもよくてさ、僕たちのブリガードのなかで、若いのは僕一人だけ。ほかの人は、みんな年上ばかりというおとも

あって、いつも僕だけには、もっともっと勉強しろよ、といって説きはじめるのさ。いつも僕だけに、"ゲラ、おまえ、学校へいって勉強するんだぞ" って、いつもそう説いてくれるんだ。"ゲラ、この工場でのおまえの将来は、俺にはまったく見えないんだ "とかって、ブリガード長は話してくれるんだ。

僕は小学校卒業したあと3年間、専門学校に通ってったんだけど、ブリガード長は、お母さんも、みんなもそうだけど、僕にこんど高校くらいの専門学校に入って、卒業してほしいといってくれる。母さんは僕がその3年間の専門学校を終えたら、次の（上級の）学校にいきなさいと勧めてくれたんだよ。でも、僕は最初、軍隊に入った方がいいと思ったんだ。どうしてって、まだ若いうちに軍隊に入って、早く終わった方がいいと思ったのさ。軍隊で僕より若い人には命令されたくなかったし…。でも、いまはもう軍隊（の期間は）終わったから、勉強してもいいと思ってるんだけど…。

ポルメタルに入る前、父さんと母さんにも相談したよ。僕はいつも、何か問題あるときは父さんと母さんが家にいるときに相談してるんだ。ほかに、ちょうどこのマンションの隣の人なんだけど、隣の女の人がポルメタルのホーロー部門ではたらいてたんだけど、その人がポルメタルはとてもいい会社だといってくれて。隣の女の人、いまはもうポルメタルではたらいてないよ。もう年金の生活してるんだ。

僕がポルメタルの仕事を始めることに、父さんは反対したんだ。父さんは "仕事しないで勉強しなさい" っていうんですよ。 "俺がおまえの面倒見てやる、生活費を出してやるから、もっと勉強しなさい、専門学校入りなさい" って、そういてくれたけど、僕はもちろんそんなふうにしなかった。やっぱり軍隊に入りたかったからね。ポーランドの若者はみんな軍隊に入らなければならないし、僕はできるだけ早く、軍隊を済ませた方がいいと思ったんだ。19歳で軍隊に入って、いま20歳。軍隊にいたのは4ケ月間だけ」

〈あ、どうして4カ月だけ？〉

「僕は、血の中に黄疸病のビールスを持ってるから…。小さいときに入院して、そのビールスが感染したんです。いまはもう元気だけどね。この黄疸病は誰かに伝染するんだってさ。黄疸病のビールスが、注射で伝染したわけ。いま僕の血から、誰かにそのビールスが伝染する可能性があるから、ほかの人にとっても僕は危険ですよ。もちろん軍隊へ入る前は、みんなと同じに、詳しく身体の検査をしてもらったけど。その検査というのは、軍隊のお医者さんの委員会があって、その前でみんなやるんです。僕はそのときの血の検査で、病気をもっていること解ったんだ。でも、うちには（服役）命令が入った手紙が軍隊

から届いたんです。だから、その病気をもってるのに、軍隊にいかなければならなかったんですね。だから、僕、やっぱり軍隊に入りました。僕はその黄疸病のこと、病気証明書持っていました。

軍隊に入って3日たってから、僕もその病気の証明書を見せてもらたんです。すると僕のことで、もう大騒ぎになってね。もし僕が指を偶然で切ってしまったら、怖いですからね。みんな、すごく怖がってたねだ。だから、僕は4ケ月たって軍隊を出たというわけなんだ。例えば、軍隊ではみんな順番で台所当番があるでしょう？　僕はそれはしませんでしたよ。もし怪我でもしたら、その兵舎をくまなく消毒しなければならないからね。僕はそんな危ない人だったから、誰かがかならずその病気をもらってしまうわけだから。僕のビールスは、血だけである程度伝染するんだ。血でだけ伝染するんだ。

そんなとき、僕と一緒にその兵舎に 600人の新しい兵隊さんが入ってきたんだよ。その600人のうち3人が僕と同じビールス持っていまたんですよ。だから、僕たち4人が一緒に軍隊を出ていくことになったのさ。ポーランドには黄疸病のビールスもってる人が、大勢いるんだ。だけど、大方はそういうこと知らないですよ。みんなふつうに生活していますからね。仕事したり、歩いたり、スポーツやったり、女の人なら子供を産んだりしてるんだ。みんな死ぬまで知らないままでそんな病気をもっている人は大勢いますよ。僕は本当に書類上は軍隊から外されていないんだ。軍隊は完全に（僕を）解放してないんですよ。軍隊への奉仕は15ケ月先に延ばしてあるんだけど、それは理論的にいえるだけで、本当はもう軍隊へは行かないよ。入らないさ。僕のビールスは、からだから消えていないんだ」

〈いまの会社に入るときは、病気の話はしなかったの？〉

（グジェゴジュ）「面接では話はなかったよ。会社の事務所へいったとき、すぐいろんな書類を書いて、体の検査して勤めることなったのさ。少し仕事をしたあとで、もう1回事務室へ呼ばれて、もう名前も聞かないで、アンケートみたいような質問されたけど、それは仕事のことでしたよ。職場の人間関係のこととか、仕事がうまく行ってるとか、そんな質問だったから」

（アンヂュジェイ）「僕はゲラと小学校時代のクラスメートです。同じクラス。小学校を卒業して、ゲラが専門学校に通ってたときは、もう一緒ではなかった」

（ゲジェゴジュ）「アンヂュジェイは、同じマンションに住んでいるんですよ。僕のいちばん親しい友だちなんだ。もう1人、親しい友だちがいるよ。僕たちはあまり喧嘩はしないよな。たまにちょっとしたことだけはあっるけど…。アンヂュジェイは仕事しながら

写真３　左はアンジュジェイ君、中央はマグダさん、右がグジェゴジュ君

夜間の専門学校で勉強してるんだ。学校は月、火、木曜日と金曜日の、もちろん夕方。アンヂュジェイは、いままで習った職種で仕事をしてるのさ。扇風機、換気扇、体温計なんかを生産してる会社。お母さんは病院ではたらいてるんだ。病院の食糧倉庫を経営しているよ。僕がスピーカー買いにいったというのは、このアンヂュジェイなんだ。残念ながらそのスピーカーがなくて、買えなかったけどね。彼も僕と同じラジオとテープレコーダーのセットを買おうとしてるんだよ」

〈ゲラと同じ年なの？〉

（ゲジェゴジュ）「はい、僕たち同じ年。僕の誕生日が２月で、アンヂュジェイが９月だから、僕よりちょっと年下なんだよ。僕たちは、今週と先週は毎日会ってったよ。いつも３時半から。彼は隣のマンションに住んでるんだ。僕の女友だちも同じマンションにいるよ。彼女はまだうちに来てないけど、今日もここへくることなってますよ、かならずきますよ。彼女、いつも１時間くらい遅れるんだ。ぜんぜん時間を守らない子でね。彼女は僕とガールフレンドとして付き合っていたときは、大変だったんですよ。メークアップと

か、着替えとか、髪のセットとか、すごく時間がかかったんだ。だから、大変だったよ。僕たち、日本の男性がこのごろメークアップするようになったって、テレビで見たけど」

〈そう。日本の若い男性は男性用の化粧品をたくさんもつようになりました〉

（ゲジェゴジュ）「若者って、僕たち同じくらいの年から、25歳くらいまでかな。だけど15歳くらいから、もう若者でしょう。ポーランドでは男は21歳になったら結婚してもいいんだ。女の子は18歳から。日本のばあいはどうですか？」

〈日本は男が20歳、女は18歳になってます〉

（ゲジェゴジュ）「それじゃ、女の子のばあいはポーランドと同じ18歳なんだ。［いま訪問してきた女の友だちを指して］あ、この人は、私の友だちでマグダといいます。［マグダはレナが愛称］レナ、よくきてくれたね。もしかして今日来られないのじゃないかって心配してたんだ。［スピーカの音を気にし、アンヂュジェイに向かって］おい、話、聞こえなくなるから、声ちょっと小さくしてくれよ。この音楽は、ヨーロッパではやってるですよ。紹介します。この人はレナです。僕の名前だけ難しいでしょう？　みんなと同じ20歳です」

〈みんな同じ年に生まれたんですね。レナさん、あなた何月生まれですか？〉

（マグダ）「５月です。私、ゲラとアンヂュジェイに、毎日会ってるのよ」

〈マグダさんの趣味はなんですか？〉

「学校の先生になりたいの。先生になるわ。だって、子供が大好きなんです。子供の面倒をみて、教育をするのが大好きなの。一緒に遊ぶのも好き。一般的なことでは美術に興味があるわ。私、教育関係の学校で、美術を勉強してるんです。絵も描いてるのよ」

（アンナ）「小学校の教師、それとも高校の教師ですか？」

「いまのところは、卒業したら小学校の教師になるわ。でも、そのあとで大学へ入って、大学の卒業をしたいと考えてるところなの。［大山へ］先生、日本の結婚している男性は、ときどき子供のようにみえませんか」

（アンナ）「 どうして？」

「だって、日本では若い男性も大人の男性も、みんないつも女の人に世話してほしいって、保護してほしいんでしょう？　男は生まれてから死ぬまで、女に世話してほしいと、日本ではそうなっています」

〈ポーランドも同じですか？。マグダさん、どう思いますか？〉

「ええ、私もそう思うわ。私も、同に意見よ」

（ゲジェゴジュ）「僕の本当の考えは、やっぱり、男は人生のなかで、毎日の生活のなかで、仕事しているときも、男はいちばんではないとだめだよ。簡単にいえば、男は結婚したら、家族のなかでいちばん上の人になるんだ。男は家族の頭さ。ポーランドでだって、そういえると思うんだ」

（マグダ）「その点は、もちろん私も賛成よ。男は家族の頭だわ。でも家族の首にあたるのは女ね。その首が、自分の頭をいつも動かしているのよ」

〈アンヂュジェイくん、きみはどんな趣味をもっているの？〉

（アンヂュジェイ）「まず第１に音楽ですよ。スポーツも少しね」

（マグダ）「アンヂュジェイ、あなたって、女の子の趣味をもっているんじゃなかった？もう忘れちゃったの？」

（アンヂュジェイ）「いや、忘れてないさ。ただ、そういうことは最後にいおうと思っただけさ」

〈音楽といえば、アンヂュジェイは自分で歌うの好きなの？　音楽は聴くだけ？ それとも、音楽を聴きながらダンスするのが好きですか？〉

（アンヂュジェイ）「歌うのが好きです。ときどき自分ひとりで歌うんだ。音楽を聴くのも好きだよ」

〈そうすると、どんな音楽が好きですか？〉

（アンヂュジェイ）「音楽だったら、だいたいぜんぶ好きだけど、ジャズ、クラシックの音楽はあまり好きではないな。ポーランドの若者なら、だいたい15､6歳からディスコへ行きますよ」

〈そうすると、まだ小学生じゃないの？〉

（アンヂュジェイ）「はい、そうです。15歳なら、まだ小学校の生徒です」

〈そうすると、学校の先生は何もいわないんですか？　反対しないてすか？〉

（アンヂュジェイ）「そうですね、先生方が知ったらどうなるか解らないけど、みんな先生方に内緒でディスコにいくんだ」

〈 きみの夢はなあに ？ 〉

（アンヂュジェイ）「僕の夢？　難しい質問だなあ。小学校の終わりごろ、高校へ入る前は音楽家なりたいと思ったけど…。いままでそんなチャンスはなかったんだ」

〈いましている仕事は、ずっと続けたいと思っていますか？〉

「いま僕がやっている仕事は、僕の夢ではないんだ」

〈どうして？ 現在の仕事に満足してないんですか？〉

「まあ満足してるけど…」

〈どうしてその仕事をすることに決めましたか？　どうして、100パーセント満足してないんですか？　その仕事をずっと続けたくないんですか？〉

「現在の仕事は、夢のような仕事じゃないんだ。僕の頭のなかに浮かんでいた仕事ではないんです。別に賃金のことではなくて。賃金なら大丈夫ですよ。僕は小学校を卒業してから、ゲラと同じような学校に入りたかったんだ。でも、そこには入りませんでした。車に関係ある学校に入りたかったんですね。いま僕が通っている学校は、最初から僕がもっている興味と違っていたんですよ。しかしこの学校に少し通ってみて、学校が好きになったし、勉強していることに興味をもつようになったんだけど。少しはね。いま通っている（夜間制の）専門学校は百パーセントは満足してないんだ。自分の勉強のことや学校のことに、少し幻滅を感じているのさ」

〈きみは最初、仕事と専門学校とどっちに期待していましたか？〉

「そうですね、僕のうちの家族の状態を見ると、仕事をして自分のためにお金作らなければならなかったし、勉強もすることができる。学校はエネルギー関係の学校なんだけど、この学校はいろんな友だちが、最初からいい学校だって確信してたんです。最初から興味をもって入った人たちは、僕よりもっと真剣に、もっと真面目に職業のことを考えているんだ。電子技術に興味をすごくもっていますよ。僕とは違うんだ。僕はこの学校好きだけど、そんなに楽しくやってないからね」

（グジェゴジュ）「彼は、たまたまこの学校に入ったんですよ。最初から興味をもっていた学校に入らなかったから、あとで違う学校を探すことになったのさ。いま通っている学校に、まだ席が空いてたので願書を書いて、学校に出して、この学校に入ったわけさ。彼の友だちは、ほんとに楽しんで、電子技術に深い興味をもってますよ。彼は自分でそれ見てるから、そんなふうに感じてるんだ。だけど、彼自身はその電子技術に、あまり興味をも持ってないし、そんなに真剣に楽しく、一生懸命やってないんだ。自分でそれを感じています。人間は自分の興味に合った仕事をすべきですよ。彼はまだ軍隊にいってないです」

〈これからの計画なんだけど、その学校を卒業したら、何をするの？　学校の卒業まで、あとどのくらいありますか？〉

（アンヂュジェイ）「学校の卒業まであと１年間半残っています。学校卒業したら軍隊

に入りますよ」

〈あ、そうか。やっぱり軍隊ですか。みんなと同じですね。軍隊に入ることについて何か心配することとかがありますか？〉

「いいえ、何もないですね」

〈そうすると、その軍隊をできるだけ早く終わってしまいたいですか？〉

「はい、そう」

〈軍隊終わってあとは、もっと勉強するつもりですか？〉

「どちらかったら、もうあまり勉強したくないな。」

〈自分の仕事の将来に対して、どう思いますか？　将来でなにか仕事が見つかると思いますか？〉

「さあ、解りません。いい仕事が見つかるかどうか、いまは、なんともいえませんよ」

（アンナ）「あなた、なにか音楽関係の仕事を望んでいらしゃるの？〉

「はい、そうですね。そんな仕事が見つかるといいけど…」

〈アンヂュジェイの気持ちは分かりましたよ〉

（グジェゴジュ）「とても面白いやつなんだ。珍しい人だよ。例えば、僕が偶然にアンヂュジェイと町で会ったしたら、最初は”やあ、こんにちは””こんにちは”といって、僕が簡単に”これからどこへ行くんだ？”って、アンヂュジェイに聞くでしょう。するとアンヂュジェイは簡単に答えないで、遠回りな話をして、やっと５分くらいたったってから、”これから○○の店に行くところさ”、って答えるんだ。そういうやつなんだ。簡単な答えなのに、これから店へ行くというのに５分くらいかかるんだから」

（マグダ）「ほんとに。アンヂュジェイそんな話の仕方するんだから」

（アンヂュジェイ）「僕も、何回かそんな長い話しをして、怒られたことあるんだ」

〈あなたたち３人は、仲の良い友達ですか？〉

（グジェゴジュ）「こんなふうになってるんだ ― アンヂュジェイと僕はとても仲がいいし、僕とレナも仲がよかったから、そんなふうに３人が仲のいいグループになったんだ。アンヂュジェイとレナはときどきしか会わないけど、２人はお互いに好きだと思うんだ」

〈３人で会ったら、どんな話をするの？〉

（アンヂュジェイ）「私たちは、３人であまり会わないですね。たまにしか会わないわ。よく会うのは、私とゲラ、ゲラとアンヂュジェイですね」

〈じゃあ、あなたとアンヂュジェイは、例えばどんな話をしますか？〉

（マグダ）「私たちは、愛について話すのよ」

（グジェゴジュ）「僕たちは男同士の話だよ。あとは音楽のこと、テープのこと、このテープレコーダーのセットのことなんか、しょっちゅう話してるんだ。今日は（特別に）どんな話でもするよ」

〈ゲラくん、あなたの職場では、仕事中にお酒を飲む人なんかいますか？〉

（グジェゴジュ）「ときどきは、労働者は飲まなければならないこともあるんだ」
〈そう。どうしてですか？〉

（グジェゴジュ）「酒を飲まない人は、仲間外れにされちゃうからだよ。酒飲まないと、変な目で見られるんだ」

（アンナ）「しかし、いつ、どんなときにお酒を無理に飲まされるのかしら？」

（グジェゴジュ）「例えば、部門ではたらいている人の誕生日、結婚式とかお祝いのあるときは、みんな酒を飲むんだ。そんなとき、誰かが飲まないとか、断ったら、みんなは信じられないくらいの話しになっちゃうのさ」

〈私がほかの工場を調査してたときに、酔っ払い見かけなかったけど、このラドムに来て、ポルメタルで昨日アンケート調査をしたときは、酔っ払いを見かけたんです。お酒臭かったですよ〉

（グジェゴジュ）「僕は、仕事中は飲んでないよ。僕の仕事の種類は、ちょっと特別なんだ、酔ってたら、仕事がぜんぜんできなくなっちゃうよ」

〈その酔っ払いはホーロー部門の人でした。よくないですよね。ゲラ、あなたの仕事はどのような仕事ですか？ 危険な仕事？〉

（グジェゴジュ）「電気に関係ある仕事だから、安全のために、酒飲んじゃいけないんだ。でも、ポルメタルで酒飲んでる人がたくさんいるって、事実なんですか？」

〈そう、仕事中お酒飲んでる人がけっこういますね。そんな労働者は、解雇されませんか？〉

（グジェゴジュ）「すぐには首にならないよ。だけど、あんまり酔っ払ってると、会社からうちへ帰されてしまうんだ。そうすると、仕事は欠勤になるのさ。そんな人に危ない、大事な仕事は任せないし、やっぱりそんな人は会社に対していい労働者ではないから、いつかは首になるだろうな」

（アンナ）「アンヂュジェイさん、あなたはいつ軍隊にいくつもり？」

（アンヂュジェイ）「いつって、軍隊に行けという書類がきたら、そのとき行きますよ。ポーランドは義務になっていますから。軍隊でずっとはたらいている人もいますよ。軍隊の管理みたい仕事もあるからね。僕のばあいは、ラドム県の軍隊の委員会から、その書類がくるんだ」

〈レナさん、そのシャンパン開けるてくれませんか？〉

（マグダ）「私、開けれないの。（試みながら）ああ、やっぱりできないわ。じゃあ、男に任せましょうよ。だって、強い男がいるんだもの。いいえ、やっぱり私がやるわ。あまり爆発しないようにやるわ。あ、もうちょっと、もうちょっと。あ、開いたわ。私はこの音が怖いの。私、グラスに注ぐのは、あまり上手じゃないの。男に任せるわ。（グラスに注ぐのは）男の役よ。あ、シャンパンが冷たい！　じゃ、乾杯しましょうよ。何に乾杯しましょうか？」

（グジェゴジェ）「また、先生（大山）といつかもう一度会えるように、乾杯しょうよ。それに、みんなの健康のために。じゃあ、乾杯 ！ああ、うまいな」

〈それじゃ、話の続きしてもいいでしょう？〉

（マグダ）「話は面白いわ。でも、アンヂュジェイ、あなたの今日は珍しく静かね」

〈どういう時こんなパーティやるんですか？〉

（グジェゴジェ）「土曜日とか、金曜日もやるんだ。毎週ではないけど、ときどきは毎週ってこともありますよ」（大山からすすめられた日本のショートホープを吸っている）

〈日本のタバコ、どうですか ？ おいしいですか？〉

（グジェゴジェ）「きのう僕は、先生からタバコ２箱もらったんだ。１つは職場に持っていって、友だちと一緒に吸ったよ。みんなとてもいいタバコだ、といってくれたよ。僕はハンガリーにいったとき、ハンガリーのタバコ吸ってたんだけど、なにか固くて、すごく強かったよ。きのう先生からもらったタバコは、最初そんなに強くないと思ったけど、吸っていたら、強くてとてもうまいのでびっくりしたよ。日本のタバコはポーランドと同じくらい強いけど、もっとうまいんだ。いまもらったタバコは、ちょっと弱いかな。だけど、すごくおいしいな」

（アンナ）「あなたたち３人は、何歳からタバコを吸っているの？」

（グジェゴジェ）「僕は覚えてないな。いまお母さんいないから…。僕、いつからかな。まだ小さかったよ」

（アンナ）「レナさんは？」

（マグダ）「私はだいたい２年間くらい前からかしら」

（アンヂュジェイ）「僕は16歳くらいから吸ってるさ。ポーランドでは、どんな学校でも、もちろんタバコはだめだよ。専門学校に通ってたときは、生徒がタバコを吸ってるところを先生に見られたら、先生が生徒の身分証明書を預かって、翌日に両親と一緒にその身分証明書を取りにくることなってたんだ」

（アンナ）「あなたはそんなことありましたか？」

「はい。でも、僕はそのとき生徒身分証明書をもってなかったから、先生が僕のセーターを預かったんだ。僕たちは学校で休憩時間のときに、ズボンを脱いで、半ズボンに着替えたり、長いズボンの上に半ズボンをはいて、そのまま廊下でサッカーをやったよ」

（アンナ）「そんなこと禁止されていましたの？」

（アンヂュジェイ）「いいえ。よく分からないけど、しかし、よくないことでしょう？ねえ、（大山が出した日本酒を注いで）乾杯しようよ。片っ方の足に…」

（全員）「乾杯 ！」

（エディタ）「私は日本へいったとき、日本の酒を木で作った入れ物で飲んだのよ」

（グジェゴジェ）「そうなの？　箱みたいなもの？　じゃ、どんなふうに飲むの？　こんな入れ物で」

（エディタ）「日本人はだいたい毎日、生魚を食べているの。魚はあまり味がしないから、醤油 ー 辛いソースにつけて食べるんです。でも私はあまり好きじゃないな」

（グジェゴジェ）「僕、この日本の酒を開けてないで、隣りの人にに見せてやりたいんだ。いいですか？」

〈あ、どうぞどうぞ〉

（グジェゴジェ）「日本の酒はまだ見たことないから、きっと喜んで見てくれるだろうな」（といって隣人の所へいく）

〈ゲラさんは、さっきトントンという音がしていた隣りの人のところへいったの？〉

（マグダ）「いえ、お隣だけど、その人と違うの。（卓上のオーーブルを指して）この赤い野菜は、赤ピーマンなのよ」

〈どんな赤ピーマンですか？　ふつうの赤ピーマンではないでしょう？〉

（マグダ）「これは赤ピーマンを瓶詰したものなの。自家製の瓶詰の赤ピーマンよ。だから、とてもおいしいでしょう？」

〈これはどうやって作りますか？〉

（マグダ）「お酢を少しと砂糖と水を溶かして、中に赤ピーマン入れて、ビンに入れて蓋をして、少し熱を加えるの。こうして簡単にできるのよ」

〈ポーランドの料理は酢をよく使いますね。赤ピーマンと同じに、ピクルスやキノコをいただいたことがあります。おいしかったですよ。レナさんはお料理を作るのが好きですか？〉

「ええ、好きよ」

〈お料理の作り方は、お母さんから習っているの？　それとも、自分で作りますか？〉

（マグダ）「お父さんから習ってるのよ。お父さんはコックではないけど、趣味でお料理をやってるの」（グジェゴジェが戻って）

（グジェゴジェ）「お隣さんは、この酒、まだ飲んでないよ。珍しいっていってたよ。それじゃ、飲もうよ。先生（大山）は、どうして酒（ポーランド産のウオッカ）を一気にぜんぶ飲まないで、少しづつ飲んでるんですか？」

〈ああ、これは日本の酒の飲み方なんですよ〉

（グジェゴジェ）「ああ、そうですか。すごく珍しい飲み方だね。でも、いま先生はポーランドにいるんですから、ポーランドの酒の飲み方してほしいな。じゃあ、もう一度やり直し。乾杯 ！」

（全員）「乾杯 ！」（大山も一気に飲む）

（グジェゴジェ）「僕たち、この酒、強いんだ。先生はどうですか？」

〈少し強いけど、大丈夫。おいしいですよ〉

（グジェゴジェ）「ああ、そうんなに強くないですか。それじゃ、僕は先生にもっと強い酒を飲ませたいな。スピリット90度くらいの酒、先生にちょっと入れてあげましょうか

？」

（マグダ）「いいえいいえ、そんなことよしましょうよ」

（グジェゴジェ）「でも、ちょっと飲ませてあげようよ。僕はポーランドのウォッカ、どのくらい強いものか、先生に飲ませたいんだ」

（マグダ）「でも、やっぱりよしましょう」

〈このまえワルシャワの大学の先生の家で、おいしいウオッカを友だちと３人でいただきました。あまりおいしいので日本にもって帰りますよ〉

（グジェゴジェ）「３人で、１本の強い酒飲んだんですか？」

〈はい、そうです〉

（グジェゴジェ）「その酒、何度ありましたか？〉

〈75度のウオッカでした。からだの調子とてもよくて、二日酔もぜんぜんしませんでした〉

（グジェゴジェ）「ポーランドのばあいは、若者は誰かのうちに集まって、楽しく話ししながら酒を飲むんだ。仕事が終わると労働者は、どこかの店で酒とかいちばん安いワインを買ってきて、木の下とか、芝の上とか、川の近くとかにか３人、４人とか集まって、その酒を飲んでるんですよ。夏になれば、よくありますね。日本人はポーランドのそのいただいて安いワインがとても好きだって、そんな話を聞いたことがあるんだ。だから今日も、先生のためにそんなワイン買おうと思ったけど、あまり安くてやめちゃったよ。先生、どう思いますか？　そんな話聞いたことありますか？」

〈いちばん安いワインの話は聞いてません〉

（グジェゴジェ）「あ、そうですか。じゃあ、やっぱりそのワイン飲むのやめましょう。あまりおいしくないんだ。先生に聞きたいけど、日本にはまだ貧しい村はあるんですかりますか？　例えば、ちょっとぼろい洋服を着て、背中に大きな篭を乗せて荷物をもってたりとか、そんなこと、現在日本で見かけますか？」

〈いまの日本の農家にはそういう貧しい人はいないですよ。農村も豊かになったし、生活の仕方は大きな都市と変わりありません〉

（グジェゴジェ）「もしいま、先生が日本の円を持っているなら、僕、ぜひみたいんだけど…」

〈はい。これは1000円です。ちょっとした大きなお金ですよ。1000円でランチを食べてお釣りがきます〉

（グジェゴジェ）「ああ、そうですか。ランチだけですか、じゃあ、それそんなに大きなお金じゃないでしょう？。たった１人でランチを食べるなら、大きなお金じゃないですね？」

〈ポーランドでは、1000グロッシェでランチ食べられないでしょう？〉

（グジェゴジェ）「そうだけど…。そうすると、ポーランドの５万グロッシェ、10万グ

ロッシェと同じくらいか。すると、日本の1000円はポーランドでは大金だ」

〈1000円よりもっと大きなお金は１万円です〉

（アンヂュジェイが大山のカード電卓をみつけて）「見てよ！　この電子計算機、すごく薄いですね」

（グジェゴジェ）「ほんとだ。安全剃刀みたいに薄い。あまり薄くて、びっくりしたよ。こんな薄いの、僕、初めてみたよ。ポーランドにもソーラーバッテリーの電子計算機があるけど、こんなに薄くないさ。それから先生、僕は日本に球の形をしたテレビがあるという話を聞いたことあんだけど、本当ですか？

〈おもしろい形をしたのはいろいろ売ってます〉

（グジェゴジェ）「うちのこのサンヨーテレビは半年前に買ったんだけど、そのとき695ドルだったんですよ。いま買うとしたら、100ドルくらいは高くなってると思うんだ。だからいまこのテレビが 750ドルとして、グロッシェに計算してみると 700万グロッシェになりますよね。すると、ポーランドで８ケ月、10ケ月分くらいの給料になるか」

〈日本だったら15万円くらいだから、大学を卒業したばかりの人の１カ月分の給料で買えますよ〉

（アンナ）「ゲラ。あなたは両親と話をするとき、いつも心を開いて話せますか。仲のいい友だちにたいしてはどうですか？」

（グジェゴジュ）「僕がいつ心を開けるって？　もちろん友だちには。でも、やっぱりそれは話のテーマによって違うと思うよ。例えば、家族の問題だったら、もちろん両親に話すけど、もし別のテーマだったら、例えば…何にするかな、例えばガールフレンドのこと、女の子のことは、あまり両親に話さないな。僕は女の子にどれくらいもてるとか、自慢するのがあまり好きじゃなんだ。簡単にいえば、例えば、僕の父はさんはこのレコードプレーヤーのセットにぜんぜん興味がないし…。

だから僕と父さんは、そんなことあまり話にならないでしょう？　ただ僕が何か買いたいときは、すぐ父さんにお金のこと頼みますけどね。”父さん、僕こんなもの買いたいけど、お金貸して下さい”、ってそんなふうな話になるだけのことさ。もしも、僕がこのセットにすごく興味があるってことは、父さんはよく解ってますよ。

だから、音楽のこととか、このセットの話だったら親しい友だちと話すさ。ただ、その人のいないときに、はいはい、いいといって、逆な話するのは、僕、好きじゃないんだ。一般的にいうと、僕はなんでも本気の人間なんですよ。相手に対していくらら悪い知らせでも、僕はいつも相手の前で、相手の目を見て、本気で本当のことをいいますからね」

〈ゲラ、もし結婚すると決めたら、最初にだれに話しますか？ お父さん？ お母さん？ それとも両親一緒に話しますか？〉

（グジェゴジュ）「ちょっと待ってよ。僕、結婚、まだできないよ。したいなら、あと１年間は待たなければね」

〈もしもの話ですよ〉

（グジェゴジュ）「さあ、よく解らないな。でもたぶん、最初は父さんに話すと思うな。父さんと僕の関係は、親しい友だちのような関係だからさ」

〈お母さんではないですか？〉

（グジェゴジュ）「うん、やっぱり最初は父さん話すよ。しかし、家族の問題については、母とも話すけど。父さんがいないときは母が"いまお父さんいないから、私に話してごらん"、ってそんな声かけてくれるときがあるんだ」

〈マグダ、あなたが結婚するときは、誰に最初そういうこと話ししましたか ？〉

（マグダ）「私は結婚するとき、最初母に話したわ。父に話したのは、そのあとよ」

（アンナ）「私は、それぞれご両親によって違うと思うの。ここでいちばん大事なことは、その本人とお母さんかお父さんとが、どれだけ仲がいい関係かによって違うと思うわ。どちらにお父さんかお母さんか、もうちょっと近い、強い関係、結びあれば、そっちに最初話しかけるでしょう」

（アンヂュジェイ）「もちろん、僕もそう思うよ。小さいころから、どっちの両親と仲良しかどうか。うまくいっている方にに話しかけると思うんだ。もちろん両親はだれでも、自分の子供のことを、同じふうに愛してるのさ。しかし、父親が"これは僕のいちばん大事な娘です"というでしょう。そんなこと、ポーランドによくあることだよ」

（マグダ）「そうね。いまアンヂュジェイがいったことは、確かによくあることよね。例えば、私もきようだいのなかで、父がいちばん好きな娘なの。父がいつもそういってるわ。でも、やぱり何か問題あったら、誰かと相談したいことがあったたら、母と話すわ」

（グジェゴジュ）「僕の家族は違うんだ。例えば、僕の弟のばあいは、もし弟が結婚することになったら、弟は父さんではなく、ぜったいに最初は母さんに話しかけると思うよ。なぜかって、弟はきようだいのなかで、いちばん下の子供だから、ずっと小さいころから"お母ちゃん、お母ちゃん"（といって甘えれば、母さんも"おお、息子くん、息子くん"って調子で、２人ですごく仲良くやってたからさ。よく考えてみれば、ポーランドでもやっぱり子供たちはみんな、だいたいは母親の前で心を開らけると思うけど」

（アンヂュジェイ）「そうかな、僕なら、やっぱり結婚の問題についてだったら、最初は父さんに話すよ」

（マグダ）「ほんと？　私はそれ、あまり信じてないわ。私の考えでは、やぱり最初は結婚についてなら、母と話すべきだと思うの。母親と子供の結びは、やぱり強くて近くて暖かいからよ」

（アンヂュジェイ）「そんなこと、決まってるわけじゃないだろうよ？　例えば、僕は小さいとき、父さんと一緒に過ごす時間がすごく多かったんだ。僕とお父さんは、いつも２人で家庭菜園にいったり、そこへいって友だちのようにいろんな話しをしたさ。あと、ドライブもよくしたよ。だから、ほんとに、僕は父と一緒に過ごす時間が母よりずっと多

かったんだ。だから、僕たち２人の関係は、仲がいい友だちというような結びつきになったんだよ。僕、17才のとき、父さんの前で初めてタバコを吸ったんだけど、母さんの前では、いまでもタバコ吸ってないよ。もし母さんがうちにいるときにタバコを吸いたくなったら、ほかの部屋へいって吸ってるんだ」

（グジェゴジュ）「ポーランドのテレビで《世界にもっと近く》という番組があるけど、そのなかでいつか日本の会社のことが話されたんですよ。例えば、誰か日本の会社にはたらいて結婚すると、その人の奥さんもその会社に入って、夫と一緒に同じ会社でずっと退職するまではたらいてると。それから、その夫婦の子供たちもその会社ではたらくことになったら、その人ったいはボーナスみたいものをもらえるって、それは本当ですか」

〈いいえ、現在そんなことはほとんどありません。大企業では夫が生涯同じ会社ではたらくケースは少なくないですが、いまの話は日本的にみえますが特殊なケースですよ〉

（グジェゴジュ）「ああ、そうですか。じゃあ、僕が聞き間違えたかな。それともニュースが古かったのかも知れないな」

（アンナ）「マグダさん、あなたのご主人何をしているの ？」

（マグダ）「私の主人は学生よ。経済学の勉強をしているの。現在のポーランドでは、女の人の結婚は早いのよ。19歳、20歳で結婚する女性がとても多いです。アンナさん、この問題についてどう思いますか？」

（アンナ）「どっちの答えを出してほしいの？　ポーランドの女性は何歳で結婚するということ？　それとも、ポーランドの女性にとって、何歳で結婚すればいちばんいい時期かってことかしら？」

（マグダ）「私が知りたいのは、ポーランドの女性はいくつで結婚している人がいちばん多いかということよ」

（アンナ）「現在は、若い女性の結婚がどんどん増えてるわね。結婚する女性の年齢がどんどん下がっています。私が結婚したのは19歳11ケ月でした。いまも19歳から20歳までの女性が増えてるのよ」

〈日本でいちばん新しい調査をみると、結婚する女性の平均年齢は逆に上がってます。いまは26歳くらいになっています〉

（マグダ）「あ、そうですか。じゃあ、そうすると日本の女性の結婚年齢は、どんどん上に上がっていきますね。アンナさんはどうしてそんな若いときに結婚しましたかしら？」

（アンナ）「それは、大きな愛があったからよ。彼に惚れて、愛に囲まれたから結婚したのよ」

（大山がゲラに向かって）〈何を録音するつもり？　ラジオの音楽ですか？〉

（グジェゴジュ）「いい、いい。僕たちの会話を録音しようと思うんだ。記念のために。いつか僕たち３人で、今日と同じふうに集まって、そのテープを聞きながら、先生と会ったことを思い出すんだ。いい思い出になるでしょう？」

（エディタ）「大山教授は私たちの話を札幌で通訳してもらうので、自由に話してくれていいっておしゃってるわ」

〈ポーランドでは方言だけを使っている人は、あまりいませんか ？〉

（グジェゴジュ）「グループとか、年齢によって、言葉が少し違うときがあるんだよ。例えば僕が子供のとき、近所の友だちと遊んでいるときに、自分だけの言葉を使っている言葉が、学校の環境のなかであったけど、それも方言でなくて、年齢によって違う言葉になってたんだ。両親とか、年取った人とか、若者の使ってる単語で、解らないときもありんだ。ねえ、みなさん、どうぞ(乾杯しようよ)。３本目の足に、３本目の足(*)に乾杯！」

（全員）「乾杯！」

（アンナ）「でも、ポーランドにもまだ方言使っている人がいますよ。例えばシロンスク、シレズヤに住んでいる人」

（グジェゴジュ）「ああ、そう。例えば、僕が一度シレズヤに住んでいる若い男性と話したことがあったけど、その人の話しが、ときどきぜんぜん解らないところがあった」

（アンナ）「そうね。シレズヤの方言はドイツ語もよく混ざってますからね」

（グジェゴジュ）「先生は英語できますか？」

〈はい。少しは話せます〉

（エディタ）「そうです。先生はよくできます。あなたは、どう？　よくできますか？」

（グジェゴジュ）「僕は、本当に少しだけ…」

（グジェゴジュ）「アンナさん、ワインもういいですか？」

（アンナ）「はい、もういいわ。どうして私にばっかりいれるの？　もし英語で話ししたいなら、どうぞ」

（グジェゴジュ）「みんな少しできるから、何とか話しできるかな？ 僕、本当にちょっとしかできないんだ」

（マグダ）「私、生まれて始めてだけから、その日本のお酒、飲みたいわ。それ、すこしちょうだい、ゲラ、ちょうだいよ」

（グジェゴジュ）「ちょっと待て。最初は片っ方の足にあるのを飲もう。日本酒は２本目の足のために飲もうよ」

（マグダ）「ゲラ、それはどうでもいいから、片っ方の足、２本目の足、とにかく早く飲みたいわ」

（アンナ）「先生のポーランド語の知識、とてもすばらしいと思います。もういくつも

＊　この口述の翻訳にあたったハリーナ熊倉さんの話では「３本目の足」という言い方は次のような意味をもつ。ポーランド人は酒を飲むとき、何かにつけて理由を述べる習慣がある。理由なしに飲むのはよくないという考えで冗談もでる。この会話場面で「３本目の足」「２本目の足」とかいってるのは、ウォッカを飲むいろいろな大きさのグラスを指す。例えば最初に飲み始めるたときのグラスを、１本目の足という。「１本目の足」も「２本目の足」も「乾杯」と同義である。これを繰り返して数え、酔わないようにバランスをとっているというのがハリーナさんの解釈である。

ポーランド語をを覚えたんですよ」

〈すばらしくはないですよ。ある家にいって”タークターク！”といったら、そこのおばあちゃんが”ポーランド語がおじょうずですね”っていっただけですよ。最初に”ナズドロービェ”、つぎに”ジェン・ドブリェ”。つまり１日に１つの言葉を覚えただけですよ〉

（アンヂュジェイ）「あ、そうですか。先生はもう１回ポーランドにこなければならないんでしょう。そしたら僕たちが、先生にもっとポーランド語を教えてあげるよ。今夜はとてもエレガントな晩になりました」

〈私は昨日も今日も、この家にきました。明日もくるから、ゲラはもっと日本語を覚えることができるでしょう。あなたがたのように若者ではないから、１日にたくさんの言葉を覚えられないからね〉

（グジェゴジュ）「どうぞ、飲みましょう。それから、日本の酒いれますから。それじゃあ、３番目の足に、乾杯！」

（アンヂュジェイ）「飲もう、飲もう。あとで先生の友だちがぜんぶ通訳するだろうから。足は、２番目か３番目か、もう解らなくなったよ」

（グジェゴジュ）「今晩もタクシーを予約しましたか？」

〈はい、９時半にきます。あと30分経ったらきます〉

（マグダ）「大変ですね。先生、車がないと、あまり動けないの。でも、タクシーをそんなに待たせていいかしら。タクシーがきたら返しましょうか？　いま何時？」

（グジェゴジュ）「まだ30分あるから大丈夫さ。タクシーは待たせても大丈夫だよ。夕べ、僕がみなさんを車で送ったから、今日も送ってもいいですよ」

（アンナ）「先生は窓の下でタクシーを待たせないと、困るんじゃない？　もうその話しいいですよ。先生はタクシー待たせるの当たり前と思って、かまわないのよ。ポーランドのタクシーの運転手さんは、お客さんを待つのがあまり好きじゃないみたいだけどね。ここが問題ね。きのうお迎えのタクシーを予約するとき、タクシーの運転手さんはお金を払ってもらってるから、３時間（空車のまま）待つのは悪いっていったの。運転手さんは時間を決めて、例えば９時に絶対お迎え行きますって、そんなふうに約束してほしかったのね。結局、私たちの注文どおりやってくれたけど、納得するのは大変だったの。」

（グジェゴジュ）「それじゃあ、４本目の足に乾杯！」

（全員）「乾杯　！」

（グジェゴジュ）「ウォッカこぼれないように気をつけて」

（マグダ）「ああ、みんな、見て。なんときれいなグラスの音でしょう。先生、ポーランドでグラスをぶつけて”ナズドロービエ”というと、健康のために乾杯しましょう、という意味なのよ。先生、この言葉を覚えましたか。”ナズドロービエ　！”」

（アンナ）「それは最初から覚えているのよ。ゲラ、先生はポーランドで１日１つのポーランド語を習ってますから、あなたにも日本の単語、せめて２つくらい覚える義務があ

るのよ。若くて有能だから、せめて4つでもいいんじゃない？」

（グジェゴジュ）「それじゃあ勉強しますから、4つくらいできるだけ簡単な単語を僕に選んで下さい」

〈いちばん簡単なのは"はい"、タークですよ〉

（グジェゴジュ）「ハイ？」

（グジェゴジュ）「ああ、もう覚えたよ。"ハイ"。これで1日分になるでしょう。つぎはどんな単語にするの。明日の分は？」

（マグダ）「明日の分は、明日にしましょうよ。もし先生が今日もう1つ単語を覚えたらゲラも勉強するはずよ」

（エディタ）「"カンパイ"はどう？」

（マグダ）「先生にも1つ覚えてもらわないと、だめよ」

（グジェゴジュ）「それじゃあ、何にするかな。"ドブラーノッツ"」

〈"ドブラーノッツ"。日本では"おやすみなさい"だよ〉

（グジェゴジュ）「オヤスミナサイ？」

〈よくできましたよ〉

（グジェゴジュ）「エディタ、グラスを動かして、お酒を飲みほしてごらん」

（エディタ）「いいえ、私はもうだめ。飲めないわ」

（グジェゴジュ）「でも、味見をしなければだめだよ？」

（エディタ）もう、本当にだめなの。でも、せっかく先生がもってきてくれたお酒ですから、ちょっとだけでも飲まないとだめかしら。それじゃ、半分くらいにしてね」

（グジェゴジュ）「もう酒を選ぶこともないでしょう。ちょっとでも飲まなくちゃ。ああ、面白いな。エディタは、明日も勇気を出してここに来るかどうか、知りたいよ」

（エディタ）「でも、もう私はほんとに飲めないのよ」

（アンヂュジェイ）「大丈夫、大丈夫、それじゃあ半分いれてあげるよ。どうして半分なの？」

（エディタ）「だって、ほんの味見だけだから」

（グジェゴジュ）「もう酒を空けてあるから、いっぱい入れたら？」

（エディタ）「もうだめ、だめ」

（グジェゴジュ）「何がだめなものか。足を取って、足を越えたら、もっと酒を飲めるさ」

（マグダ）「アンヂュジェイ、どう？　今日はお酒を楽しく飲めて嬉しいでしょう。あら、先生もぜんぶ飲んでないですね。日本のお酒は、アルコール20パーセント入っていますね」

（グジェゴジュ）「僕は明日、仕事へどうやって行くかな。たぶん泳ぐような感じで行くのかな。（酒で）足が柔らかくなって、浮かぶような感じで歩くのかな。みんな、これ

は冗談。僕はまだ大丈夫さ。みんなは酔っ払ってるんじゃないの？」

〈あすは金曜日だから、いいんじゃないの？〉

（グジェゴジュ）「僕は、土曜日も仕事に行くんだ。ポルメタルは今週の土曜日、休みじゃないんだ」

（アンヂュジェイ）「そうか。僕の会社も、この土曜日は仕事さ。土曜日は休みになるって話しがきたことあったけど、結局は仕事さ」

（グジェゴジュ）「エディタ、食べて、食べて。ケーキもっと切ってくるから、食べてよ」

（エディタ）「もういらないわ」

（グジェゴジュ）「アンナさん、どうして笑ってるの？」

（アンナ）「どうしてって、別に理由ないわ。ただ楽しいからよ」

（グジェゴジュ）「アンナさん、泣くより笑った方がいいでしょう？　僕、そう思うんだ。や、や、ちょっと酔っ払ったかな？　おお、神様、怖いです。みんな、言葉にご注意だぞ」

〈いまいった冗談も、みんなテープニ入ってるからね。日本に帰ったらこのテープを聞きながら酒をのむんだよ〉

（グジェゴジュ）「先生はこのテープを、日本にもっていって、ぜんぶ通訳してもらうつもりだぞ」

（アンヂュジェイ）「僕らも、そこで録音してるじゃないか」

〈（日本からお土産に持参した和紙に俳句が書かれているのを指して）これは俳句といいます。たぶん世界いちばん短い詩〉

（グジェゴジュ）「俳句？　先生は自分で俳句を書けますか」

（エディタ）「もちろんよ」

（マグダ）「もちろんって？」

（エディタ）「先生が自分で俳句を書くことができるってことよ」

（アンナ）「ああ、そうですか。それじゃ、私が頼んでいいかしら。私のために俳句を書いてくれなかったら、私が先生をポーランドから出させませんからね。どう、いいですか？」

〈はい、いいですよ。そう、どう書くかな。考えるには時間がかるから。その前にこれは、日本の暦です。コレ１月の暦、２月の暦。（記号や配列は）ポーランドとまったく同じしょう？〉

（グジェゴジュ）「（紙を出して）ここに、何か奇麗に書き込むんでほしいな。ちょっとしたものでもいいよ。自分で作った俳句でもいいですよ。ここに。あとで母にあげるんだ」

（グジェゴジュ）「ちょっと待って下さい。これは、瀬戸物じゃない、プラスチックで

す」

〈これは瀬戸物で作ってるけど、なにを書いてるか分からないな。日本人でも分からない〉

（グジェゴジュ）「この筆跡、可愛いですね。全く、子供の絵かきのような描き方だ」

〈大人の字ですよ。漢字を崩して書いてるんだよ〉

（マグダ）「どうして先生は、ここに何か書いてある、解りませんか？　大学の教授なのに。俳句書いてんのに、読むことできないの？」

〈ポーランド人でも、あなた達が速く書く文字はわからなくなるでしょう？〉

（グジェゴジュ）「しかし、読めにって、僕、信じられないよ。僕は、誰が書いた字でも読めるさ。座って、ゆっくり読めばね」

〈赤の数字は休み。今日は３月15日。青は土曜日…。ポーランド人と日本人がお互いに理解できるのは数字だけです〉

（グジェゴジュ）「それじゃあ、日本人はポーランド人より、祭日が多くあるんだ。日本人は、夏の休暇ないからかな」

〈これは日本の時計です。今日、ゲラの友だちが２人くるというのでもってきました〉

（アンヂュジェイとマグダ）「おお、ジェンクゥェン！」

（マグダ）「”ジェンクゥェン” は日本語で何ていうの？」

〈”どうもありがとう” 〉

（エディタ）「どうぞ勉強して。思い切っていってみてほしいわ」

（アンヂュジェイ）「ドウモアリガトウ」

〈ジェンクエゥン バルゾ ！　”ありがとう”だけでいいです〉

（マグダ）「どうやって、どういうの？　ドウモアリガトウ？　（アンヂュジェイに向かって）何のために時計を開けているの？」

（アンヂュジェイ）「目覚ましが急に音を出したら嫌だから」

（アンナ）「ああ、楽しいわ」

（アンヂュジェイ）「まだ何かもらえるのかな。あ、すいません、アリガトウ」

〈（日本から持参した耳掻きをみせながら／耳掻きは和紙でくるんである）これ、どんなときに使うか知ってますか？〉

（グジェゴジュとマグダ）「いえ」

（エディタ）「これは箸じゃないですか？　たぶん箸でしょう。」

〈いいえ、箸じゃないです。どんなときに使うか分かりますか？〉

（みんな）「さあ…」

〈耳に使います。耳をきれいにするときに使います〉

（マグダ）ええ、ほんとうですか？　耳に？」

〈ちょっと使ってみてください。（マグダに向かって）１本はあなたに、もう１本は、

あなたのご主人にあげて下さい〉

（グジェゴジュ）「使ってみてよ。耳のなかに入れて、動かして、やってみな。あ、先生の名前を書いてよ」

〈私はここに日本語で"ポーランドの若い友だちの幸せのために"と書きます〉

（グジェゴジュ）「ぜんぶきれいに書いて、日にちも入れてくださいね」

（マグダ）「ちょっとみせて。みんな見て、素晴らしい。見て見て。先生のサインよ。」

（エディタ）「日本語では最初に苗字を書いて、そのあとに名前を書くのよ」

〈これじゃ読めないから、英語でサインしておきます〉

（グジェゴジュ）「これは素晴らしい。立派だなあ。どうもありがとう」

（アンヂュジェイ）「エディタ、ポーランド語の翻訳をちゃんと書いてほしいな。忘れないためにね。この（大山の文字の）下に書いて下さい」

（マグダ）「汚れるからやめて、そんなこと。じゃあ、最後のページで書いて」

（アンナ）「先生から時計のプレゼントをいただいて、思い出ができましたね」

（アンヂュジェイ）「僕は時計持ってなかったんだ。時計して歩くの、あまり好きじゃないし、僕の時計、壊れてしまったんだ」

（マグダ）「私もなかったの。私も時計して歩くのは、あまり好きじゃないわ」

（アンヂュジェイ）「マグダは、いま時計をもつことできたんだから、こんどは約束の時間に遅れたら、"私，時間がわからなかった"、ってもうえるないだろう？」

〈こんどは、あなたがたにお願いがあります。このノートにあなたがた３人のサインをしてほしいんだけど〉

（グジェゴジュ）「サインだけでいいの？」

〈いいえ、何か書きたいことがあったら、書いてください〉

（グジェゴジュ）「自分で考えた言葉で書くの？」

（アンナ）「はい、はい、そうです」

（マグダ）「だれがいちばん最初に書き込むの？」

〈エラから始めましょうか〉

（グジェゴジュ）「ううん、でも、何書けばいいかな」

（アンヂュジェイ）「僕は何を書くか、教えないぞ。教えたら、僕、書きたいことなくなるからな」

（グジェゴジュ）「だけど、ほんとに分からないよ」

（マグダ）「私も…」

〈簡単で好きな言葉でいいですよ。自分の顔を描いてもいいんですよ〉

（グジェゴジュ）「僕、自分の顔を描けば、どうにもならなくなるよ。マグダは美術科だろ？　マグダに書いてもらうかな」

（アンヂュジェイ）「マグダさん、何か書けよ」

（マグダ）「でも…。まだそんな気持ちになってないわ。学校の試験じゃないから、何かかわいいことを考えた方がいいでしょう？　簡単な言葉でも面白いものもあるわ」

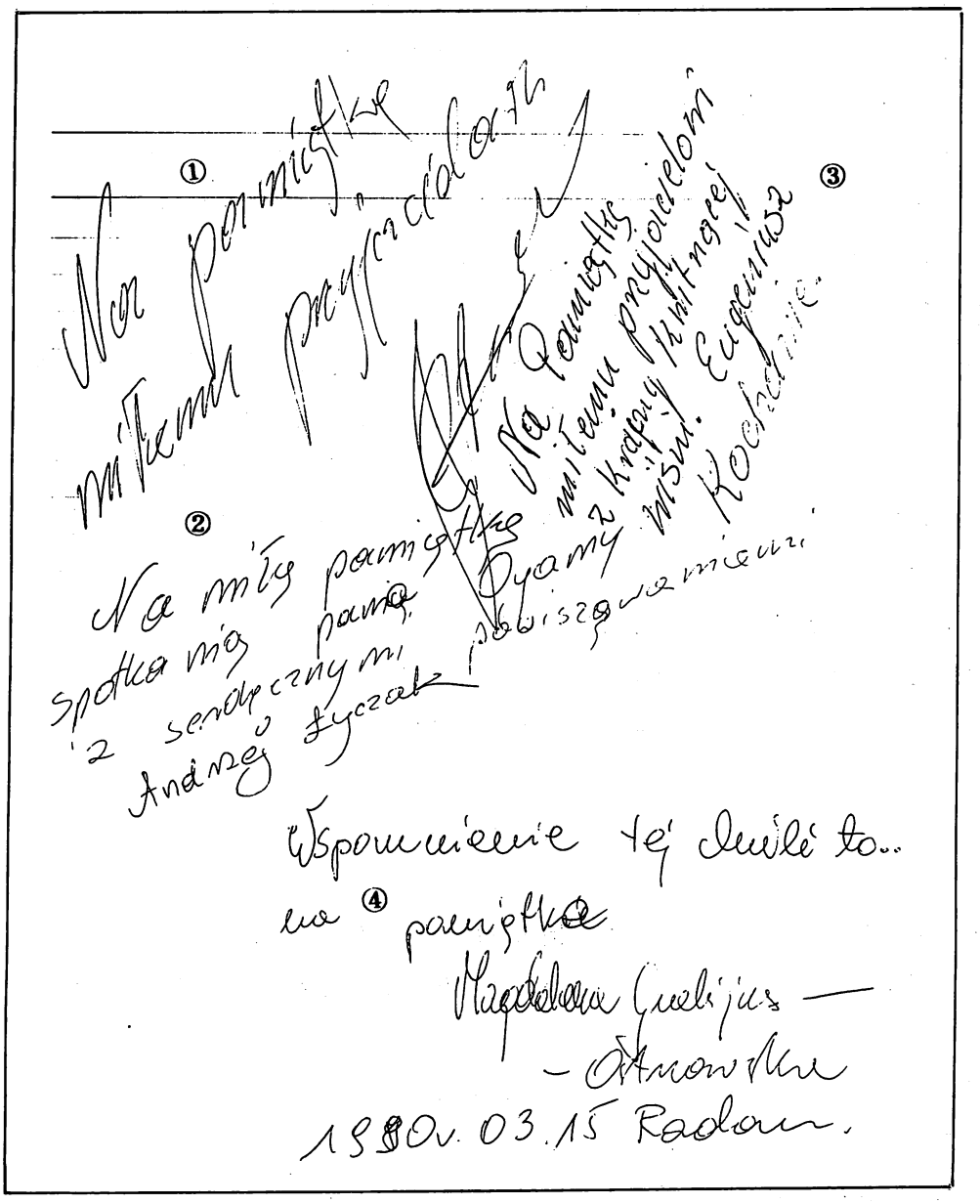
（アンヂュジェイ）「ゲラ、どこに書き込む？」

（グジェゴジュ）「僕は〝愛らしい友だちに〟って書こうかな」

［全員が寄せ書きを終えて］

（アンヂュジェイ）「30分くらいしたら、僕、帰らなくちゃ」

（グジェゴジュ）「いいの、いいの、まだいいの」



複写１　大山への寄せ書き

①「たいへん感じのいい友だちのために」（グジェゴジュ）②「お会いできたことの記念に」（アンジュジェイ）③「桜の国からきた友人のために：愛する人へ」（エウゲニュッシュ）④「お会いできた思い出の記念して／1990年3月15日　ラドム」（マグダ）

（大山が使用しているマイクロカッセト・レコーダーをみて）

（アンヂュジェイ）「これ、ずっと録音してるの？ このキーは？」

〈ずっと録音していますよ。ナショナルという会社の製品です〉

（グジェゴジェ）「巻き戻してみて、話を聞けるんできるでしょう」

（これが再生です。〉

（グジェゴジェ）「このマイク、素晴らしいな。テープ（の進度）を計るメーターもついてるぞ。これは、いい製品だ。じゃあ、どうぞ、飲みましょう。（日本酒を）飲んでみようよ。乾杯だ」

（全員）「じゃあ、乾杯！」

（グジェゴジェ）「あまりうまくないな」

〈温たためて飲むとおいしいですよ〉

（グジェゴジェ）「じゃあ、このまま？　ちょっと待って、この（お酒が入った）花瓶［瀬戸の化粧ボトルのこと］と一緒に，そのままお湯ののなかに入れていいの？」

（エディタ）「いいえ、いいえ、きっと、そのまんまだめでしょう。」

（グジェゴジェ）「どう温めるの？」

〈日本では別の小さなボトルにお酒を入れ、ヤカンにお湯を入れて、鍋にでもいいですが、そのボトルを外側から暖めます〉

（アンヂュジェイ）「誰かにこの、ここ（瀬戸のボトル）に書いてある日本語、漢字をみせたらびっくりするだろうな」

（グジェゴジェ）「ああ、もうやり方が分かったよ。何か小さい入れ物に入れて、その入れ物をお湯が入ってる鍋に入れればいいんだね」

〈はいはい、もうよく解ったね〉

（エディタ）「その（瀬戸物の）小さな入れ物は、大きな入れ物のなか、入れなければならないの。ご飯を炊くときと同じふうに」

（グジェゴジェ）「ああ、ご飯の炊き方なんか、僕、分からないよ」

〈日本酒にはサシミ　ー　ナマの魚ががよくあいます。私も好きですが、外国人は、日本にきたポーランド人もあまり食べれませんね〉

（グジェゴジェ）「ポーランドは、生魚ぜんぜん食べないよ。僕も魚は好きじゃないな。

（アンヂュジェイ）「日本では魚はご飯のつぎに基本の食物になっているんでしょう？」

〈基本的ですけども、最近は肉もたくさん食べますよ〉

（マグダ）「最近ポーランドでは、食物のなかで野菜の役割が大きくなったのよ(*)」

---

*　このマグダの言葉で一同が笑っている。ここでマグダは野菜のことを"warzywo"といわないで、"jarzyna"という単語で表している。翻訳者のハリーナ熊倉さんの話によると、"jarzyna" にはその野菜が「小さくて可愛らしい／とてもおいしそう」という感じが込められており、小人たちが食べるような愛らしい言い回しだったので、みんなが笑ったという。

（グジェゴジェ）「まだいまのところは、日本の酒は残しておけよ」

（アンヂュジェイ）「また待つのかい？」

（グジェゴジェ）「酒、温めましょうか？」

（マグダ）「最初にお湯を入れて、お酒（のボトル）はあとにしましょうよ。ちょっとすいません。お酒は（鍋の）枠を満たすまで温めるんですか？」

（グジェゴジェ）「鍋は２つ使おうよ。一つ、ちょっと大きいやつ」

（アンナ）「あなたたち２人で、ほんとにこの（一方の）ビン、もうぜんぶ飲んでしまったのね。（酔って）とても楽しそう。気もちよく話してるもの」

（エディタ）「私もうだめ。頭のなかで、何か回っている感じよ。ああ、たいへん。恐いわ」

（アンヂュジェイ）「どうして彼女、たいへんって言ってんだい？」

（グジェゴジェ）「分からないよ」

（アンヂュジェイ）「どうしてあなた、たいへんっていうの？　こんなに楽しいのに」

（エディタ）「それは、とっても楽しいわ。でも、私の頭、ちょっとフラフラしているのよ。」

（グジェゴジェ）「どうぞ、どうぞ。アンナさんも、どうぞ食べてください」

（アンナ）「いただいてるわ。みんな気にしないで。楽しくやっているわ」

（アンヂュジェイ）「おお、（酒が）こぼれちゃった。うちが汚れちゃったね」

（グジェゴジェ）「猫がいなくて残念だな。家庭菜園に行っちまったよ。いつかハリネズミを飼ってたんだけど、そのときハリネズミが、こぼれて落ちた食物をいつもきれいに掃除してくれたんだ」

（マグダ）「もう汚いから、お皿にのせないでよ」

（アンナ）「いいえ、何ともないわ。私はこれを食べます」

（マグダ）「いえいえ、やめてください。何か髪でも入ってたら…」

〈マグダは、まだ子供はいないの〉

（マグダ）「子供はまだ２年か、４年後ね、いまのところ。よその子供も好きなの」

（アンナ）「小学校の先生になるつもり？」

（マグダ）「ええ」

〈それは、小さいころからのあなたの夢でしたか？　お母さんの影響はありましたか？〉

（マグダ）「いいえ、ありません。ほんのことをいえば、私の家族はみんな教師なの。教師の職業が、私の血を流れているのね。教師の血は、世代から世代へどんどん受け継がれているの。私も子供と一緒に、子供のために仕事したいの。私の個人的な気持ち、願いなの」

（グジェゴジェ）「先生、これから僕たち、酒を飲むつもりです。でもこれは、先生に帰ってほしいってことじゃないよ。そなん気持ちは、まったくないんだ。僕たち、その酒

をどのくらいの温度で飲めばいいか、先生に教えてほしいんだ。先生に酒の温度、みてほしいから、あとで、僕たち、その酒を温かいまま飲んでみたいのさ」

〈わかりました。それでは台所へいきましょう〉

（マグダ）「私も、その作り方、みたいわ」

（グジェゴジェ）「これ、もうを温まっている？　どうですか？　沸くまで待つんですか？」

〈お酒のいい匂いを強く感じるまで。私は温かいお酒を飲むと、日本に帰りたくなるから飲まないことにします〉

（マグダ）「先生、あした起きれますか？」

〈いや、分からない。あまりいい夢をみるから、起きれないかもしれないよ〉

（アンヂュジェイ）「あした僕、起きれるかな」

（グジェゴジェ）「たぶん起きれないさ」

（アンヂュジェイ）「それじゃあ、僕、どうやって仕事に行く？　５時には起きないと。５時ちょっと過ぎには」

〈じゃあ、今夜はもう飲むのヤメましょうか〉

（グジェゴジェ）「いやだよ。仕事に遅れてもいいさ。酒はやめないよ」

（アンヂュジェイ）「本当に遅れたらどうしようか？」

（マグダ）「気にしないで、気にしないで」

（アンヂュジェイ）「そうか、僕、今晩、あと半分くらい、お祈りする？」

（マグダ）「なにも、そんなに夜中までやらなくていいでしょ」

（グジェゴジェ）「あ、（沸かした）酒のいい匂いがしてきたぞ。さっきは、ぜんぜん匂いがしなかったのに」

〈それは魔法の酒だよ。つまり暖かくすれば、いい夢をみて寝れるんだよ〉

（グジェゴジェ）「先生はビンベル知らないですか？」

〈さあ、それ何ですか〉

（グジェゴジェ）「札幌に住んでいるポーランドの友だちに通訳してもらうと分かるよ。そのビンベルと、日本の酒は匂いが似ている。ビンベルというウォッカは、ポーランド人が、自分のうちで作ったウォッカの名前なんですよ。ビンベル酒とジャガ芋で作るんだ。ビンベルは香りが強くて、味はあまりよくないんだ。

そのまま飲むと、ちょっとまずいんだよ。ポーランドはウォッカが高いから、みんなビンベルを家で作るんですよ。もちろん禁止されてるけどね。作っているところを見つかったら、捕まえられて裁判になるんだ。もしいま、急にここにお巡りさんが入ってきたら、ビンベル、ビンベルって、うるさくするだろうな」

〈もう少し、日を弱くしてください〉

（マグダ）「私も、もう（日本酒の）香りを感じるわ」

（グジェゴジェ）「できた、できた。さあ火傷しないように、布巾で持つんだ」

（エディタ）「うまくできた？」

（グジェゴジェ）「うん、もちろんだ。先生が自分で確認してくれたよ」

（マグダ）「そう。でも、私、もう飲めない」

（グジェゴジェ）「それじゃ、飲もうね。アンナさん、まだお酒、残ってますよ」

（アンナ）「そうね。あなたは、もうないわね。私、まだいろいろあるわ」

（グジェゴジェ）「だから、どうすればいいの」

（アンナ）「先にシャンペン飲んでしまおうと思ったの」

（グジェゴジェ）「それじゃあ、この２つのグラスを、どうぞ。どうぞ、飲んでくださいよ」

（アンナ）「でも私たち、明日またここに戻りますから、そんなに飲まなくていいのよ」

（グジェゴジェ）「ちょっと熱過ぎたかな」

〈これでいいですよ。グラスはこの小さいので、ちょうどいいですよ〉

（グジェゴジェ）「どうして、そんなにグラスの行列が並ぶの？　自分のグラスまであわせて」

（マグダ）「これは私じゃないわ。このグラスは、今日の催しのために、みんなのと一緒に並べたの。じゃ、どうぞ。こんなふうに。ウォッカ、ワイン、シャンペン、お酒、こんなにたくさん」

（グジェゴジェ）「アンナさん、温かいうちに飲んで下さい。混ぜて飲んで下さい」

（アンナ）「いいえ、できないわ。混ぜて飲んだら、寝むくなっちゃうわ」

（マグダ）「あなた、酒入れる自分のグラス、どこにあるの？　私の？　ここ、ここに。私、まだ入れてもらってないわ。ちょっと、このくらいだけね。私も、もうだめだから」

〈熱くても、ゆっくり飲めば大丈夫〉

（グジェゴジェ）「熱いまま味見しなくちゃ、乾杯！」

（全員）「乾杯！」

（グジェゴジェ）「ほんと、うまい。温かいまま飲むと、やっぱりおいしいよ。冷たいときは、味があまりはっきりしなかったけど、このまんまで飲むとおいしいぞ」

［グジェゴジェの父のエウゲニュッシュが帰って仲間に加わる］

（グジェゴジェ）「ちょうど、いいところに帰ってきてよかったよ。熱い酒があるんだ」

〈ラドムの調査も明日で終わりますので、一緒に飲みませんか？〉

（エウゲニュッシュ）「あ、そうかい？　おいしい、本当においしいな」

（グジェゴジェ）「先生のグラスは２つになったよ。１つはワイン、２番目のは酒」

〈いえいえ、３つです。お酒はいろいろな種類を並べてすこしづつ飲むと、おいしいんですよ。日本では”チャンポン”っていって、混ぜて飲むのは身体に悪いっていいますが、私の身体は混ぜれば混ぜるほど健康になるんだよ〉

（アンヂュジェイ）「マグダ、ちょっと来て。先生が面白いこといってるよ。酒を飲む人は、飲んでいるとき、いろんな酒があったほうがいいと、先生がはっきりいったんだ」

（マグダ）「混ぜて飲むとトラブルが起きないかな」

（グジェゴジェ）「飲むときに、選べるからいいんじゃない？」

（マグダ）「さあ、そうかしら。たぶん、そうかな？」

（グジェゴジェ）「おもしろいね。そんなふうに飲んだら、バランスが取れますか？」

〈もちろん。誰でも健康のためになるよ〉

（グジェゴジェ）「酒、まだ冷めてないから、よかった。（お父さんに向かって）大山先生のサイン、見ましたか？　うしろ、うしろにあるよ。ここ、これ」

〈お父さんは日本のお酒が好きだからといったから、今日もってきたけど、われわれがほとんど飲んでしまったね〉

（エウゲニュッシュ）「僕は、日本の本当の酒、まだ飲んだことない」

〈これがその酒ですよ〉

（エウゲニュッシュ）「そんなに温かいかね？」

（マグダ）「そうよ。これ、私たちが作ったのよ。どうぞ日本のお酒を飲んでみてください」

（エウゲニュッシュ）「ああ、喜んで。俺は暇なとき、酒飲むの好きだからな」

〈明日、５時に来ていいですか？〉

（エウゲニュッシュ）「どうぞ、どうぞ」

（グジェゴジェ）「マグダとアンジェイが、時計を１つづつもらったんだよ。あと、僕はきれいな耳掻きもらったよ」

（マグダ）「それは、爪楊枝でしょう？」

（エウゲニュッシュが日本酒を飲みながら）「俺には、うまいな。これはアルコールは何度くらいあるんだい？」

〈20度くらいですです〉

（エウゲニュッシュ）「それじゃあ、ワインよりちょっと強いね」

〈温めると40度くらいに感じますよ〉

（エウゲニュッシュ）「俺、うちに帰る途中で、ここにみんながまだいるかどうか考えてたよ。窓をみたら、まだ明かりがついてたから、みんながまだいると思った。きのう先生と話したとき、日本人はとてもはたらき者といってたな。俺ははたらく時間が決まってないけど、必要なときは何時まででもはたらくさ」

（マグダが寄せ書きを示して）「今夜のことの思い出に、記念のため、お父さんもここにサインしてくださらない？　先生が、自分の顔を書いてもいいんですって」

（エウゲニュッシュ）「自分の顔を書いてもいいって？　アンナさん、紅茶もっといかが？」

（アンナ）「いいえ、もういいわ。私、もう飲みました」

（エウゲニュッシュ）「大山先生は、ポーランド人が好きになったっていうんだ。いろんな人と会って、いろんな家族を覗いてみて、好きになったようだよ。"桜が咲いている国からきた気持ちのよい友だちに、記念として"と書くよ」

〈お父さんのいちばん好きな言葉を書いてほしいんです〉

（グジェゴジェ）「いちばん好きな単語は何？」

（エウゲニュッシュ）「単語？」

〈自分で好きな言葉は、赤で書いてくださいよ〉

（エウゲニュッシュ）「それは、俺もちょっと考えないとな…」

（グジェゴジェ）「どうしましたんだ。どんな言葉がいちばん好きなの？」

（エウゲニュッシュ）「うん、何でもいいよ」

（グジェゴジェ）「好きな単語を書いてよ」

（エウゲニュッシュ）「みなさん、そろそろ帰るつもりですか？」

（グジェゴジェはエウゲニュッシュが最後に朱色で書いた"Kochanie"という文字をみてすぐに）「おお、やっぱり父さんは、僕が思ったとおり書いたよ。これを書くと思ったんだ。だれにダーリンって言いたいの？」

（エウゲニュッシュ）「とてもに親しい人に、だよ」

（グジェゴジェ）「自分の妻に、ではないのかな？」

（エウゲニュッシュ）「とても親しい人にだよ。俺にとって、もちろん女房も親しい人だけどな」

〈月曜日からこのラドムを訪問していますが、ラドムでたいへんいい思い出をつくることができて嬉しいです〉

（エウゲニュッシュ）「ああ、俺たちも嬉しいよ。俺、日本は素晴らしい国だと思うんだ。いまのところは遠くからだけで、日本のことはなにも見てないが、日本のことは尊敬してるんだ。日本にいって、自分の目で、どのくらい素晴らしい国かみたいもんだ。いままでの俺の想像を、自分の目で確かめてみたいのよ。ちょうど今日、俺と一緒に工作所をやっている人と、日本のことを話してたのさ。

そのとき俺は"日本は素晴らしい国だ。俺、日本のこと好きで日本人を尊敬しる"とそういったところさ。日本民族は、はたらき者だ。そういうことを、ずっと考えてたのよ。労働をすれば、何でも手に入る。もちろんまじめに仕事をすれば、いろいろ素晴らしいことができるんだぞ」

〈明日またきますので、そういうことについて、いろいろお話ししたいんです〉

（エウゲニュッシュ）「ああ、そうかね。ほんとに？」

〈ゲラ。マグダとアンヂュジェイ、あなたたち３人の写真を撮っていいかい〉〉

（グジェゴジェ）「もちろんだよ。みんなで写真撮ろうか。マグダを真ん中に入れて。

〈ゲラはこんなにいい友だちが２人いて、幸せですね。みんなもきっと。ポーランドの男のなかでいちばんハンサム。とてもいい〉

（マグダ）「いいえ、そこまでいわなくても」

（エウゲニュッシュ）「すると先生は、日本に戻ったら、ポーランド人のいいことしか言えないな。自分の友だちに、ポーランド人のこと称賛するしかないんじゃないか？」

〈日本もポーランドも素晴らしい国だけど、日本人はポーランド人の優しさを、もういちど考え直す必要がある、日本へ帰ったらいいますよ〉

（エウゲニュッシュ）「それは、そう言うことないだろうな。俺たちだって、先生のことを、いい人だとしか、いいようがないものな」

〈日本人は経済的な利益を追い過ぎて、こころの優しさを忘れていると思うからですよ〉

（エウゲニュッシュ）「ああ、そういうことか」

（アンナ）「もう10時過ぎたんですね。帰らなくちゃ」

（エウゲニュッシュ）「いま先生がいったとおり、そんなことあるかも知れないな。先生には、学校時代のときから、ずっと長い間付き合っている友だちがいますか？」

〈もちろん、おりますよ〉

（エウゲニュッシュ）「先生は、さっき、大事なことをいいましたよね。日本人ははたらき過ぎだと。例えば、はたらき過ぎて家族のことを、ほったらかす。その家族の例は、俺にもいえるんだな。俺も仕事で忙しくて、自分の家族のこと、きょうだいのことをほったらかしてるものな」

（アンナ）「もう10時過ぎね。もう本当にだめ」

（エウゲニュッシュ）「今朝、俺は７時にうちを出て、いま帰ったばかりなのに」

（アンナ）「そんなに長い間？　何時間、仕事してのかしら」

〈お父さん、とってもいい顔してますよ〉

（エウゲニュッシュ）「はい、そう。俺はもう１回、ちょっとだけ乾杯しような。この酒は俺の味に合ってるよ。アンヂュジェイ、君にもちょっと入れるか」

（アンヂュジェイ）「僕はまだあるよ。よく眠れるさ」

（グジェゴジェ）「父さん、この酒飲んだら、なかなか起きれないだろうに」

（エウゲニュッシュ）「ああ楽しい、楽しい。みんな、ビンベルのこと知ってるよな。この（日本の）酒は、ポーランドの弱いビンベルに似ているな。日本の酒も特別な匂いがするな。ビンベルも、ちょっと匂いがにてるんだ。ビンベルのほうが、もうちょっと強いけどな」

（エディタ）「友だち３人は、一緒に立ってください。一緒に並んで。そう、そんなふうに。ね、こっちを見て。写真よ」

（グジェゴジェ）「その写真送ってもらいたいね」

〈日本に帰ったら、かならず写真を送りますよ。若いときの友情を大切に〉

（エウゲニュッシュ）「日本製だから、きっとカラー写真になるさ。俺たちは先生のことを、とても感じのよい先生だってことを、これからもずっと思い出すさ。先生は俺たちのことを、どんなふうに思い出してくれるかな」

〈またかならず来ますから。エウゲニュッシュさんも息子さんも、何年先でも、もし日本に来る機会があったら歓迎しますよ〉

（エウゲニュッシュ）「先生も、いつでもいらっしゃい」

（グジェゴジェ）「5年たったら、僕、もう自分の家族と子供がいるでしょう」

（エディタ）「私ももちろん日本へ行きたいけど、今のところ日本まで切符は2千 800万グロッシェですよ」

（グジェゴジェ）「え？　そんな値段、僕、信じられないよ。往復で？」

（エディタ）「たしか、そんな値段になったのよ。これから安くなるかどうか。いまのところは（インフレで）どんどん何でも変わるから、切符の値段もとても変わるから」

（アンナ）「タクシー来ましたか？」

（エウゲニュッシュ）「さっき、うちに帰ったとき、まだ来てなかったよ」

（グジェゴジェ）「もしかして、違うところまとまって待ってるかな？」

〈今晩はたいへん楽しい時間を過ごすことができてうれしかった〉

（エウゲニュッシュ）「しかし、俺には時間が少なかったよ。もうちょっと時間があればよかったけどな」

〈今日は若い人と。あしたはお父さんとたくさん話ができると思います〉

（エウゲニュッシュ）「明日は、俺、うちにいるからどうぞ。話ししましょう。煙草どうぞ」

（マグダ）「先生を下まで送って行きましょうよ。もう終わりにしましょうか？　もうタクシー、そこで待ってわ」

〈今日はポルメタルでアンケートが終わったあと、2時間くらい時間があったので、カトリック教会やロシア人の墓、ユダヤ人の住んでいた所を見てきました。私はラドムのような小さな町が好きです。人間の優しさ残ってますからね〉

（エウゲニュッシュ）「俺も大きな町より、小さな町に住んでた方がいいと思うな。しかし、ラドムもどんどん大きくなってるけどね」

（アンナ）「今日はエウゲニュッシュさんと、奥様がうちへ少し遅く帰ってきてくれて、どうもありがとう。おかげで、若い人たちと自由に話ができました」

（グジェゴジェ）「アンヂュジェイと僕は、いろいろな話しができるんだ。僕の男友だちは、みんな"ゲラ、おまえの両親はとても素晴らしい"っていってくれるよ。友だちのよう両親だってね」

〈ゲラの友だちが、お父さんと友だちのように話ができるのは素晴らしいことですね。アンヂュジェイくんも、エウゲニュッシュさんとは、友だちのように話せるんでしょう？〉

（アンヂュジェイ）「ほんとにそうだよ」

（マグダ）「ゲラ、ちょっと待って、女の子のお友だちはどう？　そういうこと言わないの？」

（アンヂュジェイ）「先生に、俺の考え方を認めてもらって、どうもありがとう」

（マグダ）「私たちに、いろいろプレゼントとか、どうもありがとう」

〈今日はもう遅くなりました。素晴らしいごちそうとおもてなしに感謝します〉

（エウゲニュッシュ）「俺たちも、こんないいお客さまを接待できて、十分満足しているよ」

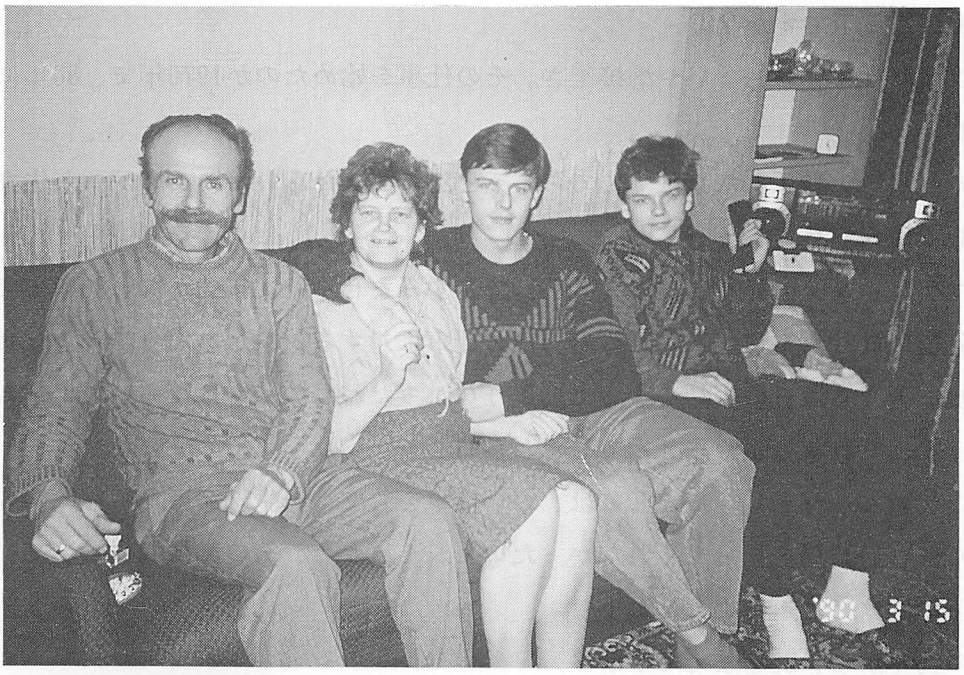


写真４　ウローベル一家。右がグジェゴジュの弟のマチェイ君

PART III

〈改めて現在の会社を始めたころの話を伺いたいのですが、いつどのようなきっかけで会社を始めましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「あ、そうか。先生は、俺が個人の工作所を始めたことを聞きたいんだね。前にも少し言ったが、もし差し支えないなら、もういちど話すよ。俺は国営工場の給料がかなり安かったから、家族と生活ができなかったんだ。はたらいていた所は郵便局なんだが、車とトラックで（郵便物を）輸送している会社さ。郵便局のなかに運送部門があって、手紙とか小包を運んだり、ワルシャワから新聞を運んだり、そういうような仕事をする部門だったのさ。自分のやっていた仕事は運送そのものじゃなくて、運送取扱所で車の修理をやってたんだよ」

〈職種が修理工ですか？〉

（エウゲニュッシュ）「いや溶接工さ。その仕事を始めたのが1970年で、80年に辞めたのかな」

（妻のハリーナ）「あなたはそこでちょうど20年間はたらいたのよ。ゲラが生まれたときに、そこに入ったでしょう？」

（エウゲニュッシュ）「あ、ちょっと待て。すみません、16年間かな。86年まで。俺、86年で免職になったんだ。というのも、俺の仕事に対する給料があまり少なかったからな」

（ハリーナ）「毎日の生活をするには足りなかったわね。私もはたらいて、主人もはたらいたけど、それでも足りませんでしたからね」

（エウゲニュッシュ）「俺としては、いい仕事をして、一生懸命はたらいてたのに、むこうさんはいい給料を払ってくれなかったのよ。それから、その郵便局に勤めていたときはは、１年間ソビエトにいたんだ」

〈その70年から、86年までですか？〉

（エウゲニュッシュ）「詳しくいうと、1979年にロシアへいって、80年に帰ったよ。ガス送りだす管、チューブを作っているところでね」

〈どんなチューブですか？〉

（エウゲニュッシュ）「ふつうは、土を掘って、そのなかに太いパイプ入れて、長くつなげて、ポーランドまでとか、西ドイツまでガスを送り出す管だよ。ロシアからポーランドまで、何千万キロ続いているガス道だったな。ソビエトからポーランドまで、ガスを送り出す線の敷設さ。土を掘ってパイプつないで、ガス漏れないようにとかね。先生、ポーランドの煙草どうですか？」

〈ああ、どうもありがとう〉

（エウゲニュッシュ）「いいえ、ソビエトの仕事は、郵便局の仕事としてではなかった。ワルシャワにある会社が、俺を郵便局から借りてきたという形さ」

（アンナ）「ワルシャワにある会社、ポールセルビスという会社でしたか？」

（エウゲニュッシュ）「いいえ、ポールセルビスとか、それはどうでもいいでしょう」

（アンナ）「とにかく、そのワルシャワの会社は、ソビエトに職員送っている会社でしたか？」

（エウゲニュッシュ）「そう。ソビエトにいろんな仕事するために、職員をそこへ行かせていました。しかし、俺は最初、いい職員かどうか確かめるために、その会社は俺をある小さな町に行かせて、そこで三ケ月くらいはたらいたんだよ」

（ハリーナ）「あなた、とても細かいね」

〈その時、その３ケ月の後、何か試験ありましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「いえいえ、そこに、そのワルシャワの会社の監督かマネージャーがそこにいて、その人たちが職員一人づつ見て、どんな人が、どのくらい、どんなふうに仕事ができるかどうかを決めていたのさ」

〈その人たちは、あなたがソビエトへ行くことになるのか、ソビエトでどんな給料を貰うかどうかを決めていたのですか？〉

（エウゲニュッシュ）「うん、そうだ。その人たちは、俺が職員として、労働者としてどんなグループに入るかどうか決めたんだな。ソビエトに行く前は３ケ月くらい仕事して、試験みたいものやって、それからソビエトへ仕事に行ったんだ。その会社もポーランドにガスを流す線を持っているんだよ。その３ケ月が経ってから、ワルシャワの会社の監督たちが決定したんだな。結論を出したのさ」

（アンナ）「ちょっとすみません、もう一つ質問があります。あなたは、誰かと面識があって、ソビエトへ行くことができたのかしら？」

（エウゲニュッシュ）「ええ、そうです。もちろんそうだよ。それは俺のはたらいていているワルシャワんの郵便局から書類を貰って、そこで、（名前を）貸してくれというようなことが書いてたんだな。ソビエトに行ったわけは、金のためだったよ。郵便局の賃金がひどく悪かったから、なんとか外国へ行っていい給料を貰いたかったんだ。いいコネがあったお陰で、郵便局の仕事を辞めなくですんだのさ。

郵便局は退職しないで、１年間休暇を貰ったんだよ。もちろん１年間の給料が出ないけどね。郵便局は休暇扱いなのさ。そのワルシャワの会社は国営企業だから、郵便局に命令されたわけだな。俺を貸してくれとな。だからそのときは、郵便局になにも言うことがなかったよ。そのワルシャワの会社は、ソビエトではたらくいてもらうために、ポーランド人を送り出す会社さ。そこに入るのは、なかなか難しいんだ。大勢の人がこの会社に入って、ソビエトではたらきたがっていたからね。

俺はご褒美としてソビエトにはたらきに行ったのさ。いい労働者としてな。もちろんそ

の会社は、あまりはたらかない奴はソビエトに行かせなかったんだ。国営の会社だから、いちばんいい労働者を選んで行かせたんだな。たぶん（大山）先生には、ポーランドにあるこんなメカニズム、解りにくいと思うけどね」

〈車を修理する資格と、ガス栓を作るときの資格は同じですか？〉

（エウゲニュッシュ）「資格はちょっと違ってたけど、なんとかなったよ。しかし、俺はその町の近くで、新しい資格を取ったのさ。後で、試験もあったよ。そのパイプをつなげるための資格。しかし、そのパイプをつなげる仕事とか、ガス栓を作る仕事は危なっかしい仕事だったんだ。だから、親方は違う仕事をほしがっていたな。だけど俺は違う仕事をやってたのさ。例えば台所で食料を運ぶとか、材料運ぶとか。しかし、それは後で、後で話すよ。間違えるからな。俺はソビエトへ行く前、ポーランドで３ケ月、新しい資格を取るために勉強し、訓練もしたけど、実際にそこに行ってからは、違う仕事をしたのさ。俺は何でもできるからね。いろんな監督とか、マネージャーとか…」

（アンナ）「そうすると、本当に詳しくいうと、何をなさっていたの？　台所ではたらいていましたか？」

（エウゲニュッシュ）「俺はどこででもはたらいていたのさ。地位もいくつか貰っていたから、それぞれの身分ではたらいていたんだ」

（アンナ）「しかし、どんな（内容の）仕事を？　どうしてそんなに、いろいろな仕事をしていたのかしら？」

（エウゲニュッシュ）「だって、いろんな部署の監督が、労働者として俺をほしがっていたんだ。だれでもいい労働者をほしがっているしょう？」

（アンナ）「だから、そこで何をしていか教えてください」

（エウゲニュッシュ）「担当者の１人は、俺と一緒にソビエト行った人なんだけど、その人は、俺に溶接工としてはたらいてほしかったんだな。しかし、その仕事の環境を見たら、その人たちは屋外ではたらいていてな。雨でも、雪でも、かなり寒いときでも外ではたらいてたし、それも危ない仕事だったから、俺はあんまり気に入ってなかった。もう１人、俺をほしがっていた担当者は、森の木を切っていた。俺もいろいろエンジンのことも知ってるから、沼地から水を吸っているポンプの面倒も見ていたよ。ポンプのモーターだな。そこにモーターの鋸（のこぎり）があって、その鋸で木を切ると、他の人がその木を運んでいくのよ。そんなところかな」

〈エウゲニュッシュさんは、ソビエトでどんな風景を見ましたか〉

（ハリーナ）「主人はソビエトのことをあんまり見てないの。だって、あの人たちも主人も、広い地形の森と沼しかないんですもの。本当に、主人いるところは、周りに人もいなくて森ばかりだったのよ」

（エウゲニュッシュ）「俺にとってその１年間は、まったく伝記から取った１年間だな。伝記から省いて取ったページみたいなものさ。そのとき俺は、子供を、家族を懐かしがっ

ていたからね」

（ハリーナ）「あなたへの質問は、何を見たかってことよ」

（エウゲニュッシュ）「だって俺は貧しい沼のあるところにいただけだもの」

〈人もあまりいなかったですか？〉

（エウゲニュッシュ）「そこただ森と沼だった。スコフという町の近くでワルシャワから1500キロメートル。モスクワまで、また 500キロあったな。これからちょっと横にある

〈シベリアではないんだ。人びとはどうやって暮らしていましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「ひどく貧しい生活していたよ」

（アンナ）「あなた、本当にご覧になったの？　どこで見ましたか？」

（エウゲニュッシュ）「もちろん見たさ」

（アンナ）「だって、そこは小さな森のなかよ。村しかなかったしょう？〉

（エウゲニュッシュ）「農民の家に行ったことがあったよ。そこに夏休みのときの２週間、子供と一緒に行ったんだ。そこに、人は見なかった。そこに大きな森と沼だけで、他に何もなかったな。町にも行ったけど、町ってもふつうの感じだったさ。オルシャという町、リテプスクという町も行ったけどね」

（ハリーナ）「リテプスク、オルシャという、ごくふつうの町でした。私たち、そこに主人と住んでいたの。家が森のなかにあって、ポーランド人の労働者のために作ったものでした。そこにお医者さんもいたのよ。そこに 900人の男が住んでたわ」

（エウゲニュッシュ）「だから、俺たちは蚊に恵まれて住んでたのさ。ずっと、どこでも蚊と一緒に住んでいたな。１つの棟に 900人のポーランド人がいたんだな。その棟から100百キロ離れて、また同じような棟があったから、100キロくらいの間隔で作られていたんだな。ぜんぶでたぶん６つくらいあったと思うな。賃金はもちろんよかったよ。ポーランドの賃金と、ぜんぜん比べものにならないくらいにね」

〈賃金はルーブルで？　ドルでしたか？〉

（エウゲニュッシュ）「いちおうすべてルーブルで貰ってたよ。その半分はドルに取り換えれたんだ。そのドルは、ワルシャワの銀行にある俺の口座に振り込むことになっていた。どんな職員でも、銀行に自分の口座があったからね。それじゃあ、どうぞ、乾杯。ラドムには１年前と同じ職場に戻ってきた」

〈ソビエトではどのくらい休暇がありました？〉

（エウゲニュッシュ）「休暇は１一ケ月くらい」

〈何月帰ってきましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「11月かな」

〈1980年ですか？〉

（エウゲニュッシュ）「いや、79年と思う。その後で、80年になってから前の仕事に戻ったのさ」

（アンナ）「それはちょっと解らなくなったわね。だってさっき、エウゲニュッシュさんは1979年にソビエトに行ったっておしゃったでしょう？　１年間そこにいたら、戻るのは80年でしょう？」

（エウゲニュッシュ）「ちょっと待て、待て。もう10年も前のことだからな。そういうこと、あんまり気にしないよ。俺たち、1978年11月11日にソビエトへ発って、1979年11月にポーランドへ戻ったんだ。そして次の年、80年から前の仕事に戻ったのさ」

〈そのとき、ポーランドは連帯のストライキ事件でしたか？〉

（エウゲニュッシュ）「はい、はい。ワレサ議長が権力に接近して、その時にストライキもあったな」

〈79年でしたかね？〉

（エウゲニュッシュ）「そう（80年は）、まだでしょう。しかし、いろいろな問題は80年の真ん中くらいから始まったな。しかし、（ソビエトへ行くときは）もうストライキをやってたな」

（ハリーナ）「そのとき、ちょうど私は、主人のところへ行こうと決めました。でも、家族の人たちはあまり危ない時期ですから行かないほうがいいって、そういうふうに言ってたのね。もうグダニスクの造船所でストライキをやっていましたから。(*)　私の家族もそのとき、ソビエトへ行くことには反対でしたけど、しかし、やはりそのときは、私たち４人で、家族全員で、主人のいるソビエトへ行くことにしたの。娘も一緒に」

〈奥さんがそへ行かれたのはいつでしたか？〉

（ハリーナ）「よく覚えてないわ。たぶん79年の７月だと思うけど…。あなた、そうでしょう？　それ７月だわ。79年の。そのときはちょうどモスクワでオリンピックやっていましたもの。その年の秋に、主人がポーランドへ帰って来たわ。そのときは、私たちのこのラドムの町で、まだ何にも不安な、危ないことはやってませんでしたね。そのときはグダニスクにある造船所だけが、反対して頑張っていたの。ラドムはまだ穏やかでしたね。ラドムは、ラドム、前いつか、前、四年くらい前に、反対起こしました。しかし、その後、静かでしたけど、グダニスクのことがあって、いろんな話が耳に入ってましたから、いろいろ不安でした」

〈ラドムでも、何かストライキとかありましたか？〉

（ハリーナ）「もちろん、ありました。あなた、覚えてるでしょう？　長いストライキあったこと」

（エウゲニュッシュ）「俺は覚えてないな。グダニスクの造船所では、ずいぶん長い間

---

*　グダニスク造船所は自主労組「連帯」の拠点。運動の発端は1980年７月に共産党のギエレク政権が食料品等の大幅な値上げを発表したのに対し、グダニスクを含むバルト海沿岸地方の労働者が反発したのに始まる。同年９月には労働者の代表 500名がグダニスクに集結し、９月22日に「連帯」という名称の規約が採択された。

（操業が）止まって、仕事はしてなかっただろう」

〈その前、ラドムのストライキとウルサスのストライキがありませんでしたか？〉

（ハリーナ）「はい。それは76年でした」

（エウゲニュッシュ）「俺は本当に知らないよ。順番に話してくれよ」

（ハリーナ）「あたな、知らない？」

（エウゲニュッシュ）「もちろん知らないさ。俺、まだ子供だったから」

（ハリーナ）「それは79年、80年でした」

（エウゲニュッシュ）「だから、何？」

（エウゲニュッシュ）「ああ、グダニスクのことなら知ってるよ」

（ハリーナ）「本当に、その前に、ラドムで76年に大きなストライキとか、労働者の反対があったのよ。だって、ここにコールというレジスタンスの組織が、ラドムで誕生してラドムで活動が始まったのよ。コールで活動していた人の名前、いまはちょっと忘れたけど」

（エウゲニュッシュ）「俺、覚えてないな。政治のことはあんまり興味がない。俺、何とか生活できるように、仕事しなければならなかったからな」

（ハリーナ）「そうね。私たち、政治活動に関係してないですものね。ただ、私が子供と一緒にソビエト行きを決めたとき、家族がすごく反対してました。ポーランドで、ストライキとかいろいろ不安なことあったから。みんながポーランドを出てソビエトへ行ったら、もう二度とポーランドに帰れなくなるとか、ソビエトに入ったら何が起こるか、どんな国だかも不安、知らないことですからね。そのときはアフガニスタンでも、戦争していました。でも私たちがソビエト行ったら、家族全員が揃いますから、もう後でどうなってもいいことです。

主人は１年間の契約で約束してましたから、ポーランドに帰ることは無理でした。契約はそんなに簡単に破れませんからね。だから、私たちがソビエトに行きました。でも大丈夫だったわ。行って良かった。だって、ソビエトに主人がいたから、だからそこに行ったんですもの。本当に何にも起こりませんでした。そのとき、すぐ連帯の活動が倒れて、禁止されました」

〈そのときの連帯の活動について、あなたはどう思いますか？〉

（エウゲニュッシュ）「いまは、連帯の活動はかなり広がってるよ」

（アンナ）「いえいえ、いまじゃなくて、あなた、ソビエトから戻ったとき、どう思いましたか？」

（エウゲニュッシュ）「そのとき、連帯は権力に接近すると思ったな。選挙をすると信じていたよ。ただ、その連帯の活動は、権力を手に入れるために、ちょっとのんびりし過ぎたと思うな」

〈そのとき、あなたは連帯を支持してましたか？

（エウゲニュッシュ）「はい、もちろん支持していたよ」

（ハリーナ）「でも私は、連帯を推薦しなかったの。私は、反対でした」

〈それじゃあ二人の考えは違って、ちょっとした家庭戦争でしたね？〉

（エウゲニュッシュ）「いえいえ、そこまでではなかったよ。連帯は労働者に土曜日にはたらかないと決めたんだ。土曜日は休み。だから、俺は連帯を推薦したんだ」

（ハリーナ）「私はその反対よ。土曜日の休みのこと、賛成できないわ。今もよ」

（エウゲニュッシュ）「連帯を推さないというのは、連帯も嘘ついてるって思ってるからだろうな。どっち側にしても、国民に嘘ついてるから支持しないのさ。みんなできるだけ嘘ついていますからな。上の人たち、偉い人たちは、どんどん肥えて、いろんな品物を手に入れて、金持ちになる。しかしただの国民には、どんどん厳しくきつくするだけ。日本にもそんなことあるでしょう？　ポーランドはいつもそうさ」

（アンナ）「そう、あなた正しいわ」

（エウゲニュッシュ）「どういうところが？」

（アンナ）「みんな嘘ついてるってところ」

（エウゲニュッシュ）「そうだ、そうだ。ポーランドもそのときは、何でも壊されてたからな。人も腐ってたよ。ポーランドには何にもないのに、ポーランド統一労働者党だけはあったからな。その人たちは、みんな遊んでばかりだ。外国へ行って自分で遊んで楽しんでいたよ。労働者党もいろいろやってるさ。楽しくね。連帯も、ほかのところもな。だからカトリック教会も、政治家もみんな自分の道を選んで、外国へ行ってる。残念ながら、その外国の旅行の金は、俺たち国民が出してるのさ」

〈ではエウゲニュッシュさんは、どんな点で連帯を支持しているのですか？〉

（エウゲニュッシュ）「俺はいつも連帯の方に向いていたな。連帯は公正な組織だ。もちろんポーランド統一労働者党よりはね。いまテレビや新聞で、いっぱい本当のことを書いてあるよ。本当のことが聞ける。オバタリアンのように喧嘩していますばっかりだ。ときどきテレビを聞くだけで恥ずかしくなりな。インテリ、大学教授のような人たちも、テレビでそんなふうに喧嘩してるばっかりだ。恥ずかしい限りだよ。自分の尻を触りながら喧嘩だ」

（ハリーナ）「あなた、でも、雷のような議論がないとだめなのよ」

（エウゲニュッシュ）「いやいや、あれは議論なんてもんじゃない。ただの喧嘩だろ。それから、連帯に賛成するのは、労働者の味方なっているからだな」

〈ああ、そうですか〉

（ハリーナ）「でも、あなた、値段がどんどん上がっているじゃない」

（エウゲニュッシュ）「それは必要なことなんだ。インフレを抑えるためには必要なのさ。ポーランドが本当の金になるためにな」

（ハリーナ）「いいえ、いいえ、私、そういうこと知ったことじゃないわ。ちょっとき

つくしないと、値段がまたどんどん上に上がるのよ」

（エウゲニュッシュ）「このごろ、値段は少し収まっただろう」

（ハリーナ）「そうですか？　今日市場に行ったでしょう？　肉がいくらだったか、あなた、自分で知ってるでしょう？　１ドルの値段、最初は1000グロッシェでした。その後、２週間経って2000グロッシェになったんです。つぎに3000グロッシェよ。つぎの週は5000グロッシェ。そして8000グロッシェよ。だから、もう追いつけない状態になっていました。あなた、大きな変革があったから、小さいものももれなく変わるでしょう。何も変革ではないのよ。ただグロッシェの値段を守ろうとしただけ。私にはそれ、ぜんぶ気にいらないのよ」

（エウゲニュッシュ）「そうです。俺はお気に入りです。俺は、これからきっとよくなると信じてるさ。人生はまだ長い。見ていようぜ。ソビエトから帰って、俺はずっと同じところで、同じふうに６年間はたらいていたよ。86年まで。はい、そう。俺、仕事辞めて、自分の会社作ろうとしたんだ」

〈自分で仕事を辞めたんですか？〉

（エウゲニュッシュ）「はい、そう。自分で辞めて、友だちと一緒に自分の会社を作ろうとしたんだぜ。一つの機械を借りて、その一つで仕事を始めたのさ。機械は協同組合から借りてきてな。古くて、もう捨てることになってたやつを」

〈それは何か工作機械でしたか？〉

（エウゲニュッシュ）「そう。自動機械の…」

〈国営企業の賃金が安かったから、自分の会社を作ろうとしたということでしたね？いちばん大きな理由は〉

（エウゲニュッシュ）「そうだよ。理由は１つだけさ。他に理由は別になかったよ。後は俺が知ってるラドムの職工がたくさんいて、その人たちが自分の工作所で一生懸命、真面目な仕事をしてるのを見たら、俺もそうしたかったんだ。自分の工作所を作って、真面目に一生懸命、良心的な仕事したら、いつかしっかり自分の足で立つことできる。しっかり自分の足で歩けるようになる。そんなふうに考えたんだな。その人たちはどんどん金持ちになっていくんだ。だって16時間はたらけば、あとは賢い考えさえあれば、なんとかなるだろう。利口な、しっかりした考えが必要だと思うよ。

〈あなたは、国営企業ではたらいていたとき、ラドムにいる職人の生活や仕事も見て、自分の工作所を作ることを決めたわけですね〉

（エウゲニュッシュ）「そうだな。俺の友だちは、俺のはたらき方とか、考え方とか、俺の腕がすぐれていることを知ってたから、俺にそんな話をもってきたわけだ。友だちは、お前は腕がいいから、希望の持てない仕事は止ろってね言ったのさ」

（ハリーナ）「主人のお友だちが説得したのね。一緒に手を組んで、共同でやりましょうって。主人はそこの会社をちゃんと認めていませんでしたから、自分の会社を作るよう

に説得してくれたの」

（エウゲニュッシュ）「そのときは、ちょっとした土地を買ってたから、そこに建物を立てて工作所を作って、仕事が始まったんだ。俺はほかの職人と同じように、いい職種をもってるし、同じ資格もあるから、自分の会社も作れたんだな。うまいぐあいに、土地もあったからな。それこれと、いろいろ併せて、自分の会社を持とうと決めたのさ」

〈会社を作るためには、制度上どのような手続きが必要でしたか〉

（エウゲニュッシュ）「手続きだって？　それはもう、たくさん、たくさんあったな。うんざりするくらいに。困難なこともたくさんあったしな。いろんな書類が必要だった。例えば、保健所から、消防署から、いろんな許可をもらうとか、いっぱいあったんだ。仕事の安全を守る事務所からも書類をもらったし。この登録の仕方は、いまはよくなったけどね。俺たちは自分の機械を７台もってたんだ。そう、最初は１台だけ借りてたのに。大きな機械は金なるから売ったけどね。そうそう、大きな…」

〈それで、幾らもらいましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「100万グロッシェさ。そのときの値段では100万グロッシェ。その機械はまだ新しくて、１年間使っただけだったよ。当時としては大金だったな」

（ハリーナ）「半年くらいか、いえ、４ケ月くらいだったかしら。主人はうちに給料をぜんぜんもってこなかったの。その頃は、私がうちの者を養っていたの。ああ、やっぱり半年でしたわ。自分の会社から主人が初めてお金もらったのは、12月30日」

（エウゲニュッシュ）「そうだな。俺、その年の７月１日からもう仕事しなかったから、やっぱり半年だ。その初めての金も、もちろんたいしたもんじゃなかったよ。まあまあ、てとこかな。その半年間で、古い機械を修理していたよ」

〈自分の会社からお金をもらってきたのはいつ？〉

（ハリーナ）「12月30日。主人のネームデーのときに、友だちが持ってきてくれました。先生、知ってるかどうか解りませんけど、ポーランド人はお誕生日のときはお祝いしないで、自分のネームデーのときにお祝いするのよ。最初からカレンダーのなかに決まってるの。主人のネームデーは12月30日で、私は７月１日よ」

（エウゲニュッシュ）「それは恐ろしい日付だったよ。そのとき、俺は昼も夜もはたらいてたからな。もちろん、その友だちもね」

（ハリーナ）「いま、主人と同じ会社を作ろうとしたら、たぶんもっと簡単で、もっと楽にできるかも知れないわね。でも、そのときは、いろんな手続きで大変でした」

（エウゲニュッシュ）「俺は溶接工の資格を持ってたのさ。後で金属取付工の資格を取らなければならなかったんだ。まったく馬鹿馬鹿しい。だって俺は１７年間も金属取付工としてはたらいてたというのに。その証拠を書類としてもってなかったから、もう一回、勉強しなければならなっかたんだ。紙一枚の金属取付工の資格は、もってなかった」

〈それじゃあ、何か試験ありましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「はい。俺は半年のコースに通って勉強してたよ。国語、ポーランド語、算数、11か12個くらいのテーマで勉強したよ」

（ハリーナ）「主人は、17年間、その職種ではたらいてたの。でも、自分の会社を作るとき、その証明書が必要になったの。主人は資格のコースで勉強したあとで、その証書をもらわなかったから、もういちどやり直しをしなければならなかったのね。いまは証書、もっていますけど」

（エウゲニュッシュ）「ちょっと考えて見てよ。国営企業で、17年間も金属取付工として、その証書なしではたらいてたんだぜ。しかし、自分の会社作るときは、いくら腕がよくても、証書が無いとだめなんだ。だから、ほんとに頭に来るよ。以前の社会主義の役人は、とても細かな人でな。ちょっとした、紙一枚足りないとだめ。あとで、証書もぜんぶ揃ったときも、また違う問題が出てきちゃってな。必要な書類、あった時、持ってた時、ラドムのちょっと向こうにある俺の仕事場は、洋裁店とか、靴屋とかの店舗として、仕事をやってもいいけど、俺みたいに金属取付工の会社は、なかなか許可してくれなかったんだ、その役人たちは」

〈それはいつでしたか？　会社をオープンしようと思ったときですか？〉

（エウゲニュッシュ）「はい。だから、俺の工作所を認めるために、また裏道を使ったんだ。結局、コネを使わなければならなかったのさ。そうやって、やっと会社がオープンしたというわけだ。どこでも、馬鹿馬鹿しいことばっかりでな。社会主義の時代は、新聞に書いてあったこと、テレビでやってたこと、議会でやってたことと、本当の役人のやり方がいつも違ってたのさ。職人のことについても、いつも本当に何かやろうとしたら、とても大変なのよ。いちど俺が、ちょうど大変な時期にぶつかってたころ、新聞で職工の記事を見つけて読んだんだが、そこには"これからは職工のために緑信号をつけましょう"と、そんなふうに書いてあったんだ。だから俺はやっと楽になると思って、県庁にその新聞を持っていって見せようとしたけど、友だちが"そんな記事どうにもならならんさ。そんなもの、トイレットペーパーの代わりに尻を拭くだけでいい"と、そう言ってたな。ほんとに、そこに書いてたことも、ぜんぶいんちきさ」

〈会社を設立するときは、友だちからお金をかりたのですか？〉

（ハリーナ）「いいえ、お金は友だちからあまり借りませんでした。だいたい自分で頑張っていました。どうしても急にお金が必要になったときは、５万グロッシェとか、10万グロッシェとか、家族から借りることできましたからね。でも私たちは、できるだけ借りないようにしてたわ。どうしてって、主人の会社が成功するかどうか、私たち、ちょっと心配してましたからね。だから、あまり大きな借金になったら、後で困ると思って…」

（エウゲニュッシュ）「従業員は友だちの面識の関係で集めたんだ。例えば、俺のよく知っている人とかね。その人はよくはたらいてるから、雇ってもいいと、そんな相談をしたりとか、あと、家族の関係もあった。うちの従業員は、もう労働者として１人前になっ

た人ばかりだ。試験も受かった人ばかりだし、従業員を雇う前にいろいろ調べて、その人たちが真面目にはたらいてるとか、腕がいいとか、そういうことを（事前に）調べてから雇ったからな。最初の２年は、俺たち２人だけではたらいてたんだ。12時間の交替でね。12時間はたらいて、そのつぎに友だちが12時間はたらくのさ。すると１日中、機械がぜんぜん止まらないで、はたらき続けたんだ」

〈本当に？〉

（エウゲニュッシュ）「はい、そうさ。その１つの機械で、そんなふうにやってたわけだ。そのあとで、もう一台機械を買ってからは、８時間交替ではたらくことなったのさ」

〈あ、そうですか〉

（エウゲニュッシュ）「はいはい。その２台目の機械も古い機械でね。俺たちがちょっと修理して、使えるようにしたのさ。それはもう借りものでなくて、俺たちのものになったんだ」

〈最初に労働者を雇ったのはいつごろでしたか？〉

（エウゲニュッシュ）「２年経ってからだな。２年後に初めて労働者を雇ったよ。２年経ったら生産も順調にいくようになってね。俺たちも、機械でそんなにはたらかなくてもよくなったのさ。だから１人雇って、俺たちは仕事の整備とか、いろいろしてたんだ。例えば材料の準備とか、機械の修理だな。供給とか整備とか、違う仕事をするようになった。その後に、また３台の機械を買ってきたよ」

（ハリーナ）「私は家族を扶養しましたけど、ときどきは主人から、ちょっとしたお金をもらうようになったのよ。主人は、どんどん機械を買ってばかりいましたからね」

（エウゲニュッシュ）「うん。俺はずっと商売に金を入れてからな」

〈何年くらい前から、稼いだお金を家に入れるようになりましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「ううんと、２年間半、３年間くらいかな。この半年くらい前から、少し止めたんだ。会社の半分は友だちが持主だからね。俺たち、仲間は、共同出資者だから」

（ハリーナ）「そう。だから、その友だちと主人が二人で、共同の権利と義務をもっているわけね。二人とも同じ法規で、ずっと同じふうにやっています」

（エウゲニュッシュ）「俺たちは、ちゃんと協約書を書いたんだ。ぜんぶ半分づつ分けることになってるのさ。例えば税金も、収益も。出費、費用、経費も、ぜんぶ半分づつ分けてるんだ。もし床の掃除をするために帚を買うときも、半分づつ分けて買うのさ。もちろん友だちも俺も、金のことはノートにちゃんと書いてあるよ。金をどんなふうに使ったとか、いつもメモしてるのさ」

（ハリーナ）「所長も、取締役もいないの。主人とお友だち、二人とも社長なの。二人が同じ権利、同じ義務をもっていますからね。最初からぜんぶの経費を共同でやっていました。最初に始めるときも、半分づつでした」

（エウゲニュッシュ）「例えば昨日、俺の仲間がどこかへ行って、従業員のために手を洗う石鹸を買ってきた。ポーランドはいろいろ品不足だから、もし俺や俺の仲間とか、従業員とかが、どこかで工作所で使うものを見つけたら、すぐ買うんだけど、それはあとでちゃんと半分づつ分けるんだ」

〈従業員はいつから雇えるようになりましたか？〉

（エウゲニュッシュ）「２年経ってから、初めて一人雇ったな。その後また三ケ月後にまたもう１人。いまは労働者が３人だ。今年１月から、俺たち、造船所の部品を作ってるよ。俺がどうやって自分の会社を大きくしたかって話は必要かね？　最初から順番に細かく話す必要あるかね。それは、できない話だよ」

（アンナ）「そうね。あなたは話せるでしょうけど、いつも話が長くなるものね」

（エウゲニュッシュ）「今日はちょうど、俺と仲間とで先生［大山］のことを話していたんだよ。日本の鉄道のことなんだけど、先生から俺が聞いた話では、５年前まで日本も国有鉄道だったってことをね。日本でどうやって、その鉄道を民営化したとか。誰がどういう人が、共同とか、株式会社を作って、どんなふうにやったのか。俺たち、そういうことを話してたよ。これから金ができたら、いろんな株を買うといいと思いな。買いますよ。いままでは会社のためにとか、うちのためにとか金を使ったけど、これから株がいいから、いろいろ勉強してるんだよ。株について…」

（ハリーナ）「いま私たち家族は、二つ大きなやりたいことがあるんです。一つはもっと大きな家に移りたいこと。そのつぎは、私が仕事を辞めることね。それが私の夢です。仕事を辞めて、大きな家に住みたいわ。私たちの計画では、今年の終わり頃に、ちょっとした土地を買いたいんです。家庭菜園も一つ買いたいの」

（エウゲニュッシュ）「いまの工作所は、自分の土地だ。会社を作る前は、別荘にしてたのさ。工作所の建物は仲間と一緒に立てたけど、その土地は俺たち家族のものだ。建物は仲間と半分づつ金を出しあってるけど、仲間は土地を俺から借りてるのさ。だけど、友だちからは、その分の金はもらってないんだ。俺の仲間が、もうちょっと金持ちになるまで待ってるのさ。ほかの国だったら、そんなわけにはいかないだろうな。こんどは、もっと金を出しあって、ちゃんとした建物を造りたいもんだ」

（ハリーナ）「それは国に関係ないわ。もしお金をもらうと決めたら、仲間は払わなければならないことでしょう？　その仲間，とてもいい人だし、仕事もちゃんとやってくれるの。主人との関係も、他の人との関係も、とてもうまくいってるわ。とにかく主人の仲間は、とても真面目な人なんです。それが、いちばん大事なことだわ。その方はとても正直で、良心的な人なの。あなた、それを言わなくちゃ」

（エウゲニュッシュ）「会社を作る前は、その仲間とはあまり深い付き合いではなかったよ」

（ハリーナ）「その方は、私の勤めているところの、私のマネージャーだったの。その

方は、主人がいた役所の現場監督官でした。その人の賃金も、とても安かったのね。でも、その国営企業のとき、私たちはいつも仲良くやってたのよ」

（エウゲニュッシュ）「監督はいつも俺のところに来て、一緒に煙草吸ったり、話したり、そんなふうに付き合ってたものな」

（ハリーナ）「以前は技師をしていた方なの。賃金がとても安かったから、技師の仕事を辞めて、腕をまくって12時間ちゃんと頑張ってはたらいてたわ。長い間勉強していたのに、賃金はとても安かったわね」

（エウゲニュッシュ）「俺はいつか、これからやりたい商売のことを他の人と一緒に話してたんだ。圧搾機械を買って、ここ［国営企業を］辞めて自分のために自分の仕事をしたいと。その話が、いまの俺の仲間に聞かれてしまったんだな。俺の声が。それからは、彼は俺にもっと近づいたり、話したり、同じ煙草を吸ったりするようになったのさ。

俺はその監督官にいったんだ。俺、こんな安い賃金で仕事は続けていけないってことをね。彼はいろんなコネをもってるから、例えば機械を借りる必要があるときとか、何か材料を揃えるときは、いろんな人と付き合ってるから助かるわけだ。簡単にいうと、俺の考えたことは、現実になったのさ。彼は書類のこと、他人のこと、計算のことなど、いろいろ仕事をやってるよ。俺のほうは直接生産のこと、仕事の整備のこと、従業員のことだ。彼は前の仕事のときも、頭脳労働者だったからね。だからいまも、彼にはそんな仕事を任せてるよ。必要だったら俺もそんな仕事やるけど、やっぱり僕にそんなの向いてないですからね。彼はいろんなコネがあるし、頭も良くていろいろできる。いま俺たちがやってる会社は、誰かと一緒にやりたかった。自分一人では、やりたくなかったんだ」

（ハリーナ）「もし、彼がいろんなコネがなかったら、主人は最初借りた機械も借りることができなかったの。やはりその方と手を組んで、とても良かったと思います。もちろんコネなしでも、自分の会社はやっていけますけど、そういう人たちは、最初から大金をもってますからね。でも、私たちはそんな大金なかったですからね。大きなお金があればいろんな人たちに、裏道でちょっお金をあげたら、なんとかやってくれるけど、うちはそんな大金なかったですよ」

〈どうしてハリーナさんは何でもよく知ってるの？〉

（ハリーナ）「だって、答え簡単よ。私は主人のやっていることに興味があるからよ。私も自分でずっと前から仕事をしていますし、人間関係とか、いろいろ人生、知ってますからね」

（エウゲニュッシュ）「妻は俺の会社でもはたらいてるんだよ。半分は定職に就いてるんだ」

（ハリーナ）「私たちは、主人の仕事について、いつもいろいろ話してるの。だから、自然にいろいろ解ってくるのね。主人も、別に私にいろんなこと秘密してないから。私は主人の仕事にとても興味があるの」

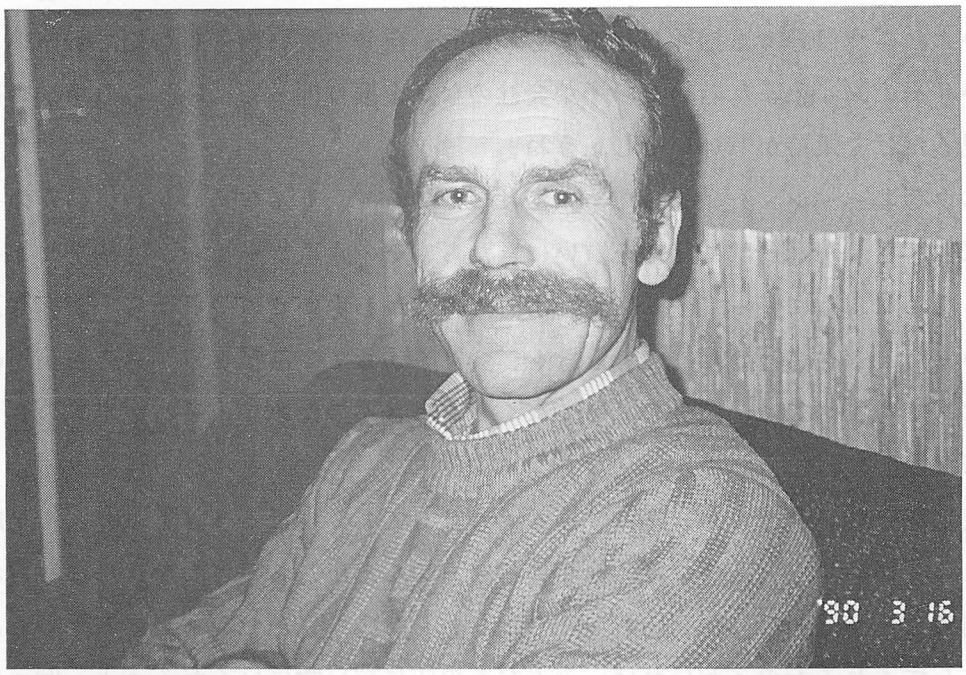


写真５　日本びいきのエウゲニュッシュ・ウローベルさん

〈従業員の仕事の内容を具体的に教えてください〉

（エウゲニュッシュ）「俺んとこの従業員は、国営企業の者より、ずっとよくはたらいてるよ。もっといい仕事をしてるさ。製品もいっぱい作ってる。みんな簡単な、ふつうの仕事をしてるんだ。うちの機械は自動だら、その自動機械に金属で造った棒を入れてしまえば、あとは機械が自動的になんでもやってくれるから、ただその機械の面倒をみるだけでいいんですよ。

機械の番をしてるだけだ。機械が自動的に材料を切ったり、品物を作ったりしているから、労働者はその金属の棒を取り換えては、入れてるだけだ。品物の大きさのことだけは気をつけて、あとは貴金属の棒の切る包丁が、鋏もちゃんと切れるかどうかみることくらいだな。自動機械で仕事してるのが２人。ひとりはネジ山を造ってるだけさ」

〈将来の経営計画があったら話してください〉

（エウゲニュッシュ）「これからの計画は、さっきいったように、いまの会社をもっと大きくして、それを息子たちがもっと新しい技術を入れて、もっといいいろんな品物を生

産できるように、大きくしてほしいよ。子供が会社に入って、もっといっぱい、もっと新しい自動機械を入れて、もっといい仕事の環境のなかではたらいてもらいたいものさ。

それから例えば、購入部には16歳くらいの若い女の子に、ミニスカートを着せて雇ってみたいよ。もう自分でも掃除しなくてもいいし、自分で洗い物もしなくてもいいしね」

（ハリーナ）「そんな若い女の子が会社のなかを振り回って、いろいろ手伝いをしてると、見るだけで気持がちいいでしょうね」

（エウゲニュッシュ）「見るためにだけではなくて、そんな若いかわいい女の子いたら、例えばお客さんが購買部に品物を買いにきたら、その人にコーヒーか紅茶をつくってあげたり、そんなふうに使って欲しいんだよ。そんなかわいい女の子いたら、お客さんは品物を買いたいときも、買いたくないときも、会社を訪ねてくるだろう？　それが男の考え方だ。なんでもすべては、自分のためでなく、お客さんのためだ。それが本当のビジネスのやり方だよ。

例えば商売なるかどうか、座ってゆっくり話してもいいだろうな。お客さんが店に入ってきたら、いいサービスをして、俺がいろいろなんとか、お客さんがなんにも買わないで店を出ることがないように努力しなくちゃな。もし店に、かわいらしい笑顔でみんなにサービスしてくれる女の子がいれば、みんなその店に買い物にいくだろうよ。例えば隣の店で、やくざらしい男だったら、そんな店で俺なら買い物したくないよ」

〈おもしろい話だけど、どうして16歳でなければだめなの？　20歳でもいいのに〉

（エウゲニュッシュ）「もちろん、20歳でもいいさ。だけど、60歳だったらだめだよ。美人で、人目を引く女の子じゃないとだめだ」

（アンナ）「そうですね、おばあちゃんにちょっとミニスカートは無理ね」

〈お父さんの会社をやることは、息子さんはもう決心してるんですね。そのことについて両親に話しましたか〉

（エウゲニュッシュ）「俺はもちろん、息子が会社をやってくれるように、準備はしているさ」

〈心の準備ですか？　息子さんは納得してますか？〉

（エウゲニュッシュ）「息子はそういうこと、よく知ってるさ。ゲラは、いろいろ父親のはたらいている姿を見てるからな。俺は朝から晩まではたらいてる。はたらくのはもちろん大変だけど、賃金もいいだろ？　ゲラは、それをよく知ってるさ。父さんが大変な仕事をしてるけど、利益もいいってことはね。ゲラはよく解ってる。もし俺のはたらいてる会社が国営企業で、そこにずっと仕事が続いてるんだったら、賃金は安いし夢がないからな。未来が。それは、ゲラはよく解ってるのさ。

ゲラの給料は、いまのところ、ただジーパン買いたいとか、いろいろ好きな物を買いたいなら買えるだろうけど、あの賃金じゃ、ちゃんとした生活はできないぞ。いまは私たちと一緒に暮らしてるから、毎日の食べ物と住むところは心配ないからな。あの安い賃金で、

レコードセットを買ったりとか、プレーヤーのセット買ったりとか、ジーンズ買ったりとか、それしかできないのさ。ちゃんと１人で独立して生活したいんだったら、いまはたらいてる会社の賃金では無理さ。いまのところ、ゲラは安心して生活してる。うちのなかもきれいだし、好きな洋服も買える。冷蔵庫はいつも満タンだ。

だから、もしゲラがいつか独立しても、そんな生活を続けたいなら、会社を継ぐしかないんだ。いまの賃金で、もし独立して、家賃払って、洋服も食べ物も自分で買ったら、もう給料ぎりぎりだ」

〈ゲラくんは、あなたの仕事場へ行って、何か仕事を手伝っていますか？〉

（エウゲニュッシュ）「いまのところは、あんまりね。しかし、ゲラは父さんの仕事のことは、よく知ってるんだ。できることはできるんだ。俺と同じ趣味をもってる。しかしいまは、国営企業で少し社会勉強してるのさ。俺もそうした方がいいと思ってるんだ。いまのところは、他人と一緒に仕事してるから、いろいろ勉強になるだろうしな。貧しさとか、仕事の苦しさとか、人の考えとか、俺はそんな勉強をゲラにさせたいんだ。最初からあまり楽にさせたらよくないと思うんだ。いまのところは、ちゃんと決めた時間に起きて、仕事場に行って、いろんな仕事に慣れてきたようだな。それはいい。いま少し苦労しても、いい勉強なるさ。

あとで楽になったら、それを大事にしてくれるだろうからな。いまは朝６時から仕事が始まるんだ。だから、そんなところに慣れたら、自分の会社にも早く起きて行くだろうしな。いまのところは、自分の会社に息子をはたらかせたくないんだ。それ、息子にはっきり言ってあるよ」

〈しかし、将来はどっちの息子に会社を譲りたいんですか？〉

（エウゲニュッシュ）「もちろん２人に譲りたいさ。２人で頑張ればいいと思ってるよ」

〈しかし２人で社長とか、取締役とかの役をうまくやっていけるかな？〉

（エウゲニュッシュ）「うん、それは、仲良くやればできることだ。仕事を分けてな。例えば１人は仕事の整備、供給。そんなような仕事やればいいとか、もう１人は生産のことを考えればいいじゃないですか？　だって俺も、その他人の仲間とうまくやってるしな。だから、ゲラも弟もうまくやるべきだ。兄弟だからな、仲良くやらなくちゃ。１人だったら、ちょっと難し過ぎるし、やってゆけないと思いよ。例えば、１人がいつも会社にいて、人の仕事を見たりとか、いろいろやるでしょう？

しかし、もう１人はいろんなところから材料を集めたり、品物を売ったりとか、外出でやる仕事もある。例えば、俺の仲間は、どっか材料を買いに出ていくと、俺は会社にいて従業員の仕事を見てる。それから例えば、俺の仲間が休暇をとるとしたら、俺は会社にいる。その代わりに、俺が休んでるときは、友だちが会社の面倒をみてるのさ」

（アンナ）「ウローベルさん、労働者をずっと見守らないとだめですか？」

（エウゲニュッシュ）「もちろん、もちろんさ。労働者の管理をしないと、ちゃんとあ

の人たちをいつも見てないと、すぐ仕事場に酒もってくるだから」

（アンナ）「あら、そう、本当？」

（エウゲニュッシュ）「もちろん。いまポーランドで、いくらいい労働者だって、目を離しちゃいけないだ。俺はそう思ってるよ」

〈その労働者の賃金、いくらになってますか？〉

（エウゲニュッシュ）「それは労働者によって、例えば自動機械ではたらいてる２人は、毎月 100万グロッシェもらってるよ。それであんまり忙しくないんだ。ただその金属棒を自動機械に入れて、座って見てるだけだものな。その棒が終わったら、つぎのを入れて。そんな仕事ですよ。もう１人の若い男の子、（ゲラの弟の）マチェイくらいの年の子はそ70万グロッシェ」

〈しかし、ポルメタルでも100万グロッシェ賃金をもらっているは人いるでしょう？〉

（エウゲニュッシュ）「それはもちろんいるけども、何年間勤めてる人かな？　何年間も勤めてる人だろうな？　ポルメタルでも、長い間はたらいてるなら、そんなにもらってるだろうな。息子くらいの者、例えばゲラの給料は43万グロッシェだ」

（アンナ）「だから、息子さんがお父さんの会社ではたらくんだったら、給料がぜんぜん違うでしょう？　79万グロッシェになる」

（エウゲニュッシュ）「そうだな。だから、俺たちはとりあえず、息子を外に出しているのさ。もしゲラが急に買いたいものを見つけたら、親父から金を借りるでしょう。しかし給料をもらったら、給料日にすぐ借りた金を返しにくるよ。はじめに借金返して、残った金でまた何か買う。あいつは毎日の生活費を母さんに渡してないよ。家賃とか、食べ物代とか。俺たちはそれくらいのお金持っているから、そのために子供に金を出してほしくないんだ。

息子はただ無駄遣いしないように、気をつけてるようだな。だ煙草とか、ビール、酒、それだけじゃなくて、やっぱり自分の金で、自分の洋服も買ってるよ。あとは、どこか、遊びとか映画を見にいくとか、そんなふうにも使ってるな。あとは趣味のため、例えばそのプレーヤーセット買うとかね。いまはなんでも高いから、ただ毎日、遊ぶだけの金使いなら、息子の給料は１週間ももたないさ。

例えば、いま履いているズボンを、急にほしくなって買ったんだな。それが22万グロッシェだったよ。そんなに高いズボンは、俺、息子に必要ないと思ったね。ゲラは自分の金で買ったよ。それも、給料の半分も使ってな。そのステレオコンポも自分の金で。もちろん借金しながらだけど、どうしてっていうと、もし給料前に買いたいものが店に入ったら、すぐ買わないと品物なくなるとか、つぎの月に値段が２倍高くなるとかでね。だから、息子に金を貸してやったんだ。しかし、給料日がきたとき、いつもちゃんと借りた金は返してくれるよ。ステレオコンポの返済が３ケ月くらいかかったな」

（アンナ）「日本の両親は子供にとってそんなことしないでしょうけど、ポーランドで

はクレジットで品物を買ったり、銀行で借りることもできないですから、もしご両親にお金があったら、こんなふうに子供にお金を貸してくれるんですよ。ポーランドではよくあることなの。でも、ここにつぎの問題が出くるのね。給料日に、お母さんにすぐ借りたお金を返すでしょう？　そうすると、自分のお小遣がなくなるわね。例えば、レコードプレーヤーはとても高いですからね。そのズボンとかも。もし映画館へ行きたいなら、切符代がないとか、どこかへ外出してレモネードを買うお金がないときは、お母さんかお父さんからいつももらうのね」

（エウゲニュッシュ）「でも、それはいつもあま大金ではないのさ。例えばレモネード代2000グロッシェとか、3000グロッシェとか。俺はこんなふうにした方がいいと思うんだ。つまり、もし息子が自分の給料をもらって、大きな品物も買わないで、その給料をもちながら、あっちこっち町を出歩くとしてら、すぐ酒とか、馬鹿の遊びのためとか、煙草代とか、そんな無駄遣いにすぐその金を使う。だけど、こんなふうに、なにか大きな買物して、金がなくなったら、俺たちは少しばかり助けてやるから、なんとか無駄遣いをしないですんでるんだろうな」

（ハリーナ）「息子は2000、3000グロッシェをお母さんかお父さんから、もらってもいいと思っているの。でも10万グロッシェ、20万グロッシェとなると、私のところには絶対もらいに絶対こないの。ときどき息子に聞くんです。”ゲラ、あなた、レモネード代のお金もってるの？”　すると息子が、”いや。お母さん、僕はもうまったく裸だよ”というの。すると私は、息子にに2000か3000グロッシェあげるのね。いま若者たちは、すごくお金を持て歩いてる人が大勢いるでしょう？”あなたも若いんだから、たぶん知っているでしょうけど、それはあまりよくないことね。あの人たちは、酒ばかり飲んでるとか、いろいろ暴れたりとか、いけないことするからよ”っていうの。

もちろんしっかりしてる若者もいるけど、でも、お金をあんまりもち歩いていると、若者にとってよくないと思うわ。子供のために必要なら、私たちはいつでもお金を出します。でも、もし自分の給料を、お酒に使って、私のところにお金をもらいにきたら、もう１グロッシェだってあげないわ。だから、ずっとそんなふうに、必要なときにお金あげて、よかったと思ってるの。

ゲラはこのとおり、とてもいい子ですからね。だから私たちは、こんなふうに家族が助けあいながら生活しているの。ゲラは私のお手伝いをして、ちゃんと掃除もできるし、夕飯を作ることもできるのよ。ケーキを作るときも、手伝ってくれるわ。弟のマチェイもそうですよ」

（エウゲニュッシュ）「だから息子たちも、いつかいい夫になるだろうな。俺はそう思うんだ。女房のいいお手伝いちゃんに」

（ハリーナ）「私はずっとそんな躾をしてるの。子供にとって、それがいちばんいいと思ってますからね。でも、それが本当に正しいかどうか解りませんけど」

（エウゲニュッシュ）「そんなふうにしてたら、大丈夫だろう」

（ハリーナ）「ただ、ゲラはあまり勉強をしたくないですから、そんなところ、ちょっと困ってます。このごろポーランドでも、麻薬中毒、アルコール中毒になっている若者がすごく増えてますから、いろいろ危ないですね。でもゲラは、少しお利口になったと思うわ。私はいつもその勉強のこと、いろいろゲラに話しかけてるわ。でも、それだけではなくて、ゲラは自分でもいろいろ世の中と、毎日の生活のことを勉強していますから、勉強についての考えもどんどん変わってくるでしょう。いままであまり勉強しなかったのは、ちょっと友だちのせいもあると思うわ。この頃は、どんどん考えが変わってきたみたいね。

今年の９月から、ゲラの勉強がはじまると思うの。学校に行くと思います。私の目からみると、どんどん勉強をやる気がでてきたの。もうちょっと、あと一息。例えば、誰かのように賢明で、お利口な人がきたら、ゲラはその人にことがとても気になるのよ。例えばあなた（アンヂュジェイ）のことよ。まだ若いのに、いろんな言葉で喋ることできるから、そんなばあいだったら、ゲラはその人を羨んじゃうのね。子供って、まだ15、16歳くらいのうちは、勉強がどれくらい必要かまだ解ってないのね。そのときは、まだ違うものに夢中になってますからね。もし私が仕事をしてなくて、家庭のためにもうちょつと多くの時間があったら、勉強のこともなんとか納得させたと思うけど、私が仕事から帰ると、もう16時でしょう。

だから、子供のためにあまり時間をとれなかったの。残念ながら、ゲラのためにも、マチェイのためにも、あまり時間をかけれななかったわ。いちばん時間をとれたのは(娘の)マグダね。娘の教育のために、いちばん多く時間をかけまたの。ゲラとマチェイが生まれたときは休暇もらいましたから、そのとき一番上の娘のマグダが、ちょっと得したと思いますよ」

（エウゲニュッシュ）「俺もいつも、遅くまではたらいてたからな。先生（大山）に教えて下さい。これが、俺のカタジーナ。そこにある写真は、まだまだ小さかったときのだよ。マチェイとカタジーナが写ってる。俺の小さな、かわいいカタジーナちゃん。俺の孫だよ。これが家族全員だ。マチェイ、娘、娘の婿さんとカタジーナちゃんさ」

〈娘さんの生年月日は？　どんな仕事をなさってますか？〉

（ハリーナ）「生まれは1965年６月28日よ。娘はいまのところ仕事をしてないの。育児休暇中ですから。美容室ではたらいてたのよ。給料がいちばんいいんだって。仕事に戻るかどうか、いまのところ解りません。もし、娘の夫が３人の家族のために、ちゃんとした生活ができるほどお金を稼ぐかどうかが問題ね。夫の給料がよかったら、娘は仕事をしないと思うわ」

〈娘のご主人は、どこで勤めていますか？〉

（エウゲニュッシュ）「娘の主人は、運転手さ。勤務先は協同組合の住宅会社だ。しかし、彼は好きでそこにはたらいているんじゃない。そこに勤めたら、いちばん早く自分の

アパートが手に入るからさ。彼はプロの運転免許をもってるから、そこに勤めるられたのさ。アパートもらうために、ほかのことは考えず、自分の職業［専門職種］のことも放っといて、そこに勤めること決めたんだ」

（アンナ）「しかし、もうアパートが手に入りましたか？」

（エウゲニュッシュ）「いや、まだまだ。しかし、住宅労働組合ではたらけば、自分のアパートをもらえる可能性が高くなるんだ。チャンスが増えるのさ。待つ時間も短くなるということだ。彼はそこにもう4年間勤めてるからな。5年間そこではたらけば、自分のアパートがもらえるチャンスがあるな。ふつう、みんなと同等に待つんだったら、20年間は待つことになるさ。だから、大きな違いだ。5年くらい待つだけで。だから、彼はほかのことは捨てて、自分のアパートをできるだけ早くもらえるところ入ったんだ。現在はポーランドで、大学卒とか、自分のよくできる職業とかは、あまり役に立たないばあいがある。どうにもならないばあいがね」

（ハリーナ）「例えば主人の会社で一緒にやってる仲間、その人も、大学を卒業して技師をしていたけど、国営企業の賃金では生活できませんでした。だから、仕方なくその会社を辞めて、主人と手を組んで、2人で会社を作ったのね」

（エウゲニュッシュ）「俺の会社の仲間は、大学卒業するまで、ずいぶん苦労したんだ。勉強したくても、金があまりなかった。（大学時代は）ワルシャワに、週2回通ってたんだな。ワルシャワに泊まる金がなかったから、電車で帰ったりしてな。電車代の金もないときがあったから、夜遅くなっても道に出て、ヒッチハイクでワルシャワに通たっりしてね。ワルシャワからラドムに帰るときもだ。そんないろいろ苦労して大学を卒業しても、やっぱり生活するには役に立たなかったよ。賃金が安くて、辞めるしかなかった。その俺の協力者は、技師になってからも、また違う勉強をしていたよ。大きな会社の経営者になるためのコースだったが、それもあまり役立たずで…。

だから、彼は袖をまくって、いくらたいへんな汚い仕事でも、俺と一緒に汗を流してはたらいてたな。どんな仕事しても、流した汗の臭みは、みな同じ。彼はいまそう言ってるよ。笑いながらね。だから、現在のポーランドでは、自分の職種に関係なく、ただ金を稼ぐために、家族になんとかいい生活をさせるために、どんな仕事もしているのさ。いまのポーランドでは、そんなことよくあることだ。大学を卒業しても給料は安いから、若者も生活のためにいろいろ大変な仕事、力仕事とか、汚い仕事とかしてるんだ。テレビのニュースにもよく出てくるけど、いまの若者は大学を卒業しても、給料が安いから、外国へどんどん行ってしまうんだ」

（アンナ）「ウローベルさん、あなたと、あなたの協力者、いろんなことについて意見や考えが合っていますか？」

（エウゲニュッシュ）「そう、合ってるよ」

（アンナ）「政治についての意見見解もそう？」

（エウゲニュッシュ）「それはもう、そうです。会社や仕事についても、俺たちの意見も考えも同じさ。よく合ってますよ。彼はいい人だ。俺もそんなに悪くはないと思うよ」

（ハリーナ）「２人で互いに補いあってるのね」

（エウゲニュッシュ）「最初のときは、ちょっぴり合わないところもあったけど、やっぱりそんなに長いあいだ仕事をしていると、俺たちの性格がどんどん合うようになってきたんだな。そうなるために、もちろん俺たち努力したさ。しかし、いまはもう仕事もうまくいってるし、考えはほとんど同じさ。仕事のやり方もね」

（ハリーナ）「彼はよく落ち着いてる人。ときどき、ちょっとスローモーションで、なにかやつてるみたいな人なの。うちの主人がちょっと神経質だってことも、彼はよく解っているんですよ。主人が落ち着かないときがあることは、よく知っているの。だから、主人がとても怒って、爆発したときは、彼のほうは黙って聞くだけね。そういうがことできるから、なんとかうまくいくんでしょうね」

（エウゲニュッシュ）「もちろん彼だって、ときどき悪い日もあるさ。なにか気にいらないことあっても、俺みたく爆発しないけど、顔がひどく赤くなるのさ。それは俺もよく知ってるから、そのときは彼を放っといて、彼の足を踏まないように歩いてるさ。とにかく仲良くやってるよ。例えば、彼がときどき間違ってしまったときとか、どこかから帰ってきて怒っているときは、俺は放っておくんだ。”お前、間違ってるぞ” なんて言わないさ。彼のことは放っといて、１日か２日待ってから彼と話すんだ。そうすると彼も落ち着いてゆっくり考えてから ” ああ、俺、やっぱり間違っていました”と、彼はそんなふうに自分で自分の間違いを認めるんだな。だから俺たちの関係はうまくいってるさ。もちろん俺も、なにか悪いことが起こったら怒るけどな。例えば、急に機械が故障したとか、労働者のことでなにか怒っているときは、彼も俺のこと放っておいて、俺が落ち着くまで待ってるというぐあいだな」

〈以前に、公営企業で一緒に仕事をしたことがお役に立ってますか？〉

（エウゲニュッシュ）「いやいや。それは、あんまり役に立たなかった。しかし、いま俺も彼も自分の仕事の分はちゃんとやってるから、うまくいってるのさ。ポーランドにこんな諺があるんだ。”燕たちがそう言った” 。共同会社、有限会社はよくない。俺たちは、この会社をはじめる前、人からいろんなことを聞いたよ。例えば、金はずるいものだとか、人間の欲張りにキリがない。互いに騙されるとかね。しかし、俺たちのところは、そんなことまったくないよ」

（エディタ）「みなさん、私は通訳でちょっと困っています。もうちょっと簡単な言葉で話してください。お願いします」

（アンナ）「あなた、心配しないで、この話しはぜんぶ録音していますから、あとでもういちど先生(大山)が（翻訳を）やり直してもらいますからね。そうでしょう。私がいったとおり、先生は本を書くつもりなの。先生は日本の家族のことも、同じように、最初イ

ンタビューしてから、後で本を書いて出版したのよ。目的もなしに、先生、そんな仕事しないでしょう」

（ハリーナ）「人の人生は、小説より面白いですものね。私たちは(なにを書かれても)ぜんぜん心配してないわ。だって私たち、別に悪いこと言ってないですからね」

（エウゲニュッシュ）「俺、事実を言ってるだけ…」

〈ポーランド人と話をしていると、とてもよく喋るんですね。日本人はこんなに喋りませんよ。たぶんポーランド人は、これまで自由に話すのを抑えられていたのかも知れませんね〉

（ハリーナ）「そう、そうなのよ。ポーランドの社会はとても自由になりました。以前ならこんな話、とても考えられないことだったと思うわ。すぐ誰かが聞きにくるでしょう。どうして？　なぜ？　もしかして西側に逃げるつもりか？　とか、もしかしてスパイか？でも、いまはなんでも、ふつうの目で見られているの。いまは、なにかを書くとか、話しするときは、とても自由なの。なんでも言っていいんです。いつからと聞かれたら、だいたい２年前かしら。もっと短い一年間半から、いろいろ緩やかになりました。外国も自由に行っていいの。前、あなた覚えてるでしょう？　例えば、私がソビエト行きを決めたとき、いろいろとても大変だったこと。あなたは向こうでいろいろな手続きをして、こっちもいろいろ大変でした」

（エウゲニュッシュ）「いまは、俺たち、どんなところも自由に行ける。金さえあれば、行きたいところ行かれるさ。ソビエトじゃ、いまでも外国へ行くのは大変さ。俺、ソ連にいるとき、あちこち、あまり行くことができなかったものな。仕事をするところだけさ。ちょっと周りだけは、動いてもいいことなったけどな。ソビエトに行ったら、共和国から別の共和国まで行けないんだ。いつもどこでも、登録しなければならないし。ほんとに自由になったな。好きなこと、思ってること、なんでも書いてもいいしね。例えば、偉い人が悪いことしたら、それははっきり言ってもいい。例えば〝お前はブタ〟。先生に失礼だけど、こんなふうに書いていいですよ。〝俺のお尻にチューしてね〟」

（ハリーナ）「あなた、そんなこと、やっぱり書いちゃいけないわよ。お巡りさんに注意されるるわ。そんな汚い言葉」

（エウゲニュッシュ）「これくらいならいいだろう。その前にことは、俺もその時代を覚えるんだが、ちょっとひとつ、悪い単語を使ったら、そのとき、秘密警察がやたらと強かったんだ。ちょっと一言言ったら、すぐその秘密警察がきて、人を調べたりとか、刑務所に入れたりとか、人を消したりとか、そんなことがよくあったんだよ。ポーランド人は昔から、こうして集まって話しするのが大好き民族なのさ。だから本気で、心を開けて話しをするんだな。ポーランド人の特徴だな。もちろんポーランドにも、あまり喋らない人もいるけどね。一つの単語を高く売れる人もいるけど、例えば俺はそんな人じゃない。どこでも、自分の家にいるのと同じふうに話しができる。やっぱりポーランド人は、そんな

民族さ。話しが大好きな…。仲間との付き合いが大好きで」

（アンナ）「そういうこと、先生、きっとよく知っていますよ」

（エウゲニュッシュ）「アメリカ人やドイツ人がポーランドにきて、そういってるよ。ポーランド人はもてなし好きの民族さ。いつもパーティとか、いろんな付き合いとか、いつも楽しくパーッとやってるしな。俺たちにとって、遊びのための金はないからね」

〈そういえば、ドイツ人とかアメリカ人は、ポーランド人ほど明るくないですね〉

（エウゲニュッシュ）「俺はずっと前のことを覚えてるんだが、《おしん》（というテレビ番組）をみたときのことだけ、ポーランド人も前の時代には、家族で、仲間で、同じふうにみんなで酒を飲みながら（日本と）同じふうにしてたさ。俺たちみたいなふつうの労働者の家庭は、別になにも悪いことしてないから、隠すこともないのさ。しかし、スターリン時代のときは、お隣さんと一緒にそんなふうに自由に話すことはできなかったよ。怖かったしな。しかし、それは俺のおやじの時代だ。俺たちはそのとき、まだ子供だったからな。それも45年、55年くらいまでだな。そのときは、例えば俺はあまり言うこともなかった。その頃の時代は、ほんとに大変だったらしいな。なにか一言、まずいことを言ったら、もう夕方には、その人の家に秘密警察がきたからな。しかし、そんな悪いやつ、スパイみたいなやつは、どんな民族にもいるだろうよ」

〈ほかにポーランド人の特徴といったら、なんだと思いますか？〉

（エウゲニュッシュ）「ほかにポーランド人の特徴といったら、やっぱりポーランド人は酒飲みということだろう。ポーランド人は、どんなことにも能力のある民族さ。なんでもできる民族だな。必要なときは、なんでもやるさ。例えば平和なとき、酒飲んで一生懸命遊ぶ。しかし、戦いの時代がきたら、一生懸命に戦うってわけだ。信心もあって、一生懸命お祈りもするしな。楽しいときは、一生懸命にダンスをするさ。ポーランド人はよく戦争をしてたから、歴史上は民族として、性格が日本人とよく似てると思うんだ」

（エウゲニュッシュ）「いいえ、あなた、それはやっぱり違う。それは事実かどうか、先生に聞いてみないと…」

〈酒飲みのことですが、日本には"酔っ払い天国"ということばがあるほどよく飲みますよ〉

（エウゲニュッシュ）「酒好きなことは、似てるよな。日本人もよく飲むしね。しかし、俺は、ちょっと先生に日本人の侍の時代の話をしたいんだ。この前の戦争のときも、日本人は頑張った。俺は尊敬してるんど。例えば、カミカゼ（神風）だ。カミカゼは日本人しかできないことさ。日本人は勇気がある民族なんだ。戦いのときに頑張る民族だと思うんだ。ポーランド人も同じさ。戦争のときは、ただのビンにガソリンを入れて、戦車と戦ったんだから。そんな戦いをすれば、ポーランド兵隊はかならず死ぬことは知ってたんだけど、頑張って戦ったからね。戦車が爆発すれば、その人も死ぬ。

日本人は、はたらき者が多いしな。ポーランド人もはたらくのは好きさ。しかし、いつ

も国を治める人たちは、ユダヤ人とか、ほかのの悪い奴ばかりでな。ポーランド人は父のような、利口な政府があったら、ちゃんとはたらくさ。ユダヤ人とか、ソビエト人じゃなかったら。ポーランドの政府は、これまでもあまりよくなかったのさ。
後は、ポーランドいつも、ほかの国に人に統治されるだろう。日本はいつも日本の人種だけだものな。本当の日本人が国を治めている。日本の血が、日本の政府のなかに流れているだろう。日本の国は、日本の血が国を治める。ポーランドとぜんぜん違うね。いい主人いることが、国にとって必要だからな」

（ハリーナ）「あなた、なに。それ、ユダヤ人のこと？　ユダヤ人の、誰でした？　私はよく解りませんよ」

（アンナ）「ポーランド人は、やはりユダヤ人好きじゃないのね。ポーランド民族は定着民族ですよ」

（ハリーナ）「それは、なにも笑っていうことじゃないわね。私はほんとに、そのユダヤ人が、どこかで、なにか悪いことしたかどうか、よく知らないの。いままでポーランドではいろいろあったけど、現在はやっと、なんでもいい形になってるでしょう？　みんなが希望をもってるし、これからは前より、なんでもよくなることをみんなが望んでるの」

〈いまの日本人は勇敢な人も、戦いが好きな人もいないですよ。ウローベルさんは軍国主義の精神を失ってないね〉

（ハリーナ）「そうですか？　主人は軍隊行ったことないけど…」

（エウゲニュッシュ）「しかし、テレビで日本人を見ると、みんなの手が同じリズムで動いてるよ。みんな一緒に。なにか悪いことが起こったら、みんな一緒…。ポーランドもそうだな。ポーランド分割のあと、戦争のとき、ポーランド人はすぐ一緒になって、力をあわせて敵と戦ったからな」

〈いやいや。日本人はすぐに白い旗を揚げますよ〉

（エウゲニュッシュ）「白い旗だって？　俺はそんなこと信じられないよ。ポーランドはそんなこと考えられないな。日本人も、ポーランド人もそんなことしないさ。俺ちょっと話を間違ってるかも知れないな。しかし、日本人は素晴らしい民族だと、俺はやっぱり信じているよ。あんなに一生懸命、力をあわせてはたらいているからな。日本人はいろんなものを作り出して、世界に売り出してるから、なんでもできる民族じゃないのか。日本の経済、日本の感性、とてもいい。だから日本は、あんなに豊かな国になったのさ。工業も素晴らしい。貧しい民族は、戦争をすることになったら勝てますか？　できないだろうな。勝てるのは、豊かな国だけさ。簡単に解ることだよ」

〈ポーランドでは《おしん》のテレビをみた人が多いんですが、どういう点で共鳴するのですか？〉

（エウゲニュッシュ）「《おしん》という映画が面白かったのは…。俺は日本があんなに貧しい国だったとは知らなかったんだ。信じられなかった。ちょっとした米をもらうた

めに、なんであんなにはたらく必要があったんだ。自分の子供まで手放して、奉公に出して。自分の子供を、そんなにさせなければならないとは、俺たちにはまったく考えられないことだ。その《おしん》がかわいそうでかわいそうで、俺、それを見ると胸が苦しかったよ。茶碗一杯のご飯のために、そんなにはたらくなんて。俺はポーランドで、飢えを覚えたことはないな。飢え死にしそうになるってことは、一度もなかったよ。パンを買う金がないって、そんなこと一度もなかった。腹がへってもパンを買えないって、そんな覚えはない」

（ハリーナ）「あ、そう、あなた。じゃあ、あなたはどこで育っていたの？　どこか神さまも知らないところじゃない？　主人の家庭と、私の家庭の人たちは、ちょっと違っていたの。主人の家庭の人は、なにか悪いことが起こったら、戦わないで座って待つことだけしかしない人たちなの。なにもないときでも、仕方がないから待つだけ。うちの家庭とはぜんぜん違うのね。私の家庭は、もしいまいるところで食べていけないなら、違うところ行きましょうと、そんな家族でしたもの」

（エウゲニュッシュ）「僕の故郷は鉱山のあるところさ。鉱山を作るときは、俺の故郷を取られてしまってな。故郷はもうないよ。生まれた土地、畑とか、家とかも、それはもうない」

（ハリーナ）「その鉱山は、私の生まれた村から取られてしまったの。私の両親は戦争の後に結婚したころ、ここにまだ産業がななかったのね。だから両親は、マズーリというところに行ったの。そこには土地も仕事もいっぱいあったから、両親はそこに移ったんです。ちゃんとはたらきたいなら、そこは大丈夫でした。私にはパンないとか、ジャガ芋がないとか、子供たちがおなかをすかして、食べるものないなんて、そんな覚えはありませんね。私の両親はとてもはたらき者だったから、ちゃんとした生活ができるように、いつもとても頑張ってたわ。故郷に耐えられないから故郷を捨て、もっと遠く、500キロ離れたところへ行って、そこで、仕事とパンを得たの」

（エウゲニュッシュ）「そんなことをいって、俺の両親に悪いと思わないのか？　みんなそれを聞いたら、僕の両親のことはどんなふうに思われる？　あ、大変だ。通訳が間に合わないね。俺は農民の家庭で生まれたんだ。そこの土地は悪かった。農業するには、土がよくなかったんだ。俺の家族は７人だった。土が悪かったから、ジャガ芋しかできなかたしな。戦争のあと両親は、自分の土地を持つことなったけど、その前は、大きな牧場をもってる主人のところではたらいていたんだ」

〈日本も昔の農民は貧しかったんですよ。７人の子供がいても育てられないから、捨て子といって、その子が幸せになるために路上に子供を置いて、他人に拾ってもらうこともあったんです。年寄りも捨てられたりしました〉

（ハリーナ）「あ、そう。私もポーランドのテレビで、そんな映画をみたことがあるわ。息子が年をとった母親を食べさせていけないから、その母親を高いお山に連れていって、

そこに残してきたという、そんな映画をみ見たことがあるわ。その年をとった母親は、その山の上で、ほかの老人と一緒に死ぬことなったんでしょう？」

〈いまの話は極端な例かもしれないけど、日本の農民の貧しさは1950年クライマデ続きました〉

（エウゲニュッシュ）「現在の日本は、韓国を豊かな国にしたんだ。経済的にね。共産主義のあるところは、貧しいよ。考えられない貧しささ」

〈韓国はいま、アジアの工業国でいちばん活発ですね。ところで日曜日と土曜日は、どんなふうに過ごすつもりですか？〉

（ハリーナ）「土曜日も仕事をしますよ」

（エウゲニュッシュ）「俺もちょっと会社にいって、労働者がどうやってはたらいてるか見にいくんだ。日曜日はテレビをみたり、ビデオをみたりだな」

（ハリーナ）「あと、あなた、教会へ行くことも忘れないでね」

（エウゲニュッシュ）「ああ、そう。教会も行かなくちゃ。時間あれば、うちの仕事も手伝うよ」

〈家庭の仕事をよく手伝いますか。皿を洗ったり、掃除をしたり…〉

（ハリーナ）「主人は家事を手伝ってくれるの。でも、いちばんよくやってくれるのはマチェイね」

〈そうですか、やっぱり下の子ですか〉

（ハリーナ）「マチェイは、ときどきだけ。主人は、たまには手伝ってくれるわ。例えば、窓ガラスはいつも主人が拭いてくれます。私はその仕事、ぜんぜんしませんから」

〈自分の会社でも、皿を洗っていますか？〉

（エウゲニュッシュ）「もちろんさ。だって、労働者は仕事をしなければならないだろう？　電車からよく埃が出るから、俺、帚で床掃除をしたり、布巾でテーブル拭いたり、洗い物したりしてるさ。そのあとは、仲間がやってくれる。そうやって交替で、俺たち掃除しているよ。先生にもうひとつだけ質問がありよ。ポーランドの料理、先生、どう思いますか？」

〈おいしいです。ほんとうに。でも、そろそろジャガ芋は飽きてきましたよ〉

（アンナ）「そうみたいね、先生、今日、ジャガ芋食べなかったわ」

あとがき

筆者は前稿「ポーランド家族の生活史Ⅰ」（ＲＥＣ Technical Report No.2）の「あとがき」で次のように書いた。「ポーランドはかなり自由な社会になりつつある。饒舌なポーランド人といえども、寡黙を強いられていた時代があった。個人が自らの生活体験を、赤裸々に異邦者に語れる環境が、いまポーランドに蘇っている。」　ウローベル一家にかかわる本号の口述の編集作業を終えて、改めて同じ感想を述べたい気持ちになった。本稿のインタビューから明らかなように、秘密警察の監視がなくなったポーランドで、人びとが自由に自己を語り始めた。したがって本資料は、それ自体が現代ポーランド社会の証明である。

本稿の作品もすべて録音テープから起草したものである。本稿の主人公はポルメタル・ガスレンジ工場ではたらく若い金属取付工ゲラ君のはずであったから、標題も「若者たちのポーランド」とした。しかし彼の父親であるエウゲニュッシュさんが話に加わってからは、その饒舌ぶりに圧倒され、インタビューのテーマも日本びいきの彼の生き方へと移っていった。しかしゲラ君の友人たちとの会話のなかに、現代ポーランド社会のゆらぎ現象が如実に投影されていると考えて、最終的には当初の標題に落ち着くことができた。

口述にみられるように、一方では経済発展による日本の豊かさやハイテク、また他方では『おしん』や『楢山節考』にみられる貧しかった日本のイメージが、現代ポーランド人がもつ日本への一般的な知識である。インタビューの収録にあたっては、そうしたポーランド人の関心のほかに、ポーランド人の日常生活の営みが克明に伝わるように、ささいな会話もできるだけ丁寧に拾うように努めた。

本稿の責任は前稿と同じくすべて筆者にある。この資料を利用される方や、読まれた方は、実名の話者であるウローベル家の人びとに迷惑をかけることがないようとくに、格段の配慮をお願いしておきたい。

LIFE HISTORY OF POLISH FAMILIES II

Nobuyoshi OHYAMA *

This article is a sequel to the author's previous work [1], in which are contained two life stories of Polish peoples ; (1) "In the Common Nest:Life History of A Job Leader ", and (2) "Conflicts Stampped In : War Experience of A Mother and Her Daughter". The author's next work in this paper is entitled as (3) "Poland for the Young : A Scenery of A Certain Family". In the year 1990 the author invited a young worker who works in nationarized industry of gas cooker machine located in Radom City, and met his parents and two friends. They could have been good interviewees and wonderful characters in the present story involved.

Briefly stating, the contents are the way of everyday life and the youth culture of contemporary Poland;their pleasures of a happy home, occupational careers and ambitions, thier interests in affluent life and high technological achievement in recent Japan, and so on. By reading the paper through, readers including many students of humanities would get the newest data and informations on the present state of Polish society.

Notes :

1) Nobuyoshi OHYAMA(1993), 'Life History of Polish Families I ', REC Technical Report No.2, pp.1-51, Hokkaido Research Center of Environment and Culture, Sapporo : Seishu Gakuen.

---

* Professor of Sociology, Department of Social Studies, Seishu University, Sapporo, Japan

Nobuyoshi,OHYAMA, Life History of Polish Families Ⅱ/REC TECHNICAL REPORT No.00010
[SS360] March,1994, HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE
SEISHU GAKUEN, SAPPORO, 004 JAPAN.

○執筆者紹介

大山　信義（おおやま　のぶよし）
北海道環境文化研究センター所長
静修女子大学教授

平成６年３月１５日　発行

編　集：北海道環境文化研究センター
発　行：(学)静修学園　和野内　崇弘
〒004 札幌市豊平区清田4-1-4-1 ☎(011)881-2721